
密使海を渡る

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

密使海を渡る

【Nコード】

N6390D

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

「妖精大進撃！」に続く「魔女クラリス物語」第2話。海峡の貿易利権を巡って三つどもえの紛争勃発！大国ラピスまで欲望をちらつかせてこのまま戦争突入！？平和を託されたのは大男のクマと小さな魔女！

第1章 命名式(前書き)

地図を作りました。

画像(600*450px)はこちら <http://eiggatwo.up.seesa.net/image/MAP.gif>
ブログの記事はこちら <http://eiggatwo.seesa.net/article/83461215.html>
です。

今回は地理的政治的にごちゃごちゃめんどくさい話ですので特に前半はさらっと読み流してください。

第1話を読んでないとさっぱり分からない話なので先に読んでくださいますことをお願いいたします。

第1章 命名式

前回のあらすじ。

伝説の黒魔女の娘クラリスは9歳。今はオーロラ姫の妹分としてロヴィーク国のエメラルド城でいっしょに暮らしている。

空から降ってきた星が妖精の国に落ちて妖精が大量発生した事件もクラリスの活躍（余計なお節介？）で一件落着。・・・海にいろいろお荷物を残してきたようだけど・・・だいじょうぶ？

2ヶ月後。

オーロラ姫に待望の赤ちゃんが産まれました。

男の子です。王子様です。

国中に喜びが報せられ、国民は皆お祭り騒ぎです。

さっそく妖精の国にも報されました。・・・まあ、勝手に聞きに来るのですが。

王子のお披露目である1ヶ月後の命名式、妖精の国から女王様の使者として一人の妖精がやってきました。それは・・・

前の日。

「やつほー、クラリス。おひささ」

勝手に窓から入ってきて気軽に挨拶したのはサファイアの精です。

「こんにちは、サファイアさん。お久しぶりです。で、今日はどちらから？」

「妖精の国からよ」

「あら、やつぱり帰ってたんですか？」

「ラピスは嫌いなんだってば」

「ルピネーさんはずっとラピスなんですか？」

「うん。そうみたい。あいつもすっかり忙しくなっちゃって、つま

んない」

「立派になってサファイアさんも鼻が高いでしょう？」

「ああいう立派な方方はね、興味ないの」

肩をすくめるサファイアの精にクラリスはフツツと笑いました。

呑気で遊び好きで飽きっぽい、いかにも妖精らしい妖精です。

サファイアの精はラピスの政治家ルピネーの名付け親で・・・というのは前回もチラツとお話ししましたが、今回はこのルピネーが重要な役割を担うことになりますのでおいおい紹介していきます。

さて前回の事件でオーロラ姫の護衛に着いていたサファイアの精は、事件解決後、エメラルド城のあるエメラルドタウンとロヴィーク国の首都カンパニアで遊んでいましたが、その後妖精の国に帰っていたようです。

「王子には会ったの？」

「両方とも会ってきたわよ」

生まれた王子様と父親のシルバー王子です。

「姫さんもすっかりお母さんの顔になってたねー」

「そうね」

クラリスは王子が来たので親子三人水入らずになるよう遠慮して城内を散歩をしていたのでした。

「シルバー王子もデレデレね」

クラリスも思い出して微笑みました。王子もずいぶん苦惱を味わった末の今の幸せですから関係者の一人であるクラリスにも感慨深いことです。

「国もお祭り騒ぎね！ あたしああいうのだけいい好き！」

オーロラ姫が目覚めてからお祝い続きで、これまたけっこうなことです。

「妖精たちもいっぱい遊びに来ているわよ」

「またこの間みたいな騒ぎにはならないでしょうね？」

「ないない」

サファイアの精は笑顔で手を振りました。

「あ、ところでさ、知ってた？妖精の木のこと？」

クラリスはうなずきました。

「リラさんから聞いたわ。またいっぱい妖精を生むようになったんですって？」

サファイアの精はうなずきましたが、深刻な様子はありません。

「いっぱいだったって、あんなにいくつぱいじゃないけどね」

星の光とクラリスのせいでしょう、妖精の木は複数の妖精を生み出すようになりました。つまり、これまでサファイアの精ならこのサファイアの精が一人いるきりでしたが、それが2人も3人も生まれるようになったのです。

「そうそう、あなたにいい報せがあるのよ」

サファイアの精はニコツと笑いました。

「写し鏡の精が生まれたのよ」

「まあっ！」とクラリスは嬉しそうに手を合わせました。

「今度はどんな子？ またひねくれ者？」

「正反対」

「すぐいい子ってこと？」

「いいえ。やたらハイテンションな明るい子と、物静かな暗い子。

双子なの」

「まあっ！」とまたクラリスは手を叩きました。

「早く会いたいわね！」

サファイアの精は意地悪にニタツと笑って言いました。

「さあ？ いつ会えるのかしらね？ なにしるあなた、当分妖精の国に出入り禁止だものねえ？」

クラリスは途端にむっつり不機嫌になりました。

「どうせわたしは鏡の精の協力なしでは妖精の国に行けませんもの。フンッ」

前回の事件で女王様の勧告を無視して勝手なことをして大迷惑をかけたので、お仕置きに当分出入り禁止処分になったのです。

「なによなによ、頼ってきたのはそっちじゃない。押し付けといて

ひどいわよ」

「最後は助けてやったんだからおあいこでしょう?」

「分かってるわよー」

クラリスだつてちよつとは反省しているのです。それというのも・

「あ、サファイアだあ」

「ハロー、おチビさん」

「チビじゃないやーい!」

飛んできたのは火花の精ヴァイオレットです。

「はいはい、ごめんなさい。元気そうね、相変わらず」

「うん! あたいはね。あ、知ってる? こいつさあー」

ヴァイオレットがクラリスを見てニヤ〜ツと笑ったのでクラリスはまたむっつりしました。なにになに? と好奇心旺盛に訊くサファイアにヴァイオレットは目を笑わせて言いました。

「あれから1ヶ月寝たつきりでさ、そろそろお姫様に赤ちゃんが産まれるって気が気でなくなつてさ、無理やり馬車で帰ってきて、それからもずーっと寝たきりでお姫様の方がお見舞いに来てたんだぜ。お姫様が産気づいてからようやく起き出したんだ。なあ?」

「はいはい、その通りです」

あんな無茶をしたせいです。体がまったく動かなくなつて、まるつきり病人でした。今もまだ本調子でなくリハビリ中です。

「それはたいへんだったわね」

サファイアは笑わずに心配してくれました。

「だいじょうぶなの?」

「はい。もうだいじょうぶです」

クラリスは元気な笑顔を見せました。

「ところで、名付け親には誰が来るんです? もしかして、サファイアさん?」

一人の妖精はその人間が生きている限り一人の人間の名付け親にしかねない決まりでしたが、今のダイヤ女王様になってからその

決まりは撤廃され、妖精は自分の責任で何人でも人間の名付け親になっ
ていいことになっていました。

「違う違う。ちょっとねー、ヤな奴が来るわよー」

サファイアは「イ〜〜」という口をしました。

「誰です？」

「金よ」

唇を突き出して言いました。

「あ〜、まったく、ヤな奴う〜〜」

クラリスは小首を傾げました。金の精にはまだ会ったことがあり
ません。どちらかというとおっとりした、性格のいいサファイアが
こう言うのですから相当なキャラクターなのでしょう。

「わたしの方からもあなたにお知らせがあるわ。ラズベリー大伯爵
ご夫妻が来ていらっしやるわよ」

サファイアは「ゲツ」と飛び退きました。

「あのじいさん!？」

「こちらら」

クラリスは苦笑しながらサファイアを睨みました。まあ、クラリ
スも同じような気持ちですが。

「天下の大伯爵様に向かつてなんですか」

「いるの?ここに?」

サファイアはクラリスの背中に隠れるようにキョロキョロして言
いました。

「今はカンパニアよ。明日王様ご夫妻といらっしやるわ」

ここはエメラルドタウン。今回の王子の命名式はエメラルド城の
シルバー王子のスタッフがメインになって取り仕切ることになって
います。お城のみんなは大張り切りです。

ここエメラルドタウンは2年前に突然エメラルド城が丘の上に越
してきて、それから何もない原っぱに建設が始まった町です。です
からまだまだ未完成で、シルバー王子とオーロラ姫の結婚式はカン
パニアで行われましたから、今回の命名式がこの町初めての大きな

行事で、国の次の時代を担う新しいスタッフと共にこの町自体も国中に、さらに外国に、お披露目になるのです。

エメラルドタウンは何もなかったところに作るだけに全体がよく計画された美しい町になる予定で着々工事が進んでいます。

サファイアは苦笑そうに笑いながら訊きました。

「アナトリーは？」

「ラズベリーアールでお留守番よ」

「そっかー。。。じゃ当然ママさんも？」

「当然ね」

「ふうーん。。。ま、しょうがないわね・・・」

サファイアはまた苦笑そうにため息をつきました。アナトリーについてはまた後で。

翌日、命名式当日。

エメラルドタウンは町始まって以来の大勢のお客さんを迎えました。しかしそもそもエメラルド城そのものが可愛らしい宮殿で、大勢のお客さんを内部に呼べるほど広いホールもありません。そこで命名式は中央の広場にステージを特設して行われます。お天気とオーロラ姫母子の体調が心配ですが、そこは妖精たちが味方してくれていますからだいじょうぶです。リラの精が付きつきりで、この実に人間くさい妖精はかわいい赤ちゃんの誕生が嬉しくてたまらないようです。・・・またまた王妃様が張り合って周りの者たちはとばかりを受けて迷惑この上ないですが。

オーロラ姫とフランシー王子・妖精の女王様から賜る名前と別に両親からこの立派な名前が与えられていました。もっともオーロラ姫にもイリーナという名前があったのですが、みんなにオーロラと呼ばれるので本人さえその名前をすっかり忘れてしまっているくらいでした。姫と王子はステージの後ろのテントで出番を待っていて休んでいました。外のウキウキした雰囲気揺りかごの中のまだまだ首のすわらぬ赤ちゃん王子は早くも興味津々のようで大きな目をキ

ヨロキヨロさせています。「お猿さんみたい」とオーロラ姫は自分の赤ちゃんをからかいます。たしかに目ばかり大きく貧相に見えなくもないですが、

「あなただつて生まれたばかりの頃はもつと目玉がギョロギョロして、それはそれは可愛くない赤ちゃんだったのよ」

とリラの精はからかい、

「この子はきつととつてもハンサムな青年に成長するわよ！」

と自信満々に請け負いました。それを聞いてオーロラ姫も一安心です。もつとも何を言われようと自分の子どもの愛しさに変わりありませんが。

パパパラパーン、と広場の入り口でラッパのファンファーレが吹かれました。

「ロヴィーク国王カリカルド8世陛下、王妃クララ陛下、ご到着」
ラピス国伯爵イーゴル・ラズベリー閣下、伯爵夫人マリアンヌ・ラズベリー様、ご到着」

4頭立ての豪華な馬車から国王夫妻と伯爵夫妻が降り立ち、広場に集まった人々は大きな拍手で迎えました。きらびやかな制服に身を固めた男女の衛士たちに守られて広場前方の貴賓席に案内されていきます。その間も通路の両脇のお客たちは熱狂的な拍手と歓声を送りました。広場は3層に仕切られています。前方のステージに向かって1番前が特に高貴な特別の招待客。2番目が国にとつて重要な招待客で、ここまでで広場の半分くらい。残りの第3層目は一般向けの自由席。ですが、混乱を避けるために事前に抽選を行つて、抽選に当たった人々は大いに盛装してこの栄誉に胸を張っています。ちなみにオーロラ姫の命名式はお城の中の聖堂で選ばれた特別の人々のみの出席の下行われましたから、この度の王子の命名式がいかに国民に開かれたものであるか伺えます。

国王夫妻、伯爵夫妻は先に到着して着席している高貴な方々に挨拶して自分の席につきました。

ステージ・・階段3段分の高さの舞台に立ってシルバー王子が晴

れやかに挨拶しました。形式張った退屈な式次第はなしです。

「お集まりの皆さま、ご紹介いたします、我が妻イリーナ・オーロラ・ルービッシュ・ロヴェーナと、我々の愛息フランシー・ルービッシュ・ロヴェーナです。介添えは妖精リラと我らが友人クラリスです」

人間サイズのリラの精とクラリスに挟まれて王子を胸に抱いたオーロラ姫が満面の笑みで金の飾り門から登場し、広場はひととき大きな歓声に包まれました。王子がびっくりして泣き出さないかと心配しましたが、色とりどりの妖精たちが飛んできて、王子は興味深そうに目で追いました。

妖精たちはひとしきり王子の周りを飛ぶと、空に向かって順々に2列に並び、天から王子の前に道を作りました。

妖精たちの合図でシルバー王子がアナウンスしました。

「妖精の国より妖精の女王の下された名前を携えて息子の名付け親になってくださる妖精が来てくださいます。金の精です」

シルバー王子が手で指し示すと、ピカリと、青空に金色の輝きがして、金の光が妖精たちの作った道を下りてきました。クラリスの肩にはヴァイオレットがとまってクラリスのお相伴しんぱんでぼく々と大観衆（そんなに大きな広場ではないのでそんなに大観衆でもないのですが）の歓迎の榮譽に浸っていましたが、反対の肩にサファイアが下りてきてむっつりと言いました。

「見てごらんなさいよ、あの偉そーな、演出。何様のつもりよ」

クラリスはおかしそうにクスツと笑いました。きつと宝石系の妖精と貴金属系の妖精とは仲が悪いのです。でも、

近づいてくると金の光が人の形に見えてきました。金色の金の精は背中に金色の光の三角形の羽根を生やし、さらに腰からずーっと長く、金色の帯というかスカートというか、とにかくあまり意味のなさそうな飾りの布を伸ばしていました。髪の毛も、人間だったら明らかにカツラだろうという、豊かすぎる金色の髪を高々と顔の3倍くらいの高さに結い上げています。なるほど、見るからに偉そ

うな妖精です。

王子がリラの精に譲られてオーロラ姫のとなりに立ちました。親子の前に下りてきた金の精は、人間サイズのリラの精にツンとあごを反らせると、王子と姫に向かって深々と大仰に腰を折って挨拶しました。

「王子様のお誕生、おめでとうございます。妖精の女王より王子の名付け親の名誉を承った金の精ゴルディーヌでございます」

クラリスは小声で「ゴルディーヌ？」とサファイアに訊きました。サファイアはクラリスの耳に口をつけて囁きました。

「何人も同じ種類の妖精が生まれるようになったでしょ？ それで妖精たちの間で自分に人間みたいな名前を付けるのが流行っているよ。あんたの先生が先駆けね。ま、たしかに同じ妖精同士、名前がなくちゃ不便だからいいんだけど、最初の妖精は、わざわざ、名前なんて付ける必要ないわよ、ねえ〜？」

金の精ゴルディーヌはジロリとクラリスとサファイアを睨みました。耳がいいようです。クラリスは微笑んで軽く挨拶しましたが、無視されました。嫌な感じですよ。

「妖精の女王より預かった名前をお贈りします。

この子の名は、オーロル」

オーロル王子。オーロラ姫と一字違いです。素敵な名前にオーロラ姫とシルバー王子は顔を見合わせてニッコリしました。シルバー王子がお客さんに宣言しました。

「名付け親金の精ゴルディーヌさんより素晴らしい名前を賜りました。オーロル。我が子は名をフランシー・オーロル・ルービッシュ・ロヴィーナと決めました」

長い名前です。王子はこれからオーロル王子と呼ばれることになるでしょう。

広場からまた盛大な拍手がわき起こりました。皆新しい王子の誕生を心からお祝いしてくれています。

「それでは」

ゴルディーヌが偉そうに身を反りかえらせて言います。

「名付け親のわたくしからこの子の成長の手助けとなる贈り物をいたしましょう。ああ、念のため申しておきますが、名付け親がわたくし一人なのは、わたくしが金の精で、力がとても強いいため、他の妖精が必要ないからです。わたくし一人を遣わした女王に他意はございませんので念のため。それどころか、わたくしが名付け親に選ばれたのは女王からの最大級の好意と友好の証です」

サファイアの精がクラリスの耳に言いました。

「ねー？ 嫌な奴でしょう？」

クラリスは苦笑するしかありません。ゴルディーヌはどうせ聞かえているのでしょうがツンと澄ましたまま言いました。

「ではわたくしからの贈り物を。わたくしの贈り物は『成功者の栄光』です」

ゴルディーヌは赤ちゃんの顔の上にかがんで額に祝福の口づけをしました。オーロル王子の額に金色のキスマークが記され、すぐに消えました。目には見えませんが、このキスマークは一生涯残って彼を守ってくれるのです。

ゴルディーヌは自分の役割を終えて満足そうに身を起こしましたが、オーロル王子が唇に触れたゴルディーヌの金の尾をパクツとくわえるとチューチュー吸いました。

赤ん坊のオツパイを吸う力はあなどれません。

ゴルディーヌはズルツとお尻を引き込まれて「キヤーツ」と悲鳴を上げました。オーロラ姫もびっくりして王子を揺すってあやしみました。

「こらこらわたしの赤ちゃん、ちゃんとオツパイをあげるから変な物を吸い込むんじゃないやありません」

ゴルディーヌがキーツ！と怒りました。

「変な物って何よーっ！ こら、ガキ！ 放せ！ わっ、こら、吸うんじゃない！ わたしは食べ物じゃない！ わたしは金だぞ！ おまえ、わたしの価値が分かっているのか！？ 分かっているなら

う？　こら、吸うな、・・イヤ〜ん！」

サファイアはおかしくて大笑いしました。クスクス笑っていたヴアイオレットもたまりません。アーハハハ、と腹を抱えて大笑いして、金の精の道を作っていた妖精たちもいっしょに大笑いしました。

ゴルデューヌが真っ赤になつて目が三角に吊り上がってきたので、クラリスはえい、とオーロル赤ちゃんにオーロラ姫の笑顔と美味しいオツパイのイメージを与えてやりました。オーロル赤ちゃんは不思議そうに自分を覗き込む母親の顔を見て、物欲しそうに口を開きました。

「きゃっ」

ゴルデューヌは突然解放されてクルクル回りながらピューンと空に飛んでいきました。それを目で追ったオーロル赤ちゃんは・・

「きゃははははははは」

突然けたたましく声を上げて笑いました。

「まあ！　笑ったわ！」

「笑ったね！」

両親はまた顔を見合わせて笑い合い、リラもニッコリ微笑みました。お客さんたちも赤ちゃんの初笑いの元気な声にニコニコしました。

空から戻ってきたゴルデューヌは、

「このクソガキが！・・コホン。ホ、ホ、ホ。ど、どう？　赤ちゃんを笑わせてさしあげたわ。この子は将来大物になるわよ！　わたくしの力の大きさが分かったでしょう？」

と大威張りしました。金色の尻尾はだらりと垂れてぼたぼたオーロル赤ちゃんの唾液を滴らせています。

まあたしかに大物になりそうね、とクラリスも赤ちゃんの笑い声を聞きながら思いました。

面倒な式典は終わり。高貴なる方々と特別のお客様方はお城の中に案内され、ご馳走が振る舞われます。

広場では引き続きお祭り騒ぎです。楽団が演奏をはじめ、楽しい音楽に合わせて男女がペアになってみんなで輪を作って踊り出しました。

オーロラ姫の子ども頃とは妖精たちの数が全然違います。妖精の国のうるさい規則もなくなって、このお祭り騒ぎに多くの妖精たちが遊びに来ています。彼女らはシルバー王子とオーロラ姫の願いで子どもたちの名付け親・名前はともかく、誕生のお祝いの口づけを希望者たちにして上げています。あらかじめお触れが出してあり、首都カンパニアはもちろん他の町や村でも王子誕生を祝うお祭りの会場で妖精たちが子どもたちやお父さんお母さんに抱かれた赤ちゃんたちに祝福を授けています。

オーロラ赤ちゃんはお母さんのオツパイを飲んで満足してお昼寝に入りました。赤ちゃんはお世話係に任せてオーロラ姫もシルバー王子といっしょにお客様方への挨拶に忙しく歩き回りました。お城はあまり広くないのでホールと、奥の二つの間が立食パーティーの会場に充てられています。宿泊施設もまだまだ整っていないのでお城主催のお祭りは昼間だけです。この昼食会で一応お開きで、国内のお客様はそれぞれお好きにしてください、国外のお客様方は王様夫妻と首都カンパニアに戻ってご宿泊してもらいます。シルバー王子の主催とはいえまだまだ王様夫妻とカンパニアの後援を受けています。

お客様の中におとなりルーパービッシュ国のシルバー王子のご両親閣下と弟殿下の夫妻とお子さまもお見えになっていました。23歳の若い王子に対してちょっと老けたご両親と中年の弟さんですが、この事情は「眠れる森の美女」の物語を参照のこと。中身も見た目通りの若さのオーロラ姫に対し、シルバー王子は見た目の若さより実はずっと大人なのです。

クラリスもお城の会場にいましたが、ちょっとここにはいたたまれません。事情は同じく「眠れる森」を参考のほどに。み〜んな、お母さんのせいです。ここにいるシルバー王子のご家族やラズベリ

「伯爵夫妻にはどれほどの迷惑をかけているか知れません。」

「クラリス。いらつしゃい」

王妃様にニコニコと手招きされてしまいました。クラリスは内心、うっうと胃が痛くなっています。せめて王妃様にはお味方いただこうと王妃様が贈ってくださったふりふりフリルのピンクドレスを着ています。

王妃様がお相手しているのは、なんと、ラズベリー大伯爵夫妻でした。・・・あー・・・、よりもよって、いっちなばん、お母さんが迷惑をかけた人たちです。

「こちらがそのクラリスですわ。母親に似ずとも素直な良い子で。オホホホ。クラリス、こちらラズベリー伯爵夫妻様よ」

王妃様に紹介されてクラリスはニコツときこちない笑顔を作って挨拶しました。

「はじめまして、伯爵様、奥様。・・・母がたいへんご迷惑おかけいたしました・・・」

伯爵は・・・とても怖い顔の人です。例えるなら大鷲がぴったりでしょう。高いかぎ鼻が鋭いくちばしそっくりですし、何より、鋭い大きな目！ 空の王者の威厳と威圧と、そのものです。肩幅が広くがっしり筋肉質で、御年71歳！でありながら癖の強い黒髪がふさふさしてエネルギーに満ちあふれています。

人は賞賛と畏怖を込めて大伯爵と呼びますが、その名に恥じない堂々たるたたずまいです。

ギョロリと鋭い目に見下ろされて、クラリスは空から狙われる野ウサギのように震える思いがしました。

「よいのおー」

大伯爵が口ひげの下で言っつて、クラリスは『えーと、それはラピスのお言葉でしょうか？』と考えました。

「のお？」と言われお隣の奥様が「ええ」とニコリなさいました。伯爵様よりずいぶんお若い綺麗な、彫りの深い典型的なラピス美人のご婦人です。

「いいわねえー、女の子は。うちは男の子ばかりでつまらないわ。あーあ、本当だったらわたしにもこんな可愛らしい孫がいたはずなのよねえー……。あーあ、それがあんな、熊、で……」

奥様は額に手をやって大げさに嘆きました。クラリスを見てまたニッコリして、

「うちに連れて帰りたいわあ」

と言いました。

「オホホ、奥様、それはいけませんわ。この子はもうわたくしがもらい受けました」

クラリスは王妃様に腕を引つ張られて後ろから抱きかかえられました。

「あのにくにくにくつたらしい魔女から、わたくしが奪ってやりましたの。おほほほ、最高の復讐ですわ」

「それならわたくしどもにも復讐させていただかなくてはいけませんわ」

今度は伯爵の奥様に腕を引つ張られました。

「わたくしだつて復讐にうんぐつと、かわいがらせていただきたいわ。ねえー？」

ニコニコ笑顔で顔を覗き込まれました。クラリスはほつとしながら苦笑しました。どうやらこの奥様も王妃様の同類らしいです。伯爵様はどうなのでしょう？

「お嬢ちゃんはペガサスに乗っておるそうじゃな？ わしの国にも野生の馬がたくさん駆けめぐっておるぞ。白い体に額に銀のマークをつけた奴がおつての。どうじゃ？ わしといっしょに捕まえんか？」

「あなた」と奥さんに叱られました。

「女の子にそんなやんちゃな誘いがありますか。ねえクラリスちゃん、劇はどーお？ 町に大きな劇場があつて、とつても面白くて人氣の劇があるのよ？ ね？ 観にいらいっしやいよ？」

ね？ね？と奥様は迫ってきて、伯爵様も遠慮がちに微笑んでいます。どうやら本気でクラリスをラピス、伯爵の領国ラズベリーアー

ルに連れていきたいようです。う〜む、どうしましょう？

青い光が飛んできてクラリスの頭の上にちょこんと乗っかりました。

「ほらね、こういう人たちなのよ」

サファイアです。

「人なつっこいっていうか、猫っかわいがりっていうか・・・、たいへんなのよ」

肩をすくめました。

「サファイアちゃん。お久しぶりじゃないのお〜。ひどいわあ、あの熊のところにいないなら、ちゃんと家に帰っていらっしやいよお」

「あのねえ、奥様」

サファイアも苦笑して言いました。

「わたしの家は妖精の国にちゃんとおあるんです。こっちには遊びに来ているだけで・・・」

「こら、サファイア！」

大伯爵が怒ったのでサファイアもクラリスも周りのお客さんたちもビツクリです。

「なんと悲しいことを言うのだ！ あの熊の名付け親ならわしらにとっては家族と同じ。おまえの我が家は我がラズベリーアールであるろうが？」

「そのお気持ちはとっても嬉しいんですけど」

サファイアは苦笑しながら、そうだ！、と手を打ちました。

「じゃあこのクラリスを差し出します。いえいえ、レンタルですよ。オーロラ姫に、こちらの王妃様に、妖精たちに、この子は人気者ですからね。一人で独占は出来ません。だからレンタル。ね？」

まあそういうことならば、と大人たちは納得して、どうやらクラリスのラズベリーアール行きは決定してしまったようです。

「それにしてもあの熊はけしからん！」

と大伯爵が怒って言いました。クラリスはあれって？とサファイアに訊いて、サファイアは「そっ」とまた肩をすくめました。

「ルピネーのことよ」

大陸の東半分を占める大国ラピス。その実力は国王さえ凌ぐと噂されるラズベリー大伯爵。ルピネーはその息子です。生まれて間もなく何者かに誘拐され（これがクラリスの母親の仕業だったのでね）、筏に乗せられて川に流されて、何をどうやったらそんなところに行ってしまうのか、なんと内海ノール海を渡った向こうの国、カザリンの漁師に拾われ（だからこれもクラリスの母親の仕業だったんでしょねえ・・・）、17歳でようやくサファイアに見つけられて両親との再会を果たしたのですが、その感動の再会もクラリスの母親のせいで滅茶苦茶にされてしまったのでした。ですからクラリスが伯爵夫妻に会うのにこんな胃痛を痛くしているのです。

大伯爵は自分の息子を「熊」呼ばわりして怒っています。

「ローゼ殿を連れてくると言うから楽しみにしておったのに、なんじゃ、いまだにこんではないか！ えい、あんな熊はどうでもよいが、わしはローゼ殿に用があるんじゃない！」

ローゼというのはカザリン国のルピネーの奥さんですが・・・これもちよつと事情を説明する必要があるのですが・・・、事態の方が急を告げました。

カンパニアから至急の使者がやってきました。

国王とラズベリー伯爵に緊急の用件と言います。

国王様と大伯爵は別室で使者の用件を聞きました。

1時間ほど前、ユークリナ国よりの伝書鳩が到着しました。鳩を飛ばしたのはルピネーでした。鳩の携えた手紙には次のようなことが書いてありました。

ユリアナ・ローゼ貿易会社のカザリン支社長ローゼ・ガドウがポリス国に逮捕、監禁された、と。

第2章 X路の危機

ポリス国は何を血迷ったか!?

誰もがそう思ったはずです。

よりにもよって、ユリアナ・ローゼ貿易会社の、よりにもよってあの大伯爵の息子ルピネー氏の奥さんを逮捕、監禁するなど!

大伯爵に、大ラピス帝国に、喧嘩を売っているようなものではありませんか!?

とにかく王様と伯爵様は馬車に乗り、あわただしくカンパニアに向かつて出発しました。

クラリスもペガサスナー ज्याにまたがりました。

「あらよつと」

サファイアがクラリスの前、スカートの上にひょいと乗っかってきました。密談を盗み聞きしてクラリスに教えたのは彼女です。

「しゅっぱーっ!」

サファイアの号令でナー ज्याは既から飛び立ちました。見送りに来た王妃様と伯爵夫人は、王妃様は活発すぎるクラリスに渋い顔をしましたが、伯爵夫人の方は

「キヤー、クラリスちゃん、かつこいー!」

と大喜びで手を振りました。キラクターは近いものがあったてもこちらの貴婦人は行動派で開けた思想の持ち主のようです。

「おーい、どこ行くのー?」

広場のお祭りに浮かれていたヴァイオレットも飛び立つナー ज्याを見つけてやってきました。他の妖精たちも後を付いてきました。

「ララベル姫のところに行くの。なんだか難しい話になりそうよ」

「なーんだ、と他の妖精たちは興味なさそうにお祭りに戻っていき
ました。」

「あんたはどうする? 遊んでたってかまわないわよ?」

お祭りに未練たっぷりヴァイオレットでしたが、

「行く！」

とクラリスの肩に掴まりました。

「いらつしゃいよ」

いつもの定位置にいるサファイアに呼ばれてヴァイオレットは嬉しそうに彼女の前に座りました。

「行くわよ。それ行けナージャ！」

クラリスのかけ声でペガサスナージャは純白の大きな翼を羽ばたかせて空を駆けました。

「ポリス国っていったら、例の、あれ、よねえ？」

サファイアがクラリスの顔を仰ぎ見て言いました。

「あれ、よねえ」

例の妖精大発生事件でクラリスは人魚復活を目論んで、人魚の干し肉の一片を手に入れると同時に、なんと、人魚の肉を食べて固まってしまうていた1000年前の異国の王女様を甦らせていたのでした。

もしかしてそれが何か関係あるのでしょうか？・・・

ナージャはじきに王様たちの馬車を追い越してカンパニア目指してまっしぐらに駆けました。

首都カンパニアの政治を担う城パレス。

その主は国王リカルド陛下ですが、政治の実際を行っているヘッ

トは、

宰相ララベル姫。

国一番の才媛と謳われる美女・30歳、独身です。

クラリスたちが訪ねていくと、

「あら、やっぱり来たわね」

と笑顔で迎えてくれましたが、秘書たちが立ち働く執務室内は殺気立っていました。ララベル姫は肩をすくめると、「あっちに行きましようか」と奥の個人部屋に誘いました。

「さて。ローゼさんがポリスに逮捕されました」

クラリスはうなずきました。

「逮捕の容疑は、国宝の窃盗です」

「それってまさか・・・」

「はい。霊廟に眠る王女と10人の乙女たちの・・・ミイラです」

「やっぱり・・・」

「わたしのせいです。でも・・・」

王女たちは眠りから覚めて甦ったのです。宝物なんかじゃなくってれっきとした生きた人間です。

「カザリンに向かわせたのが悪かったのでしょうか？」

大騒ぎにならないようにと気を使ったつもりだったのですが、またまた余計なお節介だったのでしょうか？ ララベル姫は落ち着いた表情で意見を述べました。

「まずかった、と思いますね。王女たちのためには良かったと思いますよ。変に好奇の目にさらされることなく。しかし、あなたは王女がポリスに捕らえられていると考えたのでしょうか、それは千年も前のことですよ？ 今もし千年前の伝説の王女様が甦ったら、ポリスの人たちだって大喜びで歓迎して、まさか敵国の捕虜のように扱うことはなかったでしょう」

「そっか・・・」

クラリスは自分の考えの無さにガツカリしました。王女たちがポリスを嫌っているとはかり思い込んでいたのです。あんまりふつうにお話ししていたので、ポリスにも千年の時が経っているということとをすっかり失念していました。

「じゃあポリスの人たちはがっかりして、恨んでいるでしょうねえ・・・」

ララベル姫はフツと笑って言いました。

「ま、それは表向きです。そもそも1000年前のミイラが甦ったなどと、いったい誰が信じます？ 王女様の伝説も昔話。墓が荒らされているのを発見して、まず若者たちの悪戯だろうと・・・あなたのお話を聞く限り考えるでしょうし、全部のミイラが消えているとな

ればそれは大規模な窃盗事件だと考えるでしょう。まさかね、本当に王女たちが甦ったなどと、誰も信じちゃいませんよ」

そうなのかなあと、クラリスは少しガツカリしました。

「でもそれじゃあおかしいでしょ？　なんでローゼさんがその犯人に疑われるんです？　たしかに王女たちの乗った船はカザリンに向かいましたよ。それを知っているのは・・・」

あの4人の若者たちだけです・

彼らが誰かに言ったのでしょうか？　まあ別に口止めもしていませんから喋ったってかまわないのですが、だったら「盗まれた」んじゃないことだって分かるでしょう？　見た目では王女たちが自分たちで船を操ってカザリンに向かったように見えるでしょう。

いろいろ考えて不満顔のクラリスにララベル姫は、

「だからね、それは表向きなのよ。極端な話、もし本当にローゼさんが郎党を率いて上陸してきた、墓を暴いてミイラを持ち去ったとしても、よほど確たる証拠がない限り逮捕監禁なんてことはしないでしょう。証拠があつたって難しいです。要するに、ポリスは最初からローゼさんを捕らえて監禁するつもりでいて、理由は、後付でなんだっていいんです。

ルピネー氏の妻ローゼ・ガドウ氏を自国に監禁した。

その事実がいかに重いものであるか、あなたも想像が付くでしょう？？」

クラリスはうなずきました。先ほど会ったラズベリー大伯爵の大物ぶり。その背後にある大ラピス帝国。それらを敵に回すということとです。

自殺行為、とも取れます。

「ポリスはなんだってそんな馬鹿なことを・・・」

思わずクラリスが洩らした言葉にララベル姫は「それです」と指さしました。

「背後によほどの味方がなければこのような馬鹿は出来ません。ではその味方が誰かという？」

クラリスは首を傾げました。

「えーと・・・、たしかポリス国はマーマラ海峡の利権を巡って・・・、シヴィリと、テュークメンと、競っているんですよね？」

ララベル姫はニヤリと口を歪めました。

「競う、とはずいぶん大人しい言い方ですね。最近のあの海域はずいぶん物騒だと、こんな内陸の山国にまで聞こえてきますよ」

それはララベル姫の情報網が優秀だからでしょうが。

「さて、ではポリスがカザリンと、ラピスと、ケンカをしようとして、その強力な後ろ盾になってくれるのは、どこのどなたでしょう？」

「うーん・・・、シヴィリとテュークメンは敵なわけでしょ？　じゃあシヴィリやテュークメンと仲の悪い近隣の国？　えーと・・・、どこでしたっけ？」

「シヴィリのお隣はユークリナ。テュークメンのお隣はクレオとクーロン」

「じゃあ、ユークリナか、クレオかクーロン？」

「ユークリナやクレオ、クーロンがラピス相手にまともにケンカが出来ると思いますか？」

「うーん・・・、ユークリナってたしかラピスの子分みたいなものでしょ？　じゃ、無し。クレオとクーロンはテュークメンと同じアルマ教の国でしょ？　一方ラピスはサークレ教の国でしょ？　じゃあ、ポリスが手を組むなら、アルマ教のテュークメン、クレオ、クーロン・・・、あれ？　元々のケンカ相手はテュークメンか？　ああーん、分かんない！」

こんがらがって頭を振るクラリスを薄笑いを浮かべながらじっと見ていたララベル姫が言いました。

「ポリスが手を組む相手がクレオかクーロンというのはいい読みでしょう。」

さて、まず地理のお勉強の復習をしましょうか。

まずノール海。こちら北のユーレシア大陸とあちら南のカリーフ

ア大陸に挟まれた内海です。

ノール海の西は完全に陸が閉じ、西のアトランチス海に出るためのエスパール運河を有するエルサンドラ国はその通行税でたいへんに潤っています。

ノール海の東はというと、南北大陸が狭まっています。完全に閉じていません。およそ60キロメートルの幅があります。それだけの幅があれば船などスイスイ抜けられるところですが、そうはいきません。海峡の西ノール海側にポリス、海峡の東テスラ海側にテュークメンという島国があつて60キロメートルの海峡を實際よりうんと狭いものになっています。

この中途半端な広さ・Xに分けられた海峡が3国の欲のぶつかり合う争いの場になっています。

北のシヴィリ。島国ポリス。そしてテュークメン。テュークメンの本土トルーカ島はポリスのおよそ3倍の大きさがあり、さらにカリーファ大陸の海峡に面した土地も領有しています。

単純に3国を比べればテュークメンが圧倒的に国力があります。ポリスもシヴィリもその半分の国力もないでしょう。しかし、

ポリスはかつてはノール海及び沿岸のかなりの土地を領有する一大帝国を築いており、いまだに文化的な影響は強く残っています。ノール海文明のふるさとと云っていいでしょう。

シヴィリは、ラピスの属国です。一応対等な独立国ですが、実際はなんでもラピスの言いなりです。シヴィリと戦争をしようとしたらラピスが黙っていないでしょう」

戦争！ それほど差し迫った危機がここにあるのでしょうか？

「しかし背後の力をいえばやはりテュークメンがもつとも強力で、強固です。なんといってもテュークメンはカリーファ大陸に一大勢力を誇るアルマ教の盟主的な国ですから。北の、異教徒の国と戦争をしようとするれば、アルマ教の国々がこぞって助力に駆けつけるでしょう。アルマ教信者の結束力は、サークレ教信者のそれとは比べ物にならない強固なものです。アルマ教の戦士は、強いです」

クラリスはゾツとしながら考えました。

「じゃあやつぱりテュークメンが一番強いじゃない？ で、問題はポリスなのよね？ 問題はローゼさんの監禁で、でけっきよく、ポリスはどこと戦争する気なの？」

シヴィリ、ポリス、テュークメンの3国がマーマラ海峡の利権を巡って敵対しているのは分かりました。でもポリスが何を考えているのかさっぱり分かりません。

「ポリスはラピスを怒らせているのよねえ？ ということは、その子分のシヴィリ？ ああ、もちろんカザリンもね。そうよね、直接のケンカ相手はカザリンになるんでしょ？」

ララベル姫はうなずきました。

「そうですね。ではカザリンがどういう状態にあるのかお勉強しましょう。」

今から12年前、カザリンの漁師に拾われた孤児のガドウが実はラピスの大貴族ラズベリー伯爵の長男であることが判明しました。

ガドウ氏つまりルピネー氏は、その後カザリンとラピスを結ぶ航路の貿易の会社を興しました。それがユリアナ・ローゼ貿易会社です。ちなみにこの社名はルピネー氏の二人の奥さんの名前から取っています。ルピネー氏はカザリンすでにローゼ氏と結婚している、出自が判明してラピスに一度戻り、そこでいいはずけであったユリアナ氏とも結婚しました。ローゼさんとユリアナさん、二人の奥さんの仲はどういうものなのか部外者のあずかり知らぬところですが、

クラリスはオーロラ姫とシルバー王子の結婚式に出席したルピネー氏と一度だけ会っています。とにかく大きな人でした。ご両親の「熊」という呼び方は、見た目そのままです。ずんぐりむっくりといった印象で、当たりの非常に柔らかい人でした。ちよつと変な趣味の女の人に大いにもてそうです。

「ま、上手く行っているでしょう。ローゼさんがカザリン支社の社長を、ユリアナさんのお父上がラピス支社の社長を務め、ユリア

ナ・ローゼ社はたいへんな成功を収めています。カザリンも大いにその恩恵で潤い、ルピネー氏は侯爵位を贈られています」

階級的にはお父様の伯爵より一つ上です。ラピスの伯爵位とはまるで格が下ですが。

「ユリアナ・ローゼ社はカザリンとラピスを結ぶ貿易会社なのですが、カザリンは小さな漁業の国ですし、ラピスは遠く東の方でテスラ海に面していますが、ノール海からは内陸の国です。ノール海における玄関口はユークリナになっています。シヴィリのとなりの国ですね。ユークリナは温暖な気候に恵まれた広い国土の農業国で、ルピネー氏はこれも太い経済的なパイプを築いています。同じくラピスが商売相手でもあるとなりのシヴィリは面白くありませんね。さて、ではカザリンからの貿易物資は何かというところ、カザリンの海産品はもちろんです。圧倒的なのはとなりのクレオバトラの品々です」

おお、クレオバトラ。妖精事件で沖合にガラスの塔を建設した国です。

「クレオバトラは古代からの王朝が今も続くカーリーファ大陸随一の大きな国です。昔の権勢こそ衰えたとはいえ、今もカーリーファ大陸諸国の盟主であることに変わりありません。

ところが。

何しろ歴史が長いもので、大昔の戦争をいまだに根に持っている節があるのですね。ですからポリスは敵ですし、こちらユーレシア大陸諸国とも積極的な交流を持たずにきたのですね。

せっかくのカーリーファ大陸のさまざまな産物を、ユーレシア大陸諸国は喉から手が出るほど欲しかったわけです。しかしクレオバトラはいつまでたっても昔ながらのお殿様ですから、ゼーンゼン、ユーレシア側のラブコールに耳を貸さなかったのですね。

その歴史の牙城をルピネー氏は切り崩しました。

頑固な王族にどう取り入ったものやら、こればかりはルピネー氏のお手柄で、わたしにもさっぱりその手管が見えません。まったく

たいした商売人、いえ、政治家です」

ララベル姫は実に嬉しそうにニンマリしました。クラリスは再び思い出します。あのずんぐりむっくりの大きな熊さんに、そんなに凄味のある政治的手腕があるとは思ってもありません。能ある鷹は爪を隠す。きつとあの熊は分厚い手に父親譲りの鋭い鷹の爪を隠し持っているのでしょうか。

ララベル姫は言います。

「ですから、ユリアナ・ローゼ社は各国から非常に羨ましがられ、その裏返しで、非常に強いやつかみを受けているのです。さて。

ではもう一度考えてみましょう。ポリスは何を目的にローゼ氏を監禁しているのでしょうか？」

クラリスは答えます。

「話からすると、やっぱりユリアナ・ローゼ社の貿易利権でしょうねえ」

ララベル姫はうなずき、問います。

「しかしユリアナ・ローゼ社はあのラズベリー大伯爵の親族の会社です。それを敵に回して、ポリスがただで済みますか？」

ララベル姫はじいっとクラリスの目を覗き込んでいます。この人もルピネー氏に負けない政治的女傑なのです。クラリスはその瞳の奥にある考えを読んでゾツと背筋が寒くなりました。

「まさか・・・ラピスが、ポリスに味方する?・・・」

ララベル姫は椅子に身を沈め、まぶたを半分閉じて瞳を暗くしました。

「と、そういう約束がなければポリスがこのような暴挙に出ると思えません。ポリスの後ろにはラピスが付いている。もちろんラピスがなんの見返りもなくポリスに味方するわけではありません。ラピスはポリスを通してノール海の支配に手を伸ばすつもりでしょう」

クラリスは慄然としました。

「まさか・・・平和な今の時代に、どうしてラピスのような大国が

さらに支配を広げるような必要があるんです？」

「さあ？」

ララベル姫も呆れるように両手を開きました。

「そういうゲームをしたがっている人がいるのでしょうか。人間の欲には際限がないでしょうか？」

ララベル姫に薄笑いを浮かべた目で見られてクラリスはムスツと渋い顔になりました。どうせクラリスも欲張りです。ララベル姫は笑って、改めて話を続けました。

「ユリアナ・ローゼ社の利権はこの国にも魅力です。ポリスがその利権に、力づくで、手を伸ばせば、他も黙っていないでしょう。一番噛みついてくるのはテュークメン。その実力はさっき説明したとおりです。テュークメンは、いざとなればラピス本国とだって戦争をするでしょう」

クラリスはますます慄然しました。

「とんでもない事態じゃないですか!？」

マーマラ海峡を戦場に、南北両大国の大戦争です!!

ララベル姫は何か含みのあるニヤリとした笑いでクラリスを見ました。クラリスよりよっぽど魔女っぽいです。

「そうですね、戦争です。しかし、わたしが疑問に思っているのは、ラピスがどこまで本気かということです。この平和な時代に、好きこのんで戦争をしようという軽蔑されるべき馬鹿を、ラピスがどこまで本気で思っているか？ それは、

当のポリスも疑っているでしょう。

実際に戦闘を行うのは自分たちなのです、大陸の北と南から圧力をかけられるだけかけられて、潰されてしまうのは自分たちです。

どこまでラピスを信じられるか？ポリスも相当疑っていたはずですよ。

ラピスから、相当の覚悟を示されたのでしょうか。本気だと、ポリスに思わせるような」

それがなんなのか？クラリスは腹の底に暗く冷たい物がしこる気がしました。

ララベル姫はカザリと言います。

「わたしがポリスなら、もう一つくらい担保が欲しいところですね。テュークメン側への対策も取っておきますね」

「なんででしょう？ ララベル姫は悪戯っぽい目で言います。」

「テュークメンはアルマ教の盟主ですが、アルマ教徒は外に対しては強固でも、実は内部ではけっこうあちこち仲が悪い物同士がいるんです。」

クレオとクーロンがそうです」

テュークメンに接する2国で、テュークメン、クレオ、クーロン、カザリンと並んでいます。」

「民族的、教典の解釈の違いとか、ま、いろいろとね。わたしもさっぱり分かりませんし、きっと本人たちも分かってないでしょう。が、仲が悪いというのは事実です。」

わたしならこれを利用します。クレオとクーロン、どちらかを賢易利権で釣って仲間に引き入れます。テュークメンと本気で戦争する気なら、テュークメンの領土を与える密約もしましょう。そうですね、クーロンの方が大きくて力があります。仲間にするならクーロンです。これだといふ勝機が上がります」

まるでチェスでも楽しんでいるようで腹が立ちます。

「わたしだつてねえ」

ララベル姫は静かな冷たい笑いを唇に浮かべました。

「かなり、腹を立てているのよ」

秘書が国王と伯爵の到着を告げ、案内してきてもらうと、お二人の到着と同時に別の秘書官が慌てて駆け込んできました。

「た、たいへんです！ ラズベリーアールより伝書鳩が・・・」

王様は伯爵に遠慮して先に手紙を見てもらいました。筒に納められて丸まった紙を伸ばしてその文面を読んだ伯爵は、額にニョキッと、鬼のような血管を浮き上がらせた。

「息子のナヴィーからだ。ユリアナとアナトリーがペテロブラークに連れていかれたそうだ」

それは・・・たいへんなことなのではないでしょうか？

第3章 大国の欲望

ナヴィー氏はルピネー氏の弟さんです。ルピネー氏が17歳の年まで行方不明でしたので、伯爵は2歳年下のこの弟さんを跡取りに決めて教育していました。ナヴィー氏は28歳の現在立派にその役割を果たしています。

ユリアナさんはルピネー氏のラピス国の奥さんです。父上はユリアナ・ローゼ社のラピス支社長です。アナトリーはルピネー氏とユリアナさんの子で、6歳の男の子です。

ユリアナさんアナトリー坊やの二人がラピスの首都ペテロブラーグに連れ去られたとは、どういう意味があるのか？

「人質ということじゃろう」

伯爵は苦々しく言いました。ナヴィー氏の手紙によればそれは一応オペラ観賞のご招待ということでしたが、うむを言わさぬ調子で、その使者をナヴィー氏ではどうしても退けることが出来ませんでした。

これが、

「ラピスからポリスへの『覚悟のほど』ということね」

と、ララベル姫はクラリスに言いました。先ほどの『ラピスがどこまで本気か？』という問いへの答えです。

「どうやらラピスは本気のようにです。」

でも、クラリスはどうにも納得できません。

「伯爵様はラピスの英雄なんでしょ？ その伯爵様を陥れるようなことをして、ラピスの国民が黙っていないと思うんですが？」

もし仮に、このロヴィークの誰か貴族が例えばお隣のルービツシユに良からぬ欲望を抱いて、今エメラルド城にオーロル王子のお祝いに来てくださっているシルバー王子のご両親や弟さんを何かイヤモンをつけて監禁するようなことをすれば、絶対にロヴィーク市民たちに貴族に対する暴動が起きます。

大伯爵と尊称される伯爵の家族がそのような目に遭わされて、ラピスの国民は黙って政治家や貴族……どっちも同じ意味ですが……の言うことを聞くのでしょうか？

大伯爵は重々しく言いました。

「それがきやつらの今ひとつの目的であろう」

クラリスは分かりません。ララベル姫が教えてくれます。

「ラズベリー伯爵様が何故『大伯爵』と尊敬されているか、知ってる？」

「それは……ラピスを富ませたからでしょう？」

伯爵の領有地ラズベリーアールは広大なラピス領土の西の端に位置し、ロヴィークの属する西側世界とラピス中央を結び、大いに両者を富ませたとオーロラ姫から授業を受けました。

ララベル姫はうなずきつつ、そこに加えました。

「その通りです。そして、それによって野蛮な戦争の時代に完全に終止符を打ったのです」

クラリスは驚いて思わず伯爵を見ました。戦争の時代なんて、そんなものずつと大昔のことと思っていました。伯爵様は面白くもなさそうに、クラリスに困った顔で言いました。

「わしは父親の後始末をただけじゃ。何も偉いことをしたわけじゃない」

「ラズベリー鬼伯爵」

ララベル姫はクスツと笑って「失礼」と謝りました。伯爵はますます苦い顔です。

「わしの父親は、変人じゃった」

「変人ですわねえ。たった一人で大ラピス帝国に喧嘩を売ったのですから」

クラリスはますます驚きました。今一つの島国がラピスに喧嘩を売って驚いているというのに、たった一人で喧嘩を売ったとはどういうことでしょうか？

「わずか50年ほど前まで、この大陸はまだ戦争の時代にあったと

言っていていいでしょう。ラズベリーアールはその頃ラピスが領土拡大戦争で手に入れた地です。その地に伯爵の父伯爵様は西方への備えの要塞作りを命じられて赴任してきました。そこに、伯爵様も連れたいかれたのですわよね？」

伯爵はウムとうなずきました。

「西方への備えを命じられていた先代伯爵様ですが、何をどう聞き違えたのか、ラズベリーアール・当初の名前をラピスアールと名付けられていましたが、ラズベリーアールを360度全方位に向けて要塞化してしまつたのです。もちろんラピス中央に向けてもです。そしてご自分はこの要塞国家の司令官に就任し、御自身の領有を主張、この地を侵す者は何人たりとも容赦しないと宣言されたのです。何を血迷つたのかと当時の中央政府は大慌てだつたでしょうねえ」愉快そうに言うララベル姫に大伯爵は「まったくだ」と苦虫を噛み潰したように言いました。ララベル姫は笑つて言います。

「先代伯爵様は非常に優れた軍事家であらうしやいました。その優れた目から見て、もう時代が領土拡大などという野蛮な思想を受け付けないようになっていると考えていました。いまだ領土拡大の欲望を納めない中央に対して、心底嫌気が差したのでしょうね。そこで『これにて打ち止め！』とラピスの西の領土にくさびを打ち込んだのでしょう」

ね？とララベル姫に笑顔を向けられて大伯爵は苦り切つた顔で言いました。

「そんな魂胆ではあるまい。あれは父の最後の芸術作品だつたのだ。戦しかできん軍事馬鹿だつたからな。たしかに、戦争の時代はもう終わりだと見ていたのだろう。だから自分の最後の仕事として、永久に残る戦争のモニュメントを作り上げたのだ。父は、自分の好きなことをしただけだ」

大伯爵は昔を思つて遠い目をしました。前の時代の、遠い遠い昔のことです。

「好きなことをやるだけやって、満足してとつとあの世に行つて

しまつたわい・・・」

「苦労されましたか？」

「それはそうだ。国を丸ごと要塞化するなど、とんでもない土木工事をしておつて、国は貧乏のどん底じゃ。まったくゼロからの立ち上げじゃつたわい」

「しかし、あなたはそれを成し遂げられた」

「・・・」

「だからこそ、あなた様は大伯爵と皆に尊敬を込めて呼ばれるのですわ」

「わしも、やるべきことをやっただけじゃ。責任を果たしたただけで別に褒め称えられるようなことはしとりゃあせん」

「そうですか？ ジャローム將軍の残党たちはどうなのですか？」

「・・・」

大伯爵は押し黙り、ララベル姫はクラリスに意味ありげな目配せをしました。

「ともかく、ラズベリーアールは城壁に守られて平和国家に生まれ変わった。ゼロからの出発が幸いして、それは理想の平和国家のモデルケースになった・・・」

「なつてもおらんようだがな」

「残念ながら、まだまだ不十分なようですねえ。が、ともかく、理想的な平和国家としてラズベリーアールの名はラピス国内は元より西側世界にも広く知れ渡るようになった。いえ、むしろ西側世界の方がラピスの侵攻を防いでくれた感謝もあつてより賞賛の度合いも強かつたでしょう。」

しかし、そんな伯爵の功績を疎ましく思う者たちもいた。それが、ジャローム將軍の残党たちです」

クラリスは聞いたことのない名前ですが、ララベル姫の声にはたつぷり侮蔑がこもっています。

「ジャロームは戦争による領土拡大を唱えた前時代の代表的な野蛮人です。ラピスの歴史上は数々の武勲を立てたラズベリー鬼伯爵に

並ぶ戦争の時代の英雄ですがね。

ジャローム自身は狩りの最中の事故で死んでいました。暗殺されたという噂もありますが・・・ま、真相は分かりません。このジャロームの死によつて中央の主戦派は徐々に勢いを無くし、政界から消えていきました。そこに・・・大伯爵様の圧力があつたとかかなかつたとか・・・」

大伯爵は口を真一文字に結んで硬く目をつむっています。ララベル姫も敢えて追及せずに話を続けます。

「そんなわけで戦争の時代は完全に終わりました。めでたしめでたし・・・だつたのです。今度の事件が起きなければ」

「けつきよく」

大伯爵が重々しく口を開きました。

「奴らはまだ生き残つておつたというわけじゃろつ」

「ですね」

ララベル姫が同意して後を継ぎます。

「ラピスはきつと大きすぎるんです。広すぎる国土の真ん中になんたのでは周りの世界も見えないでしょう。彼らは彼らの理屈で、自分勝手な夢を見ているのでしょつ」

「夢が夢で終わつておればよかつたものを・・・馬鹿どもが」

「さて伯爵閣下」

ララベル姫が真剣に向かい合つて問いました。

「ラピス国家は、どうしますか？」

大伯爵はしばらくこの若くて美人の政治家をじーっと思つめて、言いました。

「やる、じゃろつな。中央の貴族どもにとってはいつもの政治ゲームの延長だろつ。戦争とはいえ、どうせ実際に戦うのは末端の兵士たち、どころか、ポリスやシヴィリの人間たちだ。きゃつらは兵士を盤上の駒程度にしか思つたらんだろつ。いやむしろ、

今回はかなり本気と見た。今中央は主戦派に主導権を奪われ、平和主義者たちはおっかなびっくり縮こまつておるじゃろつ。いった

ん事が起こってしまえば、政府はズルズル主戦派の論理に引きずられていくだろう」

「伯爵閣下はどうされます？」

「わしは、」

大伯爵は胸の前にグツと腕を組んで、腰を立て、お尻をソファーに押し付け、両足を床に踏ん張りました。

「動かん」

動かんぞと、そのポーズが頑固に表明しています。

「伯爵閣下が中央に乗り込めば、主戦派たちを抑えられるのではありませんか？」

「そのための人質だろう」

「天下の大伯爵が、人質を取られて大人しく引っ込んでいますか？」

「わしが立てば、ラピスに戦火が立つ」

ギラリと、その炎を映したように大伯爵の瞳が燃えました。

「特に地方の、中央に不満のある人民が、ここぞと立ち上がるだろう。ラピスに内乱が起こる。それを、戦争の時代を夢想する愚か者どもは欲しているのだろう」

ララベル姫が冷たい目で大伯爵に問いました。

「では逆にその状況を起こすために敢えて人質を殺すという残虐を犯すことはありませんか？」

「もしそうなれば」

大伯爵の瞳がギラリと光を発します。

「わしは奴らの望むようにペテロブラーグに乗り込み、クリムト広場でこの心臓に剣を突き立てて民衆の目前で死に果ててやる。きやつらの非道の証をべったり石畳に印してな」

恐るべき鋼の意志です。もしそんなことをされればさしもの阿呆な主戦派どもも肝を底から冷やすことでしょう。

ララベル姫が問います。

「しかしそれでも内乱が起こってしまったら、反主戦派、いえ反中央派は負けますか？」

伯爵は太い息を吐いて言いました。

「勝つ、だろう。と、思う。が、多くの血が流れる。ラピスに革命が起こるだろう。だが、わしが自決などせず生きておっても、その結果を見定める時間はわしには残されていないだろう。革命は、どうせ失敗する」

なんと悲観的な、とも思われますが、この鷲の目をした大政治家はもっと時代というものを、人間というものを達観しているようです。「多くの人民にとって今よりはましな社会になるだろう。だがそれも多くの命を犠牲にするほどの良いものではないだろう。後の歴史はそれを賛美するやもしれん。だが、わしはそんなもの見たくはない。どうせ、新しい貴族が生まれるだけじゃ。いずれ、同じことになる」

クラリスは分かりません。じゃあこの伯爵様は何を望んでいるのでしょうか？ クラリスの視線に気付いて大伯爵は優しい目になって言いました。

「ゆっくりでいいのだ。誰も血を流す必要はない。ゆっくりと、少しずつでも皆が揃って良い方に進んでいけばそれで良いのじゃ。急いではいかん。無理は、いかんのじゃ」

クラリスは伯爵様に大きな黒い山を見る思いがしました。どつしりと、風雪に耐えながら、根元には豊かな緑の野を従える。クラリスはニツコリ笑い、問いました。

「教えてください。わたしはどうしたらいいですか？」

伯爵は眉をひそめました。

「お嬢ちゃんが危ないことをする必要はない。これは大人が解決しなくてはならん問題じゃ」

「でも戦争が起これば子どもも巻き込まれますよ。大人の政治のせいでね」

ララベル姫がクスクス笑って伯爵に言いました。

「伯爵様。無駄ですわ。この子はどうせ首を突っ込みますし、誰よりも働きます。心配なのはやり過ぎちゃうことですわね。正しい道

をお示しくさせていただきますことの方が、この子のためにも良いと思いますよ」

渋い顔の伯爵にクラリスはニッコリ言いました。

「ありがとうございます、伯爵様。伯爵様くらいのもですよ、わたしに何もしくなくていいとおっしゃってくださるのは」

ムツとララベル姫を睨むと姫はそ知らぬ顔をしました。伯爵様はそれでも迷っているようでしたが、クラリスにまっすぐな視線を向けられて「ウム」とうなずきました。

「ラピスは放っておけ。奴らにとってはやはりゲームだ。逃げ道は用意しているだろう。そういうところでは抜かりのない奴らだ。」

奴らに分がないと思わせることだ。そうすれば手のひらを返したようにポリスを切り捨てるだろう。

ポリスに誰と戦う意志も捨てさせることだ。それが本筋だからな。そのためにもどうするか？

やはりローゼを取り戻さねばならぬ。できれば、ポリスから自主的に解放するようにな。

後は、あの熊に任せるがいい。そもそもあいつが始めた商売が元だ」

クラリスはうなずきました。

「わたしはローゼさんを助け出せばいいんですね？ 出来るだけ穏便に」

「そういうことじゃ」と大伯爵はうなずきました。それから優しくおじいちゃんの顔になつて言いました。

「すまんおう、こんなことをやらせて。わたしは、ほんに申し訳ない伯爵様に頭を下げられてクラリスは慌てました。」

「とんでもないですね。・・わたし、伯爵様にお会いするのが恐くて恐くて仕方なかったんですよ」

「それは心外じゃ。わたしはおまえさんに会うのを楽しみにしておつたのにおう」

「ありがとうございます」

「では約束じゃ。この一件が片づいたらクラリス嬢はわしらといっしょにラズベリーアールに遊びに来ること。歓迎するぞ」

「はい。楽しみにしています」

ああ、もうどうでもラズベリーアールに行かなくてはならなくなりました。まあ伯爵も奥様も優しい人たちのようなのでよいですが、「というわけでわしは事が片づくまでここに滞在させてもらうことにする。国王陛下、すまんがよろしくお頼み申す」

大伯爵に頼まれて王様も「もちろんです」と即答しました。天井をふわふわ漂っていたサファイアが下りてきました。

「面倒な話は終わった？」

「なんじゃサファイア、おったんか？」

「いきましたとも。一応ご子息の名付け親ですからね」

ヴァイオレットは伯爵が恐くてさっさと逃げ出しています。サファイアはクラリスに言いました。

「じゃあ取りあえずルピネーに会わなくちゃね？」

「そうね。えーと、ユークリナに行けばいいの？」

伝書鳩はそこから飛ばされています。

「遠いわね？」

妖精騒動でノール海に面するお隣ローゼン又国の南の海岸部まで行きましたが、そこからずうつと東に行かなければなりません。

「陸を直接向かえばうんと近いわよ。あつたかくていい所よ」

サファイアはルピネーのお供で何度か行っています。

「ではさっそく」と旅立ちの準備にかかろうとすると、また新たな伝書鳩の到着を報されました。

「これは・・・何者でしょう？」

戸惑う秘書官からララベル姫が手紙を受け取り、文面を見てクラリスに渡しました。読みます。

「『魔女クラリスへ。まずは俺に挨拶に來い。ソロカのトーチにて、ルピネー氏の代理人カジキより』」

クラリスは手紙から顔を上げてみんなに訊きました。

「ソロカのトーチって、どこ？ カジキって、だれ？」

第4章 暗い港町

ソロカはノール海に面するユークリナ国のお隣の小さな国です。こちらのお隣です。

トーチというのは、

「きつと灯台のことでしょう。ソロカは港しかないような国ですか」

とララベル姫が教えてくれました。

「しかし」と姫は幾分非難を含んだ横目で伯爵を見て言いました。「この子を名指して呼びつけるとは、ルピネー氏の差し金であることは間違いないでしょうね？」

伯爵も憤然と「あの熊め」と腕を組みました。

「今度会ったらみつちり説教してやる」

クラリスはまあまあと二人をなだめました。

「きつと王女様が絡んでいるからわたしが出てくるだろうって予想したのよ」

甦った1000年前のキャンディー王女のことです。この王女の「ミイラ」を盗んだ容疑でローゼさんはポリスに逮捕されたのです。それにしても、とクラリスも思います。「まず俺に挨拶に来い」とは、この代理人という人物もずいぶん偉そうです。何様のつもりでしょう？ というか、何者でしょう？ ユリアナ・ローゼ社の人でしょうか？ だとすると・・・すつごく怒っているのかもしれない・・・。

クラリスは伯爵とララベル姫に「カジキ」なる社員がいるか尋ねましたが、二人ともそこまで詳しくは知りませんでした。

「ま、行ってみます」

簡単に旅行カバンに着替えや洗顔セットを詰めるとクラリスはさつそくナージャにまたがりました。

見送りに出てきたララベル姫が言いました。

「クラリス。すみませんがロヴィーク国はこの件には関わりません。いずれにせよラピスとは友好関係を維持していたいのですのでね」

クラリスは答えました。

「もちろんです。これは、わたしの問題です」

ラズベリー大伯爵も言いました。

「決して危ないことはしてくれるなよ。危ないことなんぞ、みんなあの熊に任せておけ」

国王様も言いました。

「無事に帰ってくるのだぞ。おまえがケガでもするようないことがあれば、わしはまた王妃にどれだけ叱られるか分からん」

帰ってきたクラリスが身動きの出来ない病人のような有様だったので王妃様は悲鳴を上げて心配し・・そのとばっちりが王様に向いたようです。王様はなおもくどく、

「よいな？ 派手に動き回るのではないぞ」

と念を押しました。これはクラリスの身を案じてというより、

「そうです、クラリス。穏便に、ですよ」

とララベル姫も言いました。クラリスはうなずきました。

「役目は心得ています」

前回のようない行き当たりばったりではいけません。下手をすれば、大勢の命に関わるのです。

「行くわよナージャ！」

ペガサスナージャは白い翼を羽ばたかせて空に駆け上がりました。

「行ってきまーす」

お見送りの三人に手を振ります。「気をつけて」と手を振る三人に、

「あたしが付いてるからだいじょうぶよー」

と、サファイアが答えました。今回の冒険のお供はサファイアと、飛び立ってからこそこそナージャのたてがみから顔を覗かせたヴァイオレットです。

ロヴィークの南東部に接するハーメルン国を通って、2泊を経て、3日目の夕方近くソロカに入りました。

ソロカの中心には鉛筆の頭のような山がどーんと生えていました。岩石質の白い山で、木々は所々にしか生えていません。ふもとの土地もゴツゴツ根のように浮き上がった岩石の隙間に薄く土がかぶった感じで、これではあまり作物も育たないでしょう。

山の上から眺めると、

「おー、海だ海だ。なんかまたすぐ戻ってきちゃったな？」

ヴァイオレットが嬉しそうに銀色に輝く黒い海を指さして言いました。もういっぱしの冒険者気取りです。クラリスも言いました。

「この先にポリス島があるのね？」

山の高さまで上れば見えるかと思いましたが、丸い水平線の向こうには青い空が広がるばかりです。

「えーとねー、たしかまだ300キロメートルくらい先よ」

サファイアに教えられて、ふーん・・、とクラリスは感心しました。

「ほんと、海って広いのねー」

ただっ広い海をただ眺めていても仕方ないのでクラリスはナー ज्याをふもとに向かわせました。

これといった大きな建物もない、土と同じ灰色の漆喰の粗末な家が狭い土地に立ち並んでいます。しかし海岸部は大規模に整備されています。豊富な岩石を利用して岸は平らな護岸が覆い、埠頭が何本も突きだし、中小の船が何十隻と繋がれています。あまり大きい船は見あたりません。

翼をしまったナー ज्याを連れてぶらぶら歩くとあまり人相の良くないいかつい男たちがジロジロうさんくさそうな目つきを向けてきます。ヴァイオレットはさっそくクラリスの髪の毛の中に潜り込み、ナー ज्याの頭の上にあぐらをかいたサファイアは威嚇するように無遠慮な男どもの視線を睨み返しました。クラリスはクスクス笑いしました。

「サファイアさん。みんな怖がっているわよ」

まあたしかに行き交う男たちはどれもなく人相をしていませんが、クラリスの勘ではひどく用心深く臆病な感じがします。ただし、ただの臆病ではありません。常にクラリスたちを値踏みするような意識が見え隠れしていて、これはやはり用心しなくてはなりません。魚の露店が開いていました。石畳の上にごさを広げ、竹や樹皮で編んだざるやかごの中に取れたての生魚や干物を並べています。クラリスはお腹が空いていたのでみりん干しのアジを2枚買いました。山国のロヴィークでもお馴染みのお魚です。ララベル姫がちゃんと小銭を用意してくれていたので小銭入れから銅貨で支払いました。1枚を自分でパクついて、1枚を裂いてサファイアとヴァイオレットに上げました。二人とも「いらなーい」と言いましたが、クラリスは「食べなさい」と命令しました。

「ねえお婆さん」

クラリスは店のお婆さんにグラムフォンなまりのヴァージン（ポリスの言葉）で尋ねました。

「トーチって、どこ？」

お婆さんはしわでできたような黒い無愛想な顔をしていましたが、それでも商品を買ってくれたので一応答えてくれました。

「あんたよその人だろう？　じゃあトーチっていったら、ほれ、あれだ」

節くれ立った黒い手で指さしたのは、海に突き出た岩石の丘の上に立つレンガの塔でした。

「あれ、灯台？」

「そくに決まってるだろう」

ぶつきらぼうな物言いです。さすがにクラリスもこの国の人たちの閉鎖的な性質には嫌気が差しました。

「行きましようか」

クラリスが歩き出すと、日焼けした裸の上に白の半袖シャツ、焦げ茶のチョッキ、それにカラフルな布を首に何枚もぶら下げ、頭に

も赤い布を巻いてぼさぼさの長髪をまとめた男が寄ってきました。二十歳くらい。背のひよる高い若者です。サファイアがクラリスの肩に飛んできて「海賊よ」と耳打ちしました。赤いだぶだぶのズボンの腰に、クラリスも絵で見たことのある刃のカーブした短剣をぶら下げています。海賊の若者はニヤニヤ気持ち悪い笑いを浮かべながらクラリスに話しかけてきました。

「よお綺麗なお嬢さん。こんな魚臭せえ港にこいつは不似合いだ。太陽さんの青い海が見たいならブルガリかモナの白いビーチに行くべきだな。ここにはご覧の通りの灰色の岩と黒い海しかありませんよ。あんたユークリナの人かい？ ハーメルンの女みたいにきつい目はしてねえもんなあ？ いや、俺あハーメルンの女も好きだぜ。あの情熱的で一途なところがかわいいよな。だがあんたは違うだろ？ どうしたい、旅の途中で道に迷ったか？ 悪い船会社にだまされてこんな所に下ろされちまったのかい？ 最近この海も物騒だからしょうがねえが。おいおいまさかお嬢さん一人じゃねえだろうな？ パパはどうした？ 連れとはぐれちまったのか？ ホテルはどこだ？ まあここじゃあホテルなんてしゃれたもんはねえがな。まあいいや、とにかくだ、ここはお嬢さんみたいな綺麗な子が一人歩きするには物騒なところだぜ？ 言ってくれよ、どこに行きたいんだい？」

クラリスは目を丸くして「まっ」と言いました。

「よくもそれだけ口が回るわね？ 要するに、あなたを用心棒に雇えってこと？」

若者はニカツと汚い歯を見せて笑いました。

「あんた頭いいねえ。そういうことだ。俺は、お買い得だぜ？」

サファイアが若者の顔の前に飛んでいって怖い顔で「残念でした」と言いました。

「あたしたちもう行き先は決まっているの。怪しげな用心棒なんて必要ないわ」

若者は「おっ、妖精か！？ こんなに間近で見るのは初めてだ」

と驚きました。クラリスは、

「いいわよ。じゃわたしたちをトーチまで案内して」

と、財布から銀貨を1枚取りだして若者に渡しました。若者は銀貨をかざして見ながら

「重いな。これあどこの金だ？」

と訊きました。

「ロヴィ・クよ。上質の銀貨だからこっちの銀貨より数倍価値はあるはずよ」

若者はふうむとまじめな顔になって慎重にクラリスに言いました。

「なあお嬢ちゃん。こういうもんはおいそれと表に出しちゃいけないぜ。見ろよ」

若者があごで指すのを見ると行き交っていた人間たちが、男も女も、立ち止まって遠巻きにそれとなくクラリスたちに視線を向けています。危険な雰囲気にはサファイアまで「ちよつとクラリス」とすり寄ってきました。クラリスは肩をすくめて、

「あら危ない危ない。じゃあさっさとトーチに案内してちょうだい」と若者をせき立てました。

「あ、ああ。じゃ、行くか」

若者は周りを気にしながら「こっちだ」と先に立って歩き出しました。クラリスはナージャを引き連れてのんびり歩き出しました。ちなみにナージャは馬具を一切つけていません。クラリスが乗るときは豊かなたてがみを軽く掴むだけで、クラリスは乗馬がすごく上手いのです。

若者は「俺はルパートって言うんだ。よろしくな」と名乗りました。

「わたしはクラリス。こっちはサファイアの精と、ナージャと、ヴァイオレットよ」

「ヴァイオレット？」

ルパートは振り返り、クラリスの髪の毛から顔を覗かせているヴァイオレットを見つけてました。

「わっ、驚いた。あんたお化けを飼っているのか？」

「ほら、お化けだって。怒らないの？」

「グアイオレットは怖がつてまた引つ込んでしまいました。」

「ハハハ、面白れえな。弟どもに会わせてやりたいぜ」

「弟さんたちがいるの？」

「ああ、4人もな。ギャーギャー騒がしいが、ま、かわいい弟妹たちだ」

「クラリスはフツツと笑いました。この若者、最初の印象よりずっと若く、せいぜい17歳くらいでしょう。」

「そのメイク、流行ってるの？」

「ルパートは目の周りをガイコツのように黒く塗っています。かがつばさ対策に目の下を黒く塗っているのはローゼンヌの海岸でも見ましたが、こんな真っ黒なのは初めてです。」

「俺のオリジナルさ。他の奴らに舐められねえようにな」

「他の奴らつて、海賊仲間？」

「海賊？ おいおい、冗談じゃねえよ。俺はまっとうな用心棒稼業さ。あんな物騒な連中といっしょにしねえでくれよ」

「だつてさ」とサファイアに言うと、

「じゃあなんでそんな無頼なかつこうしてんのよ？ どう見たつて海賊よ！」

とルパートを攻めました。

「ファッシュンだよ。若い連中はみんなこうだぜ？ だいたいな、海賊がこんな大通りでいかにも海賊でございつてなかつこうして歩いているかよ？」

「クラリスたちは港の護岸から坂道を上り、崖の坂を上り始めました。崖の上に人はいません。」

「崖はせいぜい5、6メートルの幅で、向こうにも同じような護岸と埠頭が見え、その向こうには緑が見えます。」

「あそこはもうユークリナだ。チェツ、いいよなー、こんなすぐ近くのにあつちには緑で、こつちには岩しかありやがらねえ」

「船がずいぶんあるのね？」

向こうの埠頭にも船が何十艘と繋がれています。ルパートが言いました。

「ああ。お嬢ちゃん知ってるか？もうすぐ戦争が始まるんだぜ？

おかげで俺たちや商売上がったりだ。だからよ、みんなすっげー苛ついてるんだ。・・ほんとにな、お嬢ちゃん、気を付けるんだぜ？」

心配そうな顔を向けるルパートにクラリスは素直に「ありがとう」と言いました。ルパートは不思議そうにクラリスとサファイアを見て言いました。

「お嬢ちゃんたち、いったい何者なんだ？ どうやらただの観光客でもねえみてえだし。連れも、いねえのか？」

「わたしたちはね」

クラリスはエツヘンと威張って言いました。

「王室特別捜査官なの。正義の味方よ」

ルパートはプツと噴き出しました。

「そいつは頼もしいな。だが、あり得なくもないか。いや、実はな、頭からきつく言われてるんだ、このところこのソロカで女の子どもの誘拐事件が頻発していて、よその警察に目を付けられているんだそう。だから、特によそのそういう・・・10歳くらいの女の子には手を出すんじゃないぞ、ってな」

「あら、じゃあふだんはそういう子たちを誘拐しているの？」

「いや・・・まあ・・・その・・・こんな風にお金持ちのお坊ちゃんお嬢ちゃんに観光案内してあげて、それに見合った・・まあちよいと高めの・・料金をいただいたり・・、いやいやあなたからはもう十分な金をもらっているからこれ以上ボリやしねえよ。後は・・まあ、その、なんだ、恵まれない子どもにちよつと危ねえけど金のいい仕事先を紹介してやつたりもするけどよ・・」

サファイアが「ほーから見なさい！」と言いました。

「やっぱりこいつ人さらいの海賊よ！」

ルパートがむっつり言いました。

「しょうがねえだろ。俺たちだって好きでんなことやってんじゃねーや。俺たちだって・・食わなきゃならねえだろが・・・」
「やっていいことと悪いことがあるわよ！」

と怒るサファイアを「まあまあ」となだめてクラリスが言いました。

「とにかくここが物騒なところだっていうのは分かったわ。でもあなた正直者っていうか、バカねえ」

「なんだと!？」

「わたしみたいな子どもに手を出すなってお頭に言われてたんでしょ？　なんで用心棒なんて買って出たのよ？　後でお頭に怒られるわよ？」

「だからよお、周りの奴らの目に気が付かなかったか？　見りゃ分かんたろうが、この町にあんたみてえな綺麗なお嬢ちゃんなんていやしねえ。他の奴らもみーんな、あんたを金蔓と見てたんだ。そりゃあ頭の言いつけ破った俺は馬鹿だがよ、あんたが頭の手の届かぬ危ない奴らに捕まったりしたら・・、かわいそうだろうが」

「あらそう？　あなた、いい人なのねえ？」

「子どもにお世辞なんて言われたかねえや」

クラリスはサファイアに『ね?』と目配せしました。悪人ではないでしょう。

さて目的のトーチに到着しました。

レンガではなくこれも四角くカットした岩を積み上げた円筒形の塔で、崖の端ギリギリまで、直径5メートルくらいありました。高さは6メートルくらいでしょうが、ずんぐりした印象です。

「ちよつと待ってて」

サファイアが小さな窓から中に入って行って、しばらくして出てきました。

「上に男が二人いるわ」

「そりゃいるさ」とルパートが言いました。

「昼間だから火を焚く必要はないが、海の見張りも兼ねているから。常に二人の人間が詰めている決まりだ」

サファイアが、

「じゃあどつちかが『カジキ』なのかしら？」

と言うと、

「カジキ!？」

とルパートが悲鳴のような大声を上げました。その声を聞いて上の窓からひげモジヤの男が顔を覗かせました。

「なんでえ、エレジンとこの若造か。お頭がどうしたって、え？」

まぶたに傷のある恐い目で睨みました。ルパートは慌てて手を振りました。

「い、いや、違うよ、そ、そうだ、カジキだよ、カジキ! カジキマグロさ! いやあこのところ遠海の漁船も寄りつかなくてすっかご無沙汰だなあ・・・って。ね? へへへ・・・」

ルパートは後ずさり、窓からもう一人やつぱりひげ面の思いつきり悪い人相が顔を出し、

「ほ、ほら、カジキは上がってねえってさ。さ、か、帰るぞ」

クラリスに回れ右させようとするルパートに上から声が降ってきました。

「待ちやがれガキ! そこ動くんじゃねえ!」

「逃げる!」

ルパートはクラリスの手を取って走り出しました。仕方ないのでクラリスも付き合いながら、ひよいとナージャに飛び乗り、フワリと、ルパートを後ろに引つ張り上げて乗せました。

「ナージャ、えーと、逃げて」

ナージャはパカランパカランと土煙を上げて走りました。ナージャは地上を走るのだから速いのです。「待ちやがれー!」と後ろから声がしましたが、待ちません。

ナージャは山の中の数少ない森の中に止まりました。

「こら、放しなさい」

ルパートはクラリスの腰に手を回して必死にしがみついていた。

「う、おっと。へへ、こいつは失礼。実は俺、馬に乗ったのは生まれて初めてで」

クラリスはお愛想もなくルパートを下りさせ、自分も下りました。

「どういうこと？　なんで逃げなきゃならないのよ？」

「どういうことだって！？　そりゃあこっちのセリフだ！　あんた、よりもよってカジキなんかになんの用だ！？」

「呼ばれて来たのよ。挨拶に来いって」

「挨拶に来い！？」

ルパートはまた叫びました。

「カジキに挨拶って、あんた、何者だよ！？」

「だからあ、えーと、王室捜査官って言ったでしょ？　答えなさい！　カジキって、何者？」

「あんた、知りもしねえでのこのこ会いに行つたのかよ？」

カジキつてのはな、このソロカ一番の極悪海賊だ！」

サファイアがまた「ほら」と言いました。クラリスも意外です。

「海賊なの？　でもあの二人、そのカジキの手下なんでしょ？　なんで灯台の番なんてしてんのよ？」

「あんた、ソロカのことなんにも知らねえんだな？　いいか、この男はみんな船乗りだが、まともな船乗りなんて半分もいやしねえ。みんな、みんな、みゝんな、海賊みてえなもんなんだよ！！　でだ、カジキつてのはその中の一番の大ボス、このソロカを裏で束ねる海賊の親玉だ！」

あらまあ、とクラリスは呆れました。

「国丸ごと海賊だなんてねえ」

ルパートはがっくりと地面に座り込み、元氣のない声で話し始めました。

「ああそうだよ、ソロカは国を挙げて海賊やってるようなもんだよ。

だつてな、仕方ねえじゃねえか？ 土地はこの馬鹿でけえ岩山のせいで麦なんて穫れやしねえ。漁もでけえ船が造れねえから遠く沖まで出ていけねえ。最近流行の貿易も、結局この岩山が邪魔で陸路が不便で、船もこの港は素通りだ。ここは時代から取り残された孤島だ。いや、もともと人が住むような土地じゃねえ。だがよ、俺たちやここで生まれたんだ、ここで暮らしていくよりねえじゃねえか？ だからよ、だから・・・、海賊なんてものに成り下がっちゃったんだ・・・」

ルパートはすっかりうなだれてしまいました。

サファイアが気の毒になって言いました。

「でもあたしソロカについてそこまでひどい話は聞いてないけどなあ・・・」

ルパートが弱々しい笑顔で言いました。

「そりゃあな、正々堂々海賊なんてやってやしないよ。表向きはな、用心棒さ、俺みてえに、海の上でもさ。」

えーと・・・、お嬢ちゃんは知ってるのかなあ？この先のマーマラ海峡のこと？」

クラリスは「まあなんとなく」と答えました。

「こつちからの船に関して言うと、あつちのテスラ海に抜けるためにまずポリス島が邪魔になるわけだ。で、ポリス島を迂回するのにこつちのシヴィリ側と、あつちのテュークメン側があるわけだ。で、ポリスも、シヴィリも、テュークメンも、通行税つてのを取るんだ。通行しようとする船に、役所の船が乗り付けて、人数や積み荷を調べて、税金を計算して、徴収するわけだ。船からすればただ海を通過するだけなのに高けえ通行税なんて取られて、迷惑の上ねえよな？ ところが、それが1度ならまだ我慢できる。しかし2度3度となると、これはたまらねえ。ひでえ時には積み荷の没収だ。こいつあ、海賊行為とは言わねえか？」

クラリスはそうねえという顔をしました。ルパートはうなずいて「まずポリスが網を張って船を逃がさないようにする。税を取る。」

あっちに行くか、こっちに行くかでシヴィリからテュークメンから、また税を取られる。二重取りだ。さらにシヴィリとテュークメンが相手の側の船を捕まえてこっちにも税を払えと言う。三重取りだ。ひでえだろ？」

クラリスたちはうなずいて、ルパートが続けます。

「で、さすがにそれはひどいって言うんでな、シヴィリとテュークメンで協定が結ばれて、相手方の関税支払い証を持つ船からの二重取りは禁止されたんだ。ところが、今度はじゃあ俺の側の海を通れっていうんで、海の上で船の取り合いが始まったんだ。大型の積み荷を満載した美味しい船なんか来ると戦闘さえ起こって、下手すりゃ死者も出る。まったく物騒だ。そこで」

ルパートはちよつと元気に胸を張りました。

「海の用心棒の登場だ。請け負うのが俺たちソロカの船乗りたちよ。船に乗り込む場合もあるし、自分たちの船で護衛してやる場合もある」

「じゃあいいことしてるんじゃない？」とサファイア。ルパートはまた顔を渋くして、

「そうなんだけどさあ、けつきよく押し売りだからなあ。ただじゃねえもん。それなりの物はいただかなくっちゃな、こっちだつて命張ってるんだから、ま、安くはできねえよな？ だから、さあ・・・、船にしてみりゃけつきよく金を払わされるわけで、払う相手が誰かって違いだけでさ」

「そりゃあたしかに海賊と大差ないわね」

とクラリスが締めました。ルパートはまたまた落ち込んでいます。クラリスは腕を組んで木の間から港を見下ろしました。

「みんな海賊行為をしているわけね？ で、ソロカはそうでもしなければ生活していけない、と。これは、なんとかしなくちゃいけないわね」

「ちよつとちよつとクラリス」とサファイアが寄ってきました。「分かってるでしょうね？ 派手な行動は、なし、よ」

クラリスは肩をすくめました。

「いつそポリスもシヴィリもテュークメンも一度こてんぱんにやっつけてやるうかしら？」

「まったまたー、そうやって思い切ったことやっちゃうのがあなたの悪い癖なんじゃないのー？」

クラリスは舌を出しました。あんまり反省もしていませんが、今回はお遊びじゃありません。ルパートに言いました。

「あなた、ルピネーさんって知ってる？」

「あん？ たしか貿易会社の社長だろう？ ラピスの貴族の息子だっという？」

ルパートの表情を見る限りルピネー氏にあまり良い感情は持っていません。

「そのルピネーさんがカジキと何か関係があるようなんだけど？」

「うんー？ そうかあ・・・」

ルパートは考えました。

「じゃあ貿易会社の船の用心棒でも頼むのかなあ？ そうすりゃ俺たちは仕事ができるありがたいがなあ・・・」

「カジキとあなたのお頭さんとはどうなの？」

「うちのエレジンさんか？ 昔はなあ、エレジンさんもカジキの頭の子分として働いていたんだ。独立してから、商売の仕方でも対立して、俺たちじゃあソロカ力のつまはじき者さ」

「ふうーん・・・」

クラリスは考えました。

「じゃあ先にあなたのボスに会おうかしら？ カジキって人、なんか危ないみたいだし、先に情報収集しておきましょうか？」

「うん・・・そうか。そうだな。そうしろ」

ルパートは立ち上がりました。

「案内する。カジキの手下たちが見張っているだろうからな、気を付けて行こうぜ」

第5章 荒くれども

夕闇に紛れてクラリスとルパートは麓の町に下りました。真っ白で目立つナージヤは森の中に置いてきました。ルパートは心配しましたが

「だいじょうぶ。あの子は賢いから」

とクラリスは平気で言いました。光って目立つサファイアとヴァイオレットもカバンに入ってもらいました。

「お嬢ちゃんも相当目立つけどな」

とすっかり心配性になってルパートは言いましたが、

「わたし、ぜんぜん平気だから」

クラリスは白の薄地の半袖のワンピースを着ていて、ルパートでなくても目立つと考えるでしょうが、クラリスは例え金キラリンのドレスを着ていたって誰にもなんとも思わせない「隠し身」の魔法を使えます。心配するルパートをいいからいいからと急かして、町に下りました。

小さな船具屋がルパートの頭エレジンの家でした。

「こらルパート、どこほつつき歩いてやがった！」

店はもう閉じて灯りもなく、裏の勝手口から辺りをうかがいながら入ると、狭い部屋の中からすぐに怒られました。

「頭あ、すんません。ちよいとまずいことになっちまいました」

「バツキャロー、てめえそいう海賊みてえな口のききかたは改めろって言うてんだろーが」

と、自分の言葉の悪さは棚に上げて手下を叱る声は、想像していたよりずっと若いものでした。

「あんちゃん、お帰りー」

お帰りー！と元気のいい声が響きました。

「なんだよおまえらまた頭の所に遊びに来てたのかよ」

「頭じゃないよ、エレジンおじちゃんだよー」

「こら、おじちゃんじゃねえ、お兄ちゃんだ！」

楽しそうな会話の様子は狭い入り口をふさぐルパートの背中で見えませんが、クラリスはえいと肘で背中をつつきました。

「なんだ、誰かいるのか？」

「こんばんは。お邪魔します」

クラリスが顔を覗かせると中の人物たちが硬直していました。ほんつとに狭い一室に、男があぐらをかいて針仕事をしていました。塗っているのは汚いシャツの破れです。それに子どもたちが・・・、男、男、女、女、と、10歳から4歳くらいでしょうか、じゃれ合っただまのかっこうで固まっています。

「ど、ど、ど、どちらのレディーでいらっしやるんで・・・」

エレジンはとても分かり易く真っ赤になって言いました。クラリスは自分みたいな子ども相手に呆れ返りました。

エレジンは、まだ25歳くらいの青年で、あんまりきれいじゃない赤髪をした、言っではなんですごくふつ々の漁師さんでした。とても海賊のお頭には見えず、海賊というなら手下のルパートの方がずっとそれらしく見えます。

「それが頭あ、このお嬢ちゃん、カジキの頭の客人らしいんで」

エレジンの顔が苦く緊張しました。

「どういうこった？　なんでカジキの客をうちに連れて来るんだ？」

「それがその、どうもこのお嬢ちゃんもよく分かってねえらしくって」

クラリスはこの手下と頭を値踏みしました。あまり頼りになる感じではありませんが、悪人でもなさそうです。

「よいしょ」　とサファイアがカバンから抜け出してきました。

「わっ、光る虫だあ！」

と、おチビちゃんがびっくりした声を上げました。

「失礼ね！　妖精よ。こーんな綺麗な虫なんかないでしょ？」

サファイアが飛び回ると青い光の粉がキラキラ降ってきて、子どもたちは歓声を上げました。

「あんたも出たらどう?」

クラリスに言われてヴァイオレットもおっかなびっくり出てきました。

「あー、子どもだあ! 仲間だ!」

自分たちの仲間ということでしょう。

「こら、あたいは子どもじゃないぞお!」

舐められてなるものとヴァイオレットは火花を飛ばしましたが、パンと弾けて、綺麗な赤い光を振りまくばかりで、子どもたちを大喜びさせました。

うるさい子どもたちは妖精たちに任せて、クラリスは一応大人の二人に話をしました。

「あなたは元ボスのカジキさんと上手く行ってないんですって?」
とエレジンに訊きます。

「ああ」

「どうして?」

「俺はな、海賊まがいの商売に嫌気が差してんだ。こいつらみたいなガキどもによお、こんな惨めな仕事はさせたくねえ」

ルパートがイヒヒ、と笑いました。

「頭は惚れてる女がいるんだよ。その人と所帯を持ちたいから、まっとうな仕事かしてえのさ」

ルパートは真っ赤になったエレジンに「うるせえっ」と怒られました。

「ああそつだよ、悪りいかよ? 俺はあいつに、この港の女たちみてえに日干しのアザラシみてえにはなつてほしくねえんだよっ」

ひどい言い方ですが、クラリスは露店のあの愛想のないお婆さんの顔を思い浮かべました。訊きます。

「それで、何か将来の展望はあるの?」

「ない! ・・・考えてはいるし、あっちこつちいい話はないかと首を突っ込んではあるが・・・、ねえなあー、今のところは・・・」

「で、カジキのお頭に『そんな夢みてえなこと抜かしてんじゃね

え！』って叱られて、ケンカ別れしちまったんだよ」とルパートが後を継いで、エレジンはふてくされて「うるせえっ」とそっぽを向きました。

クラリスは考えて、話しました。

「カジキさんがユリアナ・ローゼ貿易会社のルピネー社長の代理人を名乗ってわたしに挨拶に来いって手紙を寄越したのよ。あなたたちこれをどう思う？」

二人は揃って「あんた何者だ？」と驚きましたが、

「わたしのことはどうでもいいの。カジキさんとルピネーさんの關係をどう思うの？」

と叱られて考えました。

「カジキの頭は馬鹿じゃねえ。頭が固くて腹が立つことはあるが、みんなのことは大切に思っつて、まあ、みんなの親父みてえな人だ。そんな大人物相手に、危ない賭けはしないだろう」

とエレジンは意見を述べました。

「ふうん、一応信用しても良さそうね。なんだ、じゃああの時逃げることもなかったじゃない？」

と、クラリスはルパートを睨みました。ルパートは、

「だってよー、あんたみたいな子どもがカジキに呼ばれて来たなんて、絶対ふつうじゃないじゃねえか？」

とつろたえながら言い訳しました。クラリスは「ま、いいでしょう」と落ち着いたもので、

「ところで、確認したいんだけど、

あのトーチって、カジキさんの持ち物なの？」

ルパートが答えます。

「いや、ありゃあ町つつうか国つつうか、まあどっちでも同じことだがよ、みんなの物だ。みんなで交代で見張りをしている。俺の当番もあつただけど・・・エレジンの頭の子分つてことで外されちまつた」

「エレジン一味って何人いるの？」

「今は・・・俺とエレジンさんの二人きりだ・・・。前はもつといたんだがよ、みんな離れていつちまった・・・」

「あらあら、よりもよつてずいぶん少数派の人に捕まっちゃったわけね。でも、じゃあ常にカジキさんの手下がトーチに詰めているってわけじゃないのね？」

「そうだな。今日はたまたま運が悪かったただけだ」

「運が悪かった・・・ねえ・・・」

クラリスはそうかしら？と思いましたが。自分が今日辺り到着しそうなのは鳩を飛ばした日から計算してだいたい分かったでしょう。トーチにはあの二人だけでカジキはいなかった。あの二人に何か命じていたのでしょうか？

どうもカジキは何か企んでいそうだと、クラリスの勘が言っています。

「エレジンさん。わたしみたいな女の子に手を出すなって、どこからの警告？」

「組合からだ。組合の長はカジキの頭だけだな」

「実際に女の子がさらわれるような事件はあったの？」

「いやあ・・・」

エレジンは考え、ルパートとも顔を見合わせて言いました。

「似たような事件ならわりとあるが・・・、取り立てて10歳の女の子ってことはないだろう？」

「はつきりしないわねえ」

ほんと、ろくな町じゃないようです。

「きつとね、カジキさんはわたしにまっすぐトーチに来てほしかったのよ。あんたみたいな邪魔が入らないうちに！」

クラリスに睨まれてルパートは小さくなりました。

「善意で声をかけたのによお・・・」

「お金上げたでしょ？」

「・・・」

「あ、そうだ！」

クラリスは妖精たちと遊んでいるチビたち（クラリスと大して変わらないのですが）に言いました。

「お兄さんは今日大金を稼いだからみんなでご馳走してもらいますよっ？」

弟妹たちは「ほんとか!？」と歓声を上げました。

「おいおい」

「直接カジキさんのところに乗り込んでやろうと思ったけど、やめた。正々堂々として、あつちから迎えに来させましょう。さて、どこか美味しいレストランはない？」

「頭あ？」とルパートはエレジンにお伺いを立てました。

「俺は関係ねえ。てめえらだけで行って来い」

クラリスはとなりの狭い台所を覗きました。窯の上に黒い鉄の鍋が置かれていて、冷えた汁が入っていますが、グルメのクラリスにはとても美味しそうには思えませんでした。

「用心棒としてあなたも付いてきてちょうだい。あなたの子分さんだけじゃ心許こころやすみないわ」

エレジンはクラリスの白々しさに呆れました。

「てめえからのこのこ危ない連中の中に乗り込もうとしておいて、大したお嬢さんぶりだな？」

「たんまり金持ってますぜ」とルパートが余計なことを言いましたが、エレジンも決心したようです。

「いいだろう。用心棒引き受けた。レストランなんてしゃれたものはねえが、美味しい物食わせてくれるところならある」

ルパートがまたイヒヒと嫌らしい笑い方をしました。

「あねさんとこでしょう？」

「てめえ、留守番してるか？」

「お供しますです、はい。俺もあねさんに惚れとりますから、へい」

ソロカに2軒だけある旅館のうちの1軒に向かいました。ここの食堂が今夜の夕食の場です。4人のチビたちは嬉しくて歌を歌いな

がら行進しました。もう真っ暗です。寂れた港町には各々の住居に小さなランプの明かりが灯るだけで、道は暗いです。

かがり火の焚かれた一角にお目当ての旅館がありました。

「あそこだ。1階が食堂で、夜はバーになって酔っぱらいどもがいるからな、くれぐれも絡まれないように・・・」

エレジンが分かり易くウキウキした顔で注意事項を述べていると

「キヤーッ」

と悲鳴がして、入り口のドアがバーンと開くと、いかつい大男が出てきて、後から二人の男が肩に一人の女性を担いで出てきました。女の人は「あーれー！」と悲鳴を上げてバタバタ手足を暴れさせています。誘拐です！

「野郎！ なんの真似だ！？」

エレジンが真っ赤に怒って大男に突進しました。

「うん？」

大男は突進してくるエレジンの腹をでかい長靴の足で蹴り上げました。エレジンは軽々と宙を舞い、ドシン、と土の上に背を打ち付けました。

「く、くっそお・・・」

エレジンは腰の短刀を引き抜きましたが、大男の振り下ろす大刀にあっさり払い飛ばされてしまいました。

「バーカ。身の程を知れってんだ。こいつは見せしめだ。ちよいと女手が入り用になっただんでしばらく預かるぞ」

行け、と大男は女性を担ぐ二人に親指で指示しました。

「ち、ちくしょお・・・」

追いかけてようとするエレジンはまた大男に横腹を蹴られて転がりました。

「か、頭あ・・・」

ルパートは震えるばかりで、おチビちゃんたちは顔を歪めて固まっています。

「フン」

クラリスは腰に手を当てて言いました。

「美味しいお夕飯がさらわれちゃうじゃない」

ミヤ〜オ。

女を担ぐ二人が向かおうとした暗がりには黄色い目玉が二つ、ピカツと光りました。黒猫です。しかし、

ミヤ〜オ。ミヤ〜オ。ミヤ〜オ。ミヤ〜オ。

のそりのそりと暗闇から猫たちはどんどん増えてきました。ミヤ〜オ、ミヤ〜オ、ミヤ〜オ。

「よ、よお、頭あ〜」

行く手の道を覆って増え続ける猫たちに二人の男は怯えて大男に助けを求めました。

「なんだなんだ、野良猫ども。おら、あっち行け！」

大男が威嚇に大刀を振るったときです、

「ミギヤ〜オツ」

猫たちは凶暴に牙を剥いて男たち三人に襲いかかってきました。

「うわっ、こら、やめろ！」

男たちは悲鳴を上げて猫たちを振り払おうとしましたが、後から後から躍りかかれ、爪に引つ搔かれ、鋭い牙に噛みつかれ、「ぎやあ〜っ」と悲鳴を上げて、二人は担いでいた女性を放り出し、三人とも明るいきっちへ逃げ帰ってきました。

「ヴァイオレット」

ヴァイオレットがエイ！と投げつけた火花がクラリスの魔力でバチバチ大きく弾け、三人の目の前で「バンッ！」と破裂しました。三人はびっくり仰天して腰を抜かしました。

「ジッター！」

エレジンは地面に放り出された女性に駆け寄りました。女性、ジッターも、何が起こったのか放心の体でいましたが、恋人に抱き起こされてひしと抱きしめました。

「ああ、恐かった。助けに来てくれたんだねえ」

「ま、やられちまったけどな。野良猫どものおかげ・・・」

エレジンと、ジツタは、暗い道を見て呆気にとられました。そこには猫なんてただの一匹もいません。いえ、

「ミャ〜オ」

一匹だけ、黒猫が樽の上で、体を暗闇に溶け込ませて黄色い目を光らせて鳴きました。

「何してんのよー」

クラリスが得意そうな笑顔で呼びかけました。

「みんなお腹。ぺこぺこよー」

クラリスは、行きましょ、とさつさと旅館のドアに向かいました。腰を抜かしている三人の男たちの前を「ごめんあそばせ」と平気で横切つて。エツヘン！とヴァイオレットが続き、「エツヘン！」と子どもたちとルパートが続き、サファイアは「ご愁傷様」とニヤニヤ笑いながら続けました。エレジンとジツタもおっかなびつくり中に入りました。

黄色いランプの灯る中、10人近くの男たちがお客に入っていました。が、黙り込んで、張りつめた緊張感が漂っていました。クラリスは一通り眺め回して、窓際のテーブルに向きました。表の大男よりもっと大きいごつい男2人に守られるようにして、眼光鋭い銀髪の老人が座っていました。

「ちゃんと見ててくれた？ テストは合格かしら？」

きつい顔の老人はギロリとしばらくクラリスを睨んでいましたが、フツと、口の端をゆるめました。

「魔法つてやつを初めて見たが、たいしたもんだ。その魔法を使う魔女も、たいした肝っ玉をしてやがる」

ひっへっへっへっへ、と老人は愉快そうに笑いました。

「ああ、合格だ。本当は別のテストを用意してたんだがな、このバカヤロが、言いつけを守りやがらねえで」

老人に目を向けられてルパートは震え上がりました。

「かかかかかかかか．．．」

ゴクリとつばを飲み込んで、

「かかか、カジキの頭あ．．．」

海賊（？）の首領カジキはエレジンとジッタを見てニヤリと笑い
ました。

「ジッタ。すまんかったな。だが本当にさらって行って孫の嫁にし
てやろうかとも思ったが、おいこら、エレジン！」

叱りつけられて、エレジンはグツと力のこもった目でカジキの怖
い顔を睨み返しました。

「ひっへっへっへ。ついでにためえも合格だ。仲間に入れてやる」

「誰があんたの仲間なんかに．．．」

カジキは大きな手を広げてエレジンの言葉を遮りました。

「いいから、聞け！ おめえにとつても悪りい話じゃねえ。俺も決
めかねていたが、腹あくくつた！ 俺たちやあユリアナ・ローゼ社
の社員になるぞ！」

えっ、とエレジンも驚きましたが、食堂にいた男たちも一様に驚
いた顔をしました。改めて見ればみんないっぱしの怖い顔をしてい
ます。どうやらみんなそれぞれの「海賊団」を率いる頭目どものよ
うです。

「雇われて働くっていつのか？」

カウンターの一人から不満そうな問いがされました。

「ああそうだ。だが俺たちは奴隷になるわけじゃねえ。ちゃーんと
契約して、ためえらの給料のために働くんだ。それが今の世の習い
つてもんだ。なあエレジン。おめえの望んでたなあ、そういうこと
たろうか？」

カジキにジロリと見られてエレジンは「あ、ああ．．．」と答えま
した。

「そうだよ、俺はそうやってまっとうな仕事をして、誰に後ろ指を
指されることのない、まともにお天道様を見られる暮らしがしたか
つたんだ」

「お天道様まともに見たら目が潰れちまわあ」

カジキが言つて男どもはゲラゲラ笑いました。

「どうだ、みんなもそれでいいか？」

問われて男どもは「おお！」と答えました。

「俺だつてカカアや娘どもに美味しいもん食わせてきれいな服の一着も着せてやりたいわ」

さつき不満を言つた男もそう言つてジョッキのお酒をグイとおおりました。

「ううー、うめえー」

怖い顔に似合わぬ嬉しそうな笑いを浮かべました。

みんなてんでに乾杯をして宴会を始めましたが、カジキが立ち上がつて両手を広げて皆を抑えました。

「おいおい野郎ども喜ぶにはちと早ええぞ。海峡がどうなってるか分かつたらんわけじゃあるめえ？」

喜びに湧いていた男たちがピタツと静止しました。カジキは眺め回して続けました。

「ユリアナ・ローゼ社の社員になったはいいが、そのままポリスの、それこそ奴隷に成り下がる危険だつてあるんだ」

クラリスが「はい」と手を上げました。

「取りあえずこの子たちにお夕食を食べさせてくれない？」

ルパートと弟妹たちはテーブルについてジッタの腕を振るつたお料理を食べています。

クラリスはエレジンといっしょにカジキのテーブルについてお料理を運んでもらいました。魚とポテトの炒め物と魚とポテトのスープでした。ジッタにお酒のジョッキを運んできてもらつて、エレジンは緊張していましたが誇らしそうでした。

「じゃ、改めて乾杯だ」

エレジンとカジキはジョッキをガツンとぶつけ合いました。苦い酒のしぶきが飛びます。クラリスが問いました。

「ルピネーさんはどこにいるの？」

カジキが答えます。

「ユークリナで情報を集めているはずだが、身を隠していて居場所
は分からん。あんたに捜してもらわにやな」

「ルピネーさんとはどうやって知り合っただんです？」

「ポリスの沖でな。カザリンとユークリナを結ぶ線上にはポリス島
がかかる。会社の貿易船はできるだけ近づかねえように迂回して通
っていたが、ポリスの方からしよっちゅうちよっかい出してきたやが
る。それで何度か用心棒を買ってやってな」

用心棒の押し売りをしたわけですね。

「それでルピネー社長が出てきて、いつそ業務提携しねえかと持ち
かけてきた。どうもわしはそういう話は信じられねえでな、いろい
ろ情勢もはつきりしねえし、断ってきたんだ。おう、嬢ちゃん、ト
ーチには入らなかつたんだな？ 実はあるの下には秘密の通路があつ
てな、あっちこっちとつながっていて、そこにあんたを閉じ込めて
俺のところまで辿り着けるかどうか試すつもりだったんだ」

そんなのクラリスには楽勝です。

「トーチつてのはな、たいまつのことだが、トーチカ、弓矢を射る
ための防御壁の陣地のことでもあるんだ。ほれあのとんがり山、そ
の昔はあれを挟んで西と東が戦争を繰り返しておったんだ。東の物
になったり、西の物になったり、やがて雇われ兵士どもが要塞に住
み着いて独立して国を作ったのが今のソロカだ」

「ラズベリーアールの成立と似ていますが、現在の結果はぜんぜん
違っています。」

「そんなわけでわしらは先祖代々そんな危ない雇われ仕事ばかりし
てきたわけだな。」

「10日前だ、ルピネー社長がわしを直々指名してかくまってくれ
と言ってきた。ポリスとラピス、両方から追われているってな」

「クラリスはスプーンを止めて緊張した目でカジキを見ました。」

「ラピスからも追われている、と？」

「ああ、確かにそう言った。信用できる腕の確かな助けがいる、と、わしを頼ってきたんだ。こいつあ、男として引き受けにやらねえ。で、わしはこつそり社長をユークリナに入学させてやった」

「ルピネーさんは最初どこにいたんです？」

「海の上だ。ボートで一人で漂っていて、うちの船に出会ったんだ。乗ってた船が襲われて一人ボートで脱出したんだらう。ポリスにするラピスにしる直接ルピネー社長の船を襲うなんぞ、正気の沙汰じゃあるまい。こいつは事態の容易ならなさ分かるもんじゃないか？」

クラリスはカジキたちを信用してうち明けました。

「ラズベリーアールの奥さんと息子さんもペテロブラーグに人質に連れられていきました」

「ラズベリーアールからか？」

カジキは驚きました。

「大伯爵の手元から？」

「いえ、伯爵様は今ロヴィークに来ていらっしやいます。ああ、そういうえば自己紹介がまだでしたわね、わたし、ロヴィークのクラリス。オーロラ姫お付きの魔法使いです」

「知つとる。黒魔女の娘じゃらうが？」

カジキに愉快そうに笑われてクラリスはムスツとしました。

「呪っちゃいますよ」

「へへへ、そりゃかんべんじゃ。いや、大伯爵がロヴィークにいることはルピネー社長から聞いたつたが、それにしても大伯爵の顔に泥を塗るような行為だらう？ こりゃアラピスも大事じゃ」

「ですね。ルピネーさんが襲われたとなるともう後戻りできませんね。で、マーマラ海峡の現在はどうなっているんです？」

「ポリスが国中の船を出してシヴィリ、テュークメンに向けて展開してある。シヴィリ、テュークメンからも軍艦が出て、三者三睨みの状態じゃ」

「戦闘はまだ起こってないんですね？」

「ああ、そういう報告はまだ入っておらん。ま、時間の問題だろうがな。ポリスがどう出るか？ それともカザリンが先に手を出すか？ それを合図に船団が大きく動き出すじゃろう」

貿易会社の問題がどうしてシヴィリ国、テュークメン国との戦争になるのかさっぱり分からないエレジンにクラリスが難しい政治情勢を教えてあげました。エレジンもカジキも目を丸くして驚きました。

「嬢ちゃん頭がいいなあー」

「先生がいいんです」

褒められて悪い気はしません。が呑気に照れてる場合ではありません。

「ユークリナでルピネーさんを捜し出して、一刻も早くカザリンに行かなくちゃ！」

ギイイイイ、と、ドアが開きました。表のかがり火に肩を照らされて、やたらと大きな影が立っていました。

ぬうつと入ってきて、

「よ、到着してるな？」

帽子を取ってクラリスにニツと笑いました。

「あー、クマ！」

陽気などんちゃん騒ぎに浮かれていたサファイアが指さして言いました。

身の丈2メートルを越す肩幅の広い胸板の分厚い大男、大貴族の父母に「熊」と罵倒される海運の大商人にして新進の政治家、

オレグ・ガドウ・ルピネー・ラズベリー侯爵。

肉の厚い顔に柔らかい子どものような笑いを浮かべる大男は、やっぱりそんな切れ者の大人物には見えないのでした。

第6章 海路南へ！

ソロカからカザリンまでおよそ1000キロメートルの距離があります。最高速度の帆船が最高の条件でも丸1日以上かかっています。

朝日が昇って、港で船を物色しながらクラリスは

「平気平気。半日で着けるから」

と言いました。

「これにしましょう」

と一艘のヨットを指さしました。全長8メートルの5、6人用の中型ヨットです。

「操縦できますよね？」

「バカにすんなよ」

ルピネーは嬉しそうに笑って言いました。

「俺はもともと漁師のせがれだぜ。特に俺はこういう仕掛け物は大好きなんだ」

体力勝負の外見とはうらはらに手をすりあわせて喜びました。

「でもルピネーさんは大きいから二人分ね。乗れるのは後二人ね」

「俺は行くぞ！」

エレジンが立候補しました。

「ヨットを操るなら俺だって負けねえ！」

愛しいジツタの手前ルピネーに相当ライバル心を燃やしています。

「じゃ俺も」

ルパートも立候補しましたが、

「おまえなんぞ付いていっても足手まといじゃ」

とカジキに却下されてしまいました。

「こいつを連れていけ。いろいろ使えるぞ」

推薦されたのは海の男らしくない青白い肌をした目の細い顔も体もひよる長い男でした。黒髪を後ろで三つ編みにまとめて、両目の

下に黒い炎の入れ墨をしています。

「ネプタっていいやす。どうぞよろしく」

ネプタという男は表情の読めない顔をしながら丁寧にお辞儀しました。

「おう、よろしく頼むぜ」

ルピネーは気軽に手を上げ、エンジンの方がかえって気味悪そうに横目で睨みました。

「じゃあさっそく行くか。まずはお手並み拝見」

ルピネーはクラリスといっしょに後ろの席に座り、操縦をエンジンとネプタに任せました。

「俺がメインだ」

「アイサー」

エンジンがメインマストの位置、船長の位置に付き、ネプタは素直に前のクルー、船員の位置に付きました。

バサバサツとメインセールが張られ、バサバサツと前方のジブセールが開かれました。

「フウム」とルピネーが舐めた指をかざして言いました。

「ま、取りあえず船が出るかどうかだな」

悪戯っぽくクラリスにウインクしました。

船は埠頭の右側に繋がれています。ネプタがもやい綱を解いて岸を蹴り、船首を外海に向けました。「さあて」とルピネーが言います。風は右前方から浅い角度で緩やかに吹いています。船を動かすには難しい風向きです。ヨットを動かすにはメインセール、ジブセール、2枚の帆の間を通る風を上手く調整して前進する力に変えなくてはなりません。2枚の帆を操る二人のコンビネーションが大事です。

「2時の風、舵そのまま、しっかり引けよ」

2本の帆は船体に対してほぼまっすぐで、2枚の間は狭くなっています。くっつかないように、開いてしまわないように、弱い風を推進力に変えるのは微妙なバランスを維持しなくてはなりません。

ヨットはスルスルと埠頭を離れて進み出しました。

「フム、まずは合格だな」

ルピネーが満足そうに言いました。振り返り、

「じゃ、行ってくるぜー！」

見送りの人たちに大きな手を大きく振りました。朝の6時。海の男たちにとっては大した早朝でもないのですが、30数名、いずれも悪そうな顔をしたごつい男たちが埠頭に並び、怖い顔をほころばせて「頑張れよー」「俺たちに仕事を持ってきてくれー」と大きく手を振り返りました。

沖に出ると風も強まり、横風になり、ヨットは大きく帆を膨らませて船体を傾けながらスピードを上げて走りました。まだまだ真夏すでに昼間と変わらない熱い太陽光線がじりじりと肌を焼いて、髪をなびかせる潮風が気持ちいいです。

「ヤッホー！」

と、サファイアはマストのてっぺんに登って気持ちよさそうに叫びました。ヴァイオレットは吹き飛ばされるのが恐くてクラリスのものの上に座ってしっかりスカートを握っています。ナージャは留守番で、ルパートの弟妹たちが面倒を見てくれます。

「さてお嬢さん」

ルピネーが挑戦的に言いました。

「このヨットで出せるスピードはこんなものだ。カザリンまで2日はかかるな。どうする？」

「お任せあれ。サファイアさん、危ないから下りてきてください」

サファイアは下りてくるとルピネーの肩の上に立ちました。

「いいですか？ ダッシュしますよ？」

ヨットはどうやら斜め後ろからの風がスピードと安定感とちょうどいいようです。クラリスはだいたいそんなところに狙いを定めると指をクルクル回して黒雲を生じさせました。雲は渦を巻いてモクモク大きくなり、ヨットに覆い被さるほどになりました。

びゅーうーうー・・・と、冷たい風が吹き付けてきて、帆は風をはら

んで「パンツ」と張り切り、ヨットはそれまでと比べ物にならない速さで走り出しました。

「うおおー、すげえすげえ」

ルピネーは大喜びし、エレジンとネプタは帆を持って行かれないように大慌てでロープを固定しました。

「なるほどこれなら半日で着いちまうな」

「キャツホー!!!」

ルピネーもサファイアも大喜びです。クラリスが飛ばされないように両手でしっかりと押さえてやるとヴァイオレットも安心してスピードのスリルを楽しみました。

黒雲は勝手にヨットの後を付いてきて、ヨットは帆に風を受け続け猛スピードで波の上を走り続けました。

しばらくして、

「ローゼのことがだいたい分かった」

とルピネーがしんみりした口調で言いました。

「最初にかザリンを出たうちの商船がポリスの海上警察に拿捕されたんだ。容疑は領海侵犯。ま、ポリスのいつもの手だ。たいてい海上で罰金を払ってお終いなんだがな、今回はしつこく陸まで引つ張っていきやがった。書類の不備がどうたらこうたらとしつこくイヤモンつけて、ローゼに話があると呼びつけたんだ。どうせ物欲しい契約をふっかけてくるんだらうと、ま、国の召喚だからな、ローゼもいやいや出かけていったんだ。ところが、前の船とローゼの乗ってた船の他の船員は帰されたが、ローゼ一人だけ出国を許されなかった。なんでなんだと掛け合うと、国宝の盗掘だと言いやがる」

クラリスは胸がズキリと痛みました。

「俺はその頃ペテロブラーグから帰ってきて、カザリンに向けてユークリナの港を発ったところだった。ローゼがポリスに入国するのとちょうど行き違いになっちまってな、対応が遅れちゃった。こいつは尋常じゃねえと思ってとにかく事実をはつきりさせようとハーメルンの国際裁判所に向かって航海を始めたところ、途中ポリスの

軍艦に追いかけられてな、仲間には悪いが俺だけボートで逃げ出させてもらった。そうしてソロカの船に出会って助けを求めたわけだ」
その後ユークリナに潜んで情報を集めたわけです。

「ローゼは一応丁寧なおもてなしを受けているらしい。いろいろクレオバトラがらみの利権を渡すようあの手この手で迫っているらしいが、ま、そんなんであの頑固な王様がポリスと商売しようなんて言うわけがねえ」

「そうだ、クレオバトラは助けしてくれないの？」

「今のクレオバトラによその国と戦争する力はない。今あの国を支えているのは伝統と格式だけだ」

ガツカリするクラリスにルピネーは笑顔を向けました。

「が、俺はあの国はそれでいいと思う。あの国はカーリーファの良き伝統文化のお手本なんだ。あの昔ながらの王室自体がカーリーファの生きた宝なんだ。あの国は、平和でなくちゃならねえんだ」

ルピネーの笑顔に釣られてクラリスも笑いました。

「じゃわたしたちが頑張らなくちゃ！ 王様のお守りはたいへんね？」

「まったくだ」

二人はいつしよに笑いました。

「見る」

指さされてみると、遠く、帆船が青い影になって揺れています。

「ポリスの軍艦だ。こっちの警戒はゆるいが、海峡の方はでけえ船がびつしり並んでいるぜ」

青い影は揺れながら、2つ、3つ、4つと浮かんでいきます。その向こうに、

「あれがポリス島だ」

船影の向こうに青い陸が急に立ち現れました。思ったより広いです。島というより扁平な大陸の一部のように感じられます。

「昔はこの海全部がああ島の物だったんだ。ラピスを凌ぐ大帝国だな。今でも血の気の多さは抜けてねえ」

クラリスは前回魂だけで訪れたポリス島の丘を思い浮かべました。あれは島のもつと向こうだったでしょうか？ あの丘から見た限りポリスがこんなに大きな陸だとは思いませんでしたし、こんな大戦争を仕掛けるような乱暴な国民とも思いませんでした。

あの若者たちは、ちよつと困った悪ガキたちではありましたが、純朴な青年たちでした。

「嫌だなあ・・・」

と、思わずクラリスは呟きました。

ポリス島を眺めていると、突然、大きな波しぶきと共にポリスの軍艦が揺れました。

大きな四角い三段マストがグラグラ揺れ、ひっくり返り、ザバザバと白い巨大な波しぶきが上がって、船は姿を消しました。

「な、なんだありゃ!?!」

ルピネーもびっくりして目を丸くしましたが、

「クラークンだ!?!」

冷静沈着無表情だったネプタが大声で叫び、膝をつき、揃えた手を大きく上下して拝み始めました。

「なにクラークン!?!」

ルピネーも言っただけ目を凝らしました。2隻目のポリスの軍艦が大きく揺れて、波しぶきと共に消えました。

「伝説の海のバケモノだ」

ルピネーが言うのとネプタが怒った声で言いました。

「クラークンは海神ポルセデューンの遣いだ！ 神々をないがしろにして海の戦を始めようというポリスに海神が怒られたのだ！」

ルピネーはフームと考えました。

「こつちに戻ってきて噂は聞いてたんだ、海の中にでっけい影が移動していて、クジラじゃねえかってな。月夜に知らねえ島が浮いていたと思ったら見る間にブクブク沈んじまったとか。だが、船が襲われたって話は聞いてなかったがなあ・・・」

遠く、ポリスの戦艦は方向を変えて逃げ出しましたが、ほとんど

位置を変えないうちに3隻目が沈められました。ネプタはお祈りを続けています。

「海の神様が人間の戦争を止めてくれるんならありがたいがなあ・

」
のんびり言うルピネーをクラリスが叱りました。

「人が死んじゃうじゃない！ やめさせなくちゃ！」

クラリスは身を乗り出して海の水に手を付けると正体不明の怪物に呼びかけました。

『こらー！ 暴れるのをやめてこっちにいらっしやい！』

4隻目の帆がグラグラ揺れて・・・持ちこたえませんでした。

海上に白い波頭が立って、こつちに向かってグングン進んできました。ネプタがいつそうお祈りに熱を込め、エレジンはロープにしがみつき、ルピネーが慌てて言いました。

「おいこらクラリス！ おまえ何しやがった！？」

「こつちに呼んだんだけど・・・どうしよう？」

「おいおい・・・」

ルピネーは呆れました。

「なんとかしてくれよ。軍艦沈めるような化け物に俺たちや手の出しようがねえぜ？」

クラリスは水に手をつけて、テレパシーで相手の正体を探りました。大きいです。怒っています。とっても怒ってます。・・・これはどうしようもありません。

「逃げましょう」

クラリスは言って魔法で勝手にヨットと風を操って全速力で逃げ出しました。ところが、

行く手の海が突然せり上がってきました。山になり、壁になり、大津波となってヨットにのしかかってきました。クラリスは櫂を切り、急カーブするとその大波に乗ってヨットを駆け上らせました。みんな振り落とされないように必死にロープや船体にしがみ付きました。100メートルも波の壁を走ったヨットは、ようやく斜めに

波を登り切り、向こう側へ大ジャンプしました。空を飛び、ザバンと水しぶきを立てて着水しました。

ところが、また次の大波が向こうから迫ってきました。クラリスは叫びました。

「きゃーっ、降参降参！！ まいりました、許してください、海の精さん！」

途端に大波は静まって、ドップンとヨットを押し上げ、引いていきました。

長い大きなマントを広げた、青く光る海の精がそこにいました。
「ひさしぶりね、クラリス」

海の精は威厳たつぷりのたたずまいに、なんだか腹に一物ありそうな怪しげな微笑でクラリスに挨拶しました。

「お久しぶりです、海の精さん。その度はお世話になりました」
クラリスも笑顔を作りながら、内心叱られるのをビクビクしながら挨拶しました。

後ろから猛スピードで近づいてくる物があります。
「こらーっ！ 見つけたぞーっ！」

たくさんの波頭を従えて青い光が飛んできます。イルカの精です。後ろの波頭は20数頭のイルカたちの背びれです。

クラリスはプンプン怒っているイルカの精から海の精に視線を移して・・・、海の精もやっぱりなんだか言いたそうな怪しい微笑を浮かべています。

「えーと・・・、わたし何かお二人の気に障ることをしたでしょうか？・・・」

イルカの精がピヨーンと飛んできて、

「おまえなー、あれだけいろいろやっというて心当たりありませんか？
ー！？」

「あれかなー？これかなー？」

とクラリスが子どものかわいさでごまかそうとしましたが妖精には全然効きません。目を三角にして怒るイルカの精を海の精が「ま

あまあ」となだめて、

「では会わせましょう」

と、クラリスたちの後ろに向けて大きく腕を広げました。クラリスたちが振り返ると、遠くから大きな波の山がドドドドドと猛スピードで迫ってきました。

「うわあーっ」

ヨットは山に突き上げられ、谷に突き落とされ、グラグラ揺れて押しつけられ、落ち着くと、「どっばあーんっ!!」と、目の前に巨大な波柱が立ち上がり、ざざざざざざあー、と大量の海水が降ってきました。直撃こそされなかったものの、クラリスは頭からしょっぱい海水でびしょ濡れになりました。

水煙の中にそそり立っていたのは、巨大な白いぬめぬめした禿げ山、と、グネグネした複数の・・・足？

「クラーケン！」

ネプタがひれ伏しました。これが伝説の海獣クラーケン！果たしてその正体は？・・・

「・・・タコ？」

ちよつとしたお屋敷くらいありそうな大きな禿げ頭、その下の方の水面に皮をかぶったまん丸の目玉が二つ、その間に尖った4つ割れのくちばし。大きな軍艦を叩き割るのに十分な凶太い長いグネグネした足にはクラリスなんてぺちゃんこに叩きつぶされそうな吸盤がいつぱい付いています。

海の精がクラリスの肩に寄ってきて言いました。

「心当たりありませんか？」

クラリスは考えました。

「たこたこたこたこ・・・えー、タコ・・・ねえ・・・」

苦笑いするクラリスに海の精が片眉を吊り上げた恐い笑顔で言いました。

「思い出したようですね？」

「あははははは・・・は・・・」

はい、思い出しました。前回クラリスは海に海人間を作り出そうと画策して、その候補者にタコを選んで・・そのすぐ後で人魚の情報が入ってきて、タコのことはそれっきり、すっっっかり、忘れ去っていました。

タコは二つの巨大な目玉を「グリグリグリ」と寄せてクラリスを見つめました。

「それにしてもずいぶん育ったものねー。どうしたの？」

「それもおまえのせいだろー！」

とイルカの精におでこをつつかれました。

「こいつはすっかり人間になる気満々でいたんだ。おまえ星の光をばらまいただろう？その魔力でこいつなりの考えで人間になろうとしたんだ。タコから見ると人間って凄くでかいだろう？自分たちを捕まえて食べるし。で、まず自分もでかくなろうとしたんだな。でもバカだから程度つてものが分からなくて、でかいつて言ったらクジラだから、この通り、クジラみたいにでかくなっちゃったんだ。で、バカだから、それ以上どうしたらいいか分からなくなって、時間切れ、星の魔力が収まって、図体ばかりでかいたただの怪物になっちゃったんだ。さあ！どうしてくれんだよお！？」

これ1匹でいったい何人分の食料になるのかしら？というのは思っても口に出さず、クラリスは訊きました。

「それでどうしてポリスの軍艦を襲ったりしたの？」

「それを訊くか？」とイルカの精は睨みましたが教えてくれませんでした。

「こいつ最初はクレオバトラの海に来たんだ」

「ああ、あのガラスの塔？」

星の光を納めるつもりでガラスの精一族に作ってもらった塔です。クラリスにはあまり思い出したくない悲惨な思い出のある建築物です。

「うん。あれは魔法で作ったものだからな、魔力が感じられたんだ。それではるばるローゼンヌの海から大海を渡ってやってきて、しば

らくその辺りで暮らしてたんだ。そこであたいらと再会してな」

イルカたちがピーピー騒ぎました。イルカの精はすっかり彼らと友だちになってずうつといっしょに遊び暮らしていたようです。海の精が

「わたしも彼の存在を感知して妖精の国からクレオバトラの海に戻って来ました」

と言いました。

「彼は悩んでいましたよ。この通り大きな頭になって時間と共に知恵も付いてきました。自分という存在の意味について考えるようになったのです。何しろ自分一人だけこんなに大きくなってしまつて、仲間は誰も自分を仲間と思ってくれません。自分は人間になつたつもりでいましたが、実は違つたということも分かつてしまいました。独りぼつちで寂しかったのです」

つぶらな大きすぎる目に見つめられ、クラリスもちよつと気の毒になりました。

「そんな彼にイルカたちと、もう一人、お友だちができました」

海の精があの特徴しい笑みを浮かべました。なんなんでしょう？

「紹介しましょう、あなたの、息子と言つてもいいでしょう」

クラリスはびっくりしました。誰とも結婚なんてした覚えはありません！

「あなたが躍起になつて甦らせた、彼が、それです」

海の中からゆらゆら丸い水の玉が浮かんできて、水面で弾けて、中に守られていた物が姿を現しました。

「おおつ！ 海神ポルセデューンの皇子（みこ）！」

ネプタがまたひれ伏しました。

「まっ、・・・」

人間の赤ん坊のようです。水の中に立っています。姿形は人間に似ていますが、顔はイルカの精に似て・イルカっぽいです。顔とお腹は白いですが、頭と背中中は鮮やかなオレンジ色に赤い線が走っています。髪の毛は半透明のゼリー状で、イソギンチャクの触手の

ようです。鱗があります。手足の指が長く、親指と3本の中指と、小指は後ろの方に離れて付いています。それぞれの間を水掻きが張っています。左右の脇の下に大きな切れ込みがあり、エラでしょう。「ブシュン！」

とくしゃみをして、鼻水を垂らしました。鼻の穴はだいたい人間と同じ位置にあります。鼻の先っぽはなだらかで、穴にふたができるようになっています。海の精が優しい顔で言いました。

「この子はまだ肺呼吸が下手なんです。生まれてまだ2ヶ月足らずですからね」

「ふうーん……」

クラリスはもう目をまん丸くして満面の笑みでその「人魚」の赤ちゃんを見つめています。物語の中の人魚の下半身は魚ですが、この子の脚は二つに分かれています。お尻から幅の広い尾がスカートのようにフワリと広がっています。脚はまだ短くてはつきりしません。人が人間と同じ向きの関節です。赤ん坊のくせに太ももだけはまん丸く太いです。海中を泳ぐために発達しているのでしょうか。しかし見た目の姿は想像以上に人間に近いです！

「ううーくん、やった、やったわ！ 人魚を甦らせたわ！！！」

やったー！とクラリスは両手を高く上げて大喜びしました。人形の赤ちゃんは怯えて海の精に救いを求める視線を送りました。

ゴツンとクラリスの頭を巨大な物体が殴りました。

「いったーい！」

振り向くと、大だこがギョロリと睨んでいます。

「なに？なに？ なんなのよ？」

「それはだな」とイルカの精が顔をくつつけて凄みました。

「こいつは母親を求めて恋しがってるんだよ！」

海の精が説明しました。

「あなたがポリス島から送った人魚の肉はわたしが大きなホタテ貝に大切にしまっておくように命じて守らせていました。やはり星の光を受けて卵に変化したようです。あなた、妖精たちに光を分けて

やっている最中についでに人魚の復活も考えたのではないですか？」
「さあ・・・、覚えてないです・・・」

笑ってごまかしましたが、本当にあの時のクラリスは意識朦朧としていて、自分でも何をどうしたのかさっぱり覚えていません。

「およそひと月後、卵から稚魚が生まれました。ホタテ貝はわたしの命令を守って栄養を与えて稚魚を守りました。そのうちだんだん尻尾が短くなって脚が生え、このように人間のような姿に成長しました」

人魚の成長過程はオタマジャクシがカエルになるような感じのようです。

「ホタテ貝は赤ん坊を自分の子のように大事に育ててくれたのですが、わたしへの報告をすっかり忘れていました。それで彼（大ダコ）に気付いてやってきたときによく彼にも気付いたのです。その時には彼らはすっかりお友だちになっていました。同じ星の光とあなたの魔力から生まれた者同士通じるものがあつたのでしょうか」

大ダコはクラリスの頭をまたいで、クルリと器用に足を丸めて人魚の子を下からすくうようにして遊んでやりました。人魚も喜んで海に潜るとさすが上手に足の周りをクルクル泳ぎました。

「それはどうもほつたらかしにしちゃってごめんなさい。で、どうしたの？」

「だからあんたを捜しに行ったんだろぅが!!」

と、またイルカの精に頭を小突かれました。海の精が言います。

「あなたは無茶したせいで体が動かなくなっていたのでしょうか？」

オーロラ姫にもお子さんが生まれましたし、落ち着いたらきつと来るだろうってなだめていたんですよ」

「教えてくれたらよかつたのに？」

「あなたが自主的に来るのを待っていたんです」

「はい」とクラリスは小さくなりました。

「そんなところに海峡の危機が起こって、わたしがうっかりきつとあなたが来るだろうと言ってしまったのです。そうしたら彼はもう

居ても立ってもいられないであなたを迎えに行ってしまったのです」「
「そうなの。ごめんなさいね」

とクラリスは大ダコに謝りました。

「それでわたしが乗っていきそうな船を見つけて寄っていったの？
でもそれでどうして軍艦を沈めちゃったの？」

「それはあたしたちの為なんだ」

とイルカの精。

「こいつこんなにでかい体してるから近づいていったら驚くだろう？
でね、代わりにあたしらが船に寄って行って、船員たちの心を和ませるようなパフォーマンスを披露してやったんだ。もしあんたが乗ってりゃ絶対喜んで顔を出すはずだからってね。ところがあのバカ兵士ども、いきなりモリで突いてきやがったんだ！ あたしらは慌てて逃げ出して、あっちも相当イライラしてたのかしつこくモリを投げてきて、それを見た大将が怒って船を沈めだしたんだ」

「なるほどねえ」

友だちを襲ったからあんなに怒っていたのです。いい奴じゃないですか。海の精が言いました。

「さ、そういうわけです。あなたは言いましたね？責任は自分が取る、と。わたしも言いました。だからこうしてこの子を保護してきました。けれどわたしに出来るのはこれだけです。この子も、彼も、この世界で一人きりの存在です。さ、あなたは彼らにどう責任を取りますか？」

クラリスは人魚の赤ちゃんを見ながらニコニコしました。生後約2ヶ月だそうです。人間にするともう1歳くらいの感じに見えます。それに、なんだ、かわいいじゃないですか！ クラリスは実はもっとグロテスクな魚顔を想像していたのです。これならオーロラ姫も大喜びです。

クラリスはニコニコして、人魚の赤ちゃんも何か感じるのか、不思議そうな顔で大きな目でじっとクラリスを見つめています。

クラリスの頭の中、

「なーんか使えないかしら?・・・」

あごに指を当ててニコニコ考えてます。と、そこで

「おいおい、悪いがこっちは急いであるところなんだがな」とルピネーが言いました。

「あんたらも悪いがカザリンまでつき合ってくれねえか?」

海の精が

「あなたがルピネーさんですね? サファイアと、あの魔女の強運を持った男の子」

と笑いました。

「いいでしょう。海の生き物にとっても人間たちの争いで海が汚されるのは迷惑です」

海の精は大きな波にヨットとイルカたちと大ダコを乗せると猛スピードでカザリン目指して進み出しました。人魚の赤ちゃんは海の精の作った水のボールに保護されて、大ダコの足の吸盤の上に乗せられています。

快適な波乗りを楽しみながらルピネーはそつとクラリスに耳打ちしました。

「このタコと人魚、何か使えないか?」

「まあっルピネーさんったら、そんなことを考えていたんですか!」?

とわざとらしく驚いた振りをして、クラリスはニツと笑いました。「海神ポルセデューンの遣いに皇子ですって。ねー?」

「おまえもけっこうなワルだな?」

「いえいえ、侯爵様こそ」

二人は悪い顔で笑い合いました。

第7章 千年王女の思い出話

「モデストの奴も監視されてるだろうな」

ヨットを海の精の大波に任せて、ネプタはひたすら海神の遣いと皇子を拝み、サファイアとヴァイオレットはイルカの精に誘われてイルカたちとたわむれ、エレジンはまったく夢心地で、クラリスとルピネーは二人で話をしていました。

モデストはルピネー氏とローゼさんの間の一人息子です。

「モデストさんは今どちらに？」

「モスクリンの学校に留学している」

モスクリンはラピスで1、2を争う大きな文化都市です。

「去年親父殿のところ遊びに行ったときあいつがこっちで勉強したいと言つてな、それでモスクリンが良かろうと紹介してもらったんだ」

モデストは15歳です。

「あそこは政治とはあんまり関係ない文化都市ではあるが・・・ま、奴らにや関係ねえやな」

「心配ね・・・」

ルピネーは奥さん二人と息子さん二人をラピスに人質に取られているのです。

「ウム・・・」

ルピネーもさすがに遠く目を細めるようにして険しい表情になりました。こつした顔はやはり大伯爵に似ています。

「ま、なんにも起きやしねえさ。無事帰ってくる」

「そうね」

幾分沈んでしまった気分を盛り返すようにルピネーはおどけた顔で訊きました。

「で、魔女殿の手はどんなものかな？」

「わたしのってことじゃないけど」

と、クラリスは昨夜の続き、各国間の背後の関係と、それを切り崩す方法を話しました。

「クーロンのテュークメンからの寝返りを阻止すること。そうすればポリスは全面的にアルマ教国家連合と戦うことになり、戦意はかなり落ち込むと思います」

ルピネーはニヤリとしました。

「なるほど、宰相ラルラベル姫の入れ知恵か？ おっかねえ女だ」

「可愛らしい人ですよ？」

「ハハハ。肝心のポリスが早々に戦意を失っちまったらラピスも後援のしようがねえな。アルマ教軍団の硬い結束と戦意高揚を見せつけてやるんだな」

「あんまりやり過ぎも困るけどね」

「そうだな。俺たちや別にポリスを潰したいと思ってるわけじゃねえ」

クラリスはうなずいて、なんだかもうすっかり二人は意気投合しています。

クラリスはふと、クスクス笑い出しました。

「どうしたい？」

「だって、」

クラリスは笑いながら言いました。

「わたしのお父さん、ルピネーさんに間違われていたんでしょ？」

母親の計略です。

「だからルピネーさんをお父さんと比べちゃって」

まったく別人です。

「こんな親父じゃなくて良かったな？」

ルピネーも12年前にチラッとだけクラリスの父親を見ています。クラリスはルピネーの顔を仰ぎ見てニツと笑いました。

「お父さんも大好きだけど、おじさまも素敵よ」

「おー、そりゃ嬉しいね」

ルピネーもニツと笑いました。本当に、こんなバカでかい熊みた

いな男なのに、となりに居てとても心地よい安心感があります。本当ならクラリスは恨まれて嫌われて当然の立場なのに、父親の大伯爵、母親の奥様ともども、なんとありがたい家族でしょう。

クラリスはこの一家が大好きになりました。

1時間ほど後、もうカザリンの港が見えてきました。

この陸は、ロヴィークのあるユーレシア大陸の対岸、カリーファ大陸なのです。

ヨットを乗せていた大波がザー・・・と引いていきました。海の精が言います。

「ではわたしたちはここまで。クラリス」

わざと冷たく睨むような顔で、

「またわたしたちを利用する悪巧みをしているようですけれど、ほどこほどに」

「はい」

ルピネーとの内緒話をすっかり聞かれていたようです。海の精はニツと笑って念を押ししました。

「あなたがこの子たちの責任放棄しないなら手伝ってあげないでもありません。いいですねっ？」

「はい。肝に銘じて」

ね？とクラリスは人魚の王子と守護者の大ダコに笑いかけました。「じゃ、必ずまた来るから」

と手を振ってクラリスたちヨットはカザリンの港に入っていきます。

カザリンの港町は平坦な印象がしました。砂浜が広く、平屋の小さな家がたくさん並んでいます。岩が投げ入れられた防波堤が巡り、砂浜で底が浅いでしょう、大きな船は陸まで近づけず沖に、5艘、2本マスト、3本マストの大型帆船が碇を降ろしています。

ヨットはスーイと、棧橋に着けました。

棧橋を歩きながらルピネーが解説しました。

「ここは漁師町だからな、でかい船のための港湾は整備されてねえ。徐々にやっつてはいるが、一大工事だからな、おいそれとはいかねえ。むしろ漁業で十分食っていけてるんだから港湾まで欲張る必要はねえと俺は思ってる。近くにいい港があれば、別にここに港を定める必要もねえんだがな」

「例えば？」

「クレオバトラでも、クーロンでもかまわねえぜ？」

「あらあら」

クラリスはびっくりしました。

「せっかくお金持ちになってきているのに、それってカザリンの人たちに対する裏切りじゃないの？」

ハツハツハ、とルピネーは大口を開けて笑いました。

「ま、バランスの問題さ。こんなちっぽけな田舎の国が、身の丈に合わねえ港湾なんか持って不必要な大金稼いだってしょうがねえだろ？俺たちや海の間人よ、仕事場は海で、陸じゃねえ。海の仕事ならいくらでもあらあ。そのための貿易会社よ。ま、欲は、かかねえこつたがな」

クラリスは感心しました。ただお金を稼ぐだけではありません、このルピネーという政治家は周辺国との利害調整も考えてみんなで豊かになることを目指しています。

大した人物です。そのくせ、

「おう、大将！無事帰ってきたか？」

砂浜で網の手入れをしていた老人に気軽に声をかけられ、漁師たちや奥さんたち、子どもたちが集まってきました。「よお、お帰り！」とみんな嬉しそうな笑顔です。

しかし。

「ローゼさんは、まだ帰ってこないのか？」

と、一行の中にローゼさんの姿のいないのを確認するとみんな顔を曇らせました。

ルピネーもウムと険しい顔でうなずきましたが、すぐにまた明るい顔になって言いました。

「心配するな。力強い助っ人を連れてきたからよ、ま、じきに問題解決だ！」

大きな手に背中を押されてみんなの前に出されて、さすがにクラリスも赤面する思いでした。みんなもこの娘がいったいなんなんだろうと不思議そうにじいっとクラリスを見つめました。

「この子はな、魔女だ」

「へええ、魔女?!」

魔女と聞いて怖がるかと思ったたらかえって好奇心に目を輝かせました。

「じゃあさ、月の夜にほうきに乗って空を飛んだりするの?」

無邪気な子どもの問いにクラリスは

『そんなおとぎ話みたいなことは出来ません』

とテレパシーで伝えてみんなびっくりしました。

「おいおい、なんだ今のは?」

「知らない言葉なのにちゃんと意味が解ったぞ?」

「不思議だなあー」

と大喜びしました。暗いソロカの住民とは正反対の明るい人たちです。

彼らはクラリスたちとは明らかに違った人種の違った顔つきをしていました。しゃべる言葉もクラリスの初めて聞くカーリーファ大陸の言葉で、オリビアンというアルマ教文化の言葉で、でもかなり方言がきついこの国独特の言葉になっているようです。ですからクラリスは彼らの会話をテレパシー翻訳で聞いています。

こちらの人たちは肌が茶色でみんなとっても大きな目をしていきます。背は低めで、漁師の男たちにもルピネーのような大男は見あたりません。

クラリスはルピネーに訊きました。

「この人たちはアルマ教徒ではないの?」

「中にはいるが、少数だな。信仰されてるのは圧倒的に海の神様だ」
「ポルセデューン？」

「いや、あれはポリス神話の神様だ。名前は、ねえな。ただの『海の神様』だ」

大ざっぱというか、健全な宗教観にクラリスには思えます。海の精を連れてきたら大騒ぎだろうなとも思いました。

「よし、みんなあ、いつしよにローゼさんを取り返そうぜ！」

おおーっ！、と、漁師たちは手を突き上げて盛り上がりました。ルピネーは慌てました。

「おいおい、慌てるんじゃないぞ。まさかみんなでポリスに乗り込むわけじゃあるまい？」

「他にどうするよ？」

逆に漁師たちがルピネーに詰め寄りました。

「グズグズしてたらローゼさんが奴らにひどい目に遭わされて殺されちまうぞ！」

漁師たちはみんな怖い顔でうなずきました。ルピネーは弱りました。

「気持ち分かるがな、そう簡単な問題じゃねえんだ」

しかし微妙な国際問題を説いても彼らは聞く耳を持ちそうにありません。ルピネーと押し問答をする彼らに、クラリスはテレパシーである強烈なメッセージを送りました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漁師たちもルピネーも、その強烈な言葉に呆気にとられて黙りました。

「・・・親父殿がそんなことを・・・」

自分は動かないと宣言したラズベリー大伯爵が、もしルピネーの奥さんや息子さんの人質を殺されたらどうするか？との問いに答えた言葉を伝えてやったのです。

その凄まじい覚悟を突きつけられては誰も黙り込むしかありません。

「分かった。俺たちはあんたらに従うよ」

漁師たちは大人しくなり、

「おい。絶対にそんなことにはさせねえ。ローゼも、無事に取り返す！」

と、ルピネーもみんなに誓いました。

ルピネーに案内されて「ユリアナ・ローゼ貿易会社カザリン支社」のビルに来ました。木造2階建てのちよつと大きめのふつうの家です。

「おお社長！ お帰りなさい！」

社員の若者がルピネーを見つけて飛び上がり、机に向かって事務仕事をしていた3人の社員たちも驚いて立ち上がりました。10代から30代の若者たちです。

1階は事務所、応接間と、クラリスにはカンパニアのパレスでお馴染みの光景です。

「社長、ローゼ支社長は？」

「なんにも連絡ねえか？」

「ええ・・・」

社員たちは一様に顔を曇らせました。ルピネーは励まして言いましました。

「心配するな。じきに帰ってくる！」

ところで、王女様たちやあ上にいるのか？」

「ええ。ほら」

と社員は指で天井を指しました。

シフィー、ワーフド、イシナン、サラサ、アルバ、・・・

女たちの揃った声が聞こえてきます。ルピネーはフフと微笑みましました。

「算数のお勉強中のような」

階段を上がります。数字の合唱がフツと途絶えます。

「社長！」

先生役の女性が言っつて椅子に座っている生徒の女性たちがいっせいに振り返りました。

クラリスはニッコリしました。

「キャンディー王女様、皆さま、お久しぶりです」

みんないぶかしげな顔をしていましたが、数人が「あっ」と気付きました。

「あの幽霊魔女さま？」

「幽霊じゃないっつてば〜」

みんな立ち上がっつて笑顔でクラリスを取り囲みました。キャンディー王女は豊かな黒髪を後ろに束ねてさっぱりしたかつこうをしていました。でも真つ青な瞳の美しさはずば抜けて目に付きます。

「王女、皆さん、お元気でした？」

「ええ、元気元気。もう無茶苦茶絶好調よ！」

王女は両手を振っつて元気元気を表現しました。クラリスはその元気づりに笑いました。この絶世の美女の王女様、見た目はずいぶん大人びていますが、まだ14歳の子どものものです。正確には100歳プラスになるのですが。

他のみんな、9人の乙女たちも元気そうでした。

「はじめまして、王女、ご婦人方。ルピネーと言います」

ルピネーが挨拶すると、この見上げるような大男を相手に他の女官たちはちよつと腰が引けているのに王女様はさすがに平気でニコニコして、

「おお、そなたがローゼ殿の夫殿であらせられるか。奥方様にはたいへんお世話になっております。お会いできてたいへん光栄であります」

と、大昔の王女の言葉で挨拶しました。ルピネーもニコニコしましたが、さすがになんと言っつてるのかさっぱり分かりません。

キャンディー王女はルピネーの後ろで実際以上に小さく控えてい

る男二人に目を向けました。

「おお、そなた！ 我が国の者ではないか!？」

王女が笑顔で声をかけたのはネプタです。

「・・・俺、ネプタって言う、ソロカの、船乗りです」

ネプタは面食らった顔ながら片言で王女に挨拶したのでクラリスもルピネーもびっくりしました。

「あなた、王女の言葉が分かるの？ っていうか、あなた、王女の国の人？」

肌が白くて黒髪という以外はあんまり似てませんが・・・。王女がクラリスのテレパシーを聞いて答えました。

「そうだ。これは典型的なブルータリスの人間の顔よ。ブルータリスは北と東の人種の混じった民族であるからな、極端な北顔や極端な東顔があるのだ。わたしや女たちは北顔、この男は東顔である」なるほど。ネプタが恐る恐る言います。

「それじゃああなた方は本当に『伝説の王女と10人の乙女たち』様方なんですか？」

「そうである」えっへん！

「本当に・・・。王女様。わたしの聞いた話では我が先祖はポリスに捕らえられた伝説の国ブルータリスの民であったが、ポリスに帰化し、しばらくポリスの民として暮らしたが、政変が起こり、ポリス帝国は弱体化し解体し、本国でも争いが起こり、その中で追いつめられた我が一族は海へ逃げ、我が祖先はソロカに流れ着いたと聞かされています」

クラリスが言いました。

「じゃあこの人、ガルマさんの子孫かも知れないわねえ？」

10人から欠けた一人で、幽霊となつてずーっと霊廟を守っていました。

「まあ、ガルマのお孫さん！」

仲間の子孫と知って王女たちはネプタへの親密感を一気に抱きました。クラリスからネプタの周りに移動し、ネプタはこの美しい華

やかな女たちにすっかり赤面してうろたえています。

クラリスも王女の国の民族が今に生き残っているのを嬉しく思いました。

「おい、クラリス」とルピネーに呼びかけられてクラリスも王女に会いに来た目的を思い出しました。

「王女様、皆さん。是非皆さんのお知恵を借りたい事態が起こっているのです」

と、クラリスは今ポリス国を中心とした戦争が起ころうとしていて、それを阻止するためにクーロン国を味方に付けたいことを説明しました。

クーロン国はここカザリン国のとなりの大きな国で、その南部に王女のブルータリス国があったと伝えられています。

「それでクーロン国を喜ばせるようなネタはありません？」

「ネタ？」

「例えば・・・王家の隠し財産とか！」

「隠し財産？ そんなの子どもわたしが知るわけないじゃない？」

王女は、ねえ？、とみんなに訊いて、みんなも「知りませんわねえ」と言いました。クラリスはガツカリです。

「何かありません？ ほらあ、よくあるじゃないですかあ、王様の地下のゴージャスなお墓とか？」

「我が国は火葬で、灰は風で撒いてしまっぞ」

「お墓つてないんですかあ？」

「それこそ霊廟にプレートを並べるだけだ」

「そこに何か特別のお宝は？」

「建物はそれはそれは美しい物であったが・・・残ってはおらぬだろう？」

「残って・・・ないでしょう・・・ねえ・・・」

残っていれば世界遺産として観光名所になっているでしょう。

「王宮は？」

「ポリスの野蛮な兵士どもにすっかり略奪されて燃やされてしまっ
た」

「お宝を持って逃げた貴族とか？」

「逃げた者はいるが、宝などをつくの昔に食い扶持に消えておるだ
るう？」

「1000年前の話ですものねえー……」

「あーあ……、とクラリスはルピネーと顔を見合わせました。どう
やらキャンディー王女を頼ってクーロンを味方にするのは無理のよ
うです。」

「王宮ですか……。懐かしいですわねえ……」

「ああ、国王様の最期が思い出されますわねえ……」

「あのポリスの野蛮人ども、えい、憎らしや」

「ポリスなどさっさと滅んでしまえばよろしいのですわ！」

「そうよそうよ！と、女官たちは危ない方向で盛り上がってしまった
ています。」

女官たちの会話を聞いていた王女がポツリと言いました。

「わたしはロンババが懐かしいな……」

女官たちはピタリとおしゃべりをやめて王女様を見つめました。

「ロンババ様ですか……」

「お懐かしいですわねえ……」

「良い方でした……」

「楽しい方でしたわねえ、南方騎士ロンババ様……」

しみじみした女たちの会話にルピネーが「おい、ちよつと待て
と眉根にしわを寄せて言いました。」

「今、南方騎士ロンババ……って言ったか？」

「言ってみたみたいよ」とクラリスが言いました。

「ロンババって」

「なんとなくふざけた名前です。」

「誰？」

「ああ、ロンババってのはアルマ教徒の恥とされる女闘士だ。女だ

てらにあちこちの戦場を駆けめぐって、多くの武勲を立てたが、最後は結局敵方に捕まってさらし者にされた上で殺された、ってことで、女だてらにってとこと、みっともなくさらし者にされたってところでアルマ闘士の誉れを剥奪されて、アルマ教徒の誇りを汚した罪人として侮蔑されている。ま、あの宗教は女が表に立つのを極端に戒めてるからなあ・・・」

ルピネーはポリポリ頭を掻き、「ローゼの奴もちつたあアルマ教の女を見習えってんだ」とグチを言いました。

クラリスはふーん・・・と思いましたが、何か違和感を感じて王女たちにルピネーの話を確認しました。すると、

「なんですってえ!？」

「ロンババ様を侮辱するとは、いくら我らが恩人だとして許せません!」

と女たちは騒ぎ出しました。ルピネーは女たちの剣幕に恐れおののき、「ちよ、ちよっと待ってくれ」と猫のように背を丸めて及び腰に懇願しました。

「そういう話なんだよ。なにも俺が悪口を言ってるんじゃないよ」

クラリスもどうもおおかしく感じるので王女様たちに訊きました。

「実際のロンババ様ってどんな人だったの？」

「まず第1に」

一人が言いました。

「ロンババ様は女ではありません。立派な男性です」

クラリスからテレパシー翻訳を中継されてルピネーはびっくりしました。

「男お？ そりゃあ、話が全然違うじゃねえか？ ロンババ違いか？」

一人が言いました。別々の言葉をしゃべっていますがクラリスのテレパシー中継で頭の中ではふつうに会話が成立しています。

「ロンババ様は南方騎士の誉れ高い方でした。他のロンババ様などわたしたちは認めません!」

女たちはそれぞれに思い出を語り出しました。

「わたしたちブルータリスは特に国教というものを持ちませんでしたが、ロンババ様は宗教に依らず、常に理に従順に、正義によって行動し、弱きを助け、悪しきものがどんなに強大でも決して怯むことなく立ち向かっていく、まこと正義の騎士であらせられました」

「わたしたちブルータリスは南北東西の世界を結ぶ交通の要衝としてどことも分け隔てなくお付き合いし、それぞれの文化の架け橋の役割を担い、平和にその任務を遂行していました」

「ところがポリスはノール海支配に飽きたらず、深く大陸中央までその支配を伸ばそうとしてきました。まったく文化を異にするアルマ教の国々と衝突し、それまで平和に両文化の架け橋を担っていたブルータリスを力ずくで支配しようとして攻め入ってきたのです」

「その危機にロンババ様は駆けつけてくださいました。南方騎士の誉れ高いロンババ様のご加勢はそれはそれは我がブルータリス国民を勇気づけたものです」

「しかしポリスの大軍勢の前に我々の敗北は明らかとなり、その最後の戦にロンババ様は出陣され、そのまま亡き者となってしまわれたのです・・・」

「最後の最後まで、それはそれは勇敢な奮闘ぶりだったと聞いています・・・」

女たちはシクシクと袖を涙で濡らしました。

ルピネーはウーム・・・と腕を組みました。

「そりやまたずいぶん話が違うな。どうもこりゃあ・・・、ただ単に時間が経っているからじゃなさそうだな・・・」

ポリスが創作したようだな」

「創作？」とクラリスは訊きました。

「けつきよくな、その後30年、アルマ教徒の抵抗が激しくて、ポリスはそれ以上の大陸の南侵を諦めたんだ。でだ、南方騎士ロンババは当時アルマ教徒の英雄だったわけだろ？その英雄が命を懸けた戦じゃアルマ教徒は引つ込まない。それでロンババを英雄じゃなく

する必要があったんだろう。ま、よくある手だ」

「まー、ひどいわねー」

クラリスもプンプン怒りました。女官たちじゃないですけどポリスにお灸の一つも据えてやらなければ収まりません。

「しかしな、あんまりひどい作り話じゃかえってアルマ教徒の怒りを買うだけだ。ほら、こんな風に」

女たちは凄く怒っています。

「なんかポリスの作り話を通用させるものがロンババ様にあったんじゃねえか？」

ルピネーの問いに王女はいともあっさり答えました。

「それはあの爺ちゃんがどうしようもない女たらしだったからであるうな」

「爺ちゃん？」

「そう。ロンババ爺ちゃんは当時もう80近くの老人で、そのくせわたしに『お嬢ちゃんは将来とんでもないべっぴんさんになるぞい。そんなときは是非わしの子どもを産んでくれよ』なんて平気でセクハラしていたからな」

「わたくしも」「わたくしもですわ」と女たちは全員言いました。とんでもないスケベ爺イです。それでいてこれだけ慕われているのですからただのスケベではなかったのでしょうか。

「生涯放浪の騎士でしたからね」と一人が言いました。

「その生涯の最後に、本気でリオナ様に惚れられたのでしょねえ。」

一人が言っつて、一人が「それですわ！」と叫びました。

「ほら、最後のご出陣に、ロンババ様はリオナ様の」

「ああ！そうですわ！」

女たちは納得したようですが、こちらはさっぱり分かりません。

一人が代表して説明しました。

「リオナ様は我がブルータリス軍の女将校です。美しく、勇猛果敢

で、国民の英雄でした。しかし戦のさなか負傷して、おそらくこれが最後になるだろうという戦いにケガを押して参加しようとなさりました。それをロンババ様がお止めして、自分の妻として家で我が帰りを待っていてくれぬかと、プロポーズされたのです。リオナ様の傷は深く、戦場に立てる状態ではありませんでした。それでも悔しがるリオナ様に、ではわしがおまえの代わりに戦場にあるうとご自分の鎧かぶとをリオナ様に残し、リオナ様の鎧かぶとを身につけてご出陣なされたのです。ロンババ様はお名前の通り南方の方で、とても小柄な方でしたから女の鎧かぶとでも楽々着ることができたのです。ロンババ様は戦場で討ち死にし、リオナ様も都を焼く火事の中でお亡くなりになったそうです」

「ああ、なんと悲しい恋の話ではありませんか!!
なるほど、その女の鎧かぶと姿を利用されたわけか」

ルピネーは納得しましたが、クラリスはますますポリスに腹を立てました。リオナさんがどう思っていたかは知りませんが、ロンババさんは彼女のために死のうと決心していたのでしょうか。そんな純情を踏みにじり汚すポリスのやり方は、ムムム・・・。

ふとクラリスは、女たちのイメージの中にリオナの鎧かぶとを着込んだロンババの姿を見て、ピーン、と閃くものがありました。

リオナの鎧かぶとは、華麗な金の装飾をされていたのです。

「ねえ、ポリスがその話を利用したってことは、ポリスにはその話を伝える物があったんじゃない？　つまり、リオナさんの鎧かぶとが？」

ルピネーは言いました。

「それはあり得るな。いや、あったんだらう。今に伝わる話じゃロンババは一度ポリスに捕まり、ポリス島に連行され、そこでさらし者にされた上で処刑されたことになっている。本国まで遺品が運ばれたってのは十分あり得る」

「あり得るところか、」

クラリスは確信してニンマリ笑いました。

「絶対今も残っているわ！　なんてったって銀に金の装飾のとっても綺麗な鎧かぶとなのよ！　このわたしが言うんだから間違いないわ！　リオナさんの鎧かぶとは絶対に宝物として大切に保管されるわ！」

クラリスのお父さんは超一流の彫金師ですからクラリスの美術品の目利きは確かです。

「そういう証拠が残ってるんなら・・・、使えるか？」

ルピネーも考えました。クラリスはもう気分が盛り上がってどうしようもありません。

「おじさま！　わたし、ポリスに行つてきます！　リオナさんの鎧かぶとを捜してきます！」

ルピネーは呆れたように笑いました。

「思い立ったが吉日ってか？　そりゃ頼むが、どう使う？　物だけあつてもしょうがねえぞ？」

「どう使うかはもうちゃんと考えているわ。わたしってばほんとは最っ高に運に恵まれてるわ！　おじさまはロンババ様の本当の姿をクーロンに伝えてちょうだい！」

「クーロンに伝えてアルマ教徒の戦意を高揚させる、か？」

ルピネーはニヤリと笑いました。

「伝えるならクレオがいい。クレオがアルマ教徒として戦意を高揚させれば、クーロンもアルマ教徒として裏切れなくなる」

「さすがはおじさま！」

クラリスは褒め称えましたが、クラリスもどうしてどうして、二人はすっかりいいコンビです。

「じゃそっちはお願い。わたしはポリスに行つてきまーす！」

第8章 女神のお告げ

クラリスは一人乗りの小型ヨットを一艘借りました。

「一人でだいじょうぶ？」

サファイアが心配しました。

「平気平気。もうバッチリよ。ヴァイオレット、行くわよ！」

クラリスはセーラー服に半ズボンという男の子みたいになかっこうをして、ヴァイオレットを胸のポケットに入れました。

「ゴー！」

黒雲のジェットで小型ヨットは風のように走り出しました。

「ちよっと行つてくるわねー」

沖で遊んでいる大ダコとイルカたちに手を振りました。

「おいこらー、どこ行くんだー！」

というイルカの精の声もあつと言う間に後ろに消えていきました。「なあ、ポリスの海つて今軍艦がうじゃうじゃ出てるんだらう？だいじょうぶか？」

ヴァイオレットが心配そうに訊きましたが、

「平気平気。わたしを誰だと思ってるの？ それにうじゃうじゃいるのはあつちの海。こっちはガラガラよ」

とクラリスは言いましたが、ちよっとハズレ、こちらの海も先の大ダコ騒動で警戒の船舶が、大型の軍艦こそいませんでしたが、何艘も浮かんでいました。

「見つかるぞ？」

「忍法霧隠れの術！」

クラリスは魔法で周囲に霧を起こすと鏡の反射で周囲の景色に溶け込んで易々と船たちの間を抜けて砂浜に到着しました。

意識したわけではありませんがちよつと王女たちをカザリンに送り出した浜でした。霊廟が王女たちの故郷を望む位置に建てられていたからでしょう。

クラリスはヨットを岩陰に隠すと丘の向こうに意識を広げました。
「首都はあっちの方ね。だいぶありそうね。あーあ、ナージャがいれば楽に一つ飛びなのになー。しょうがない。その前にいー」

クラリスはテレパシーを送りました。しばらくして、二人の人物がおっかなびつくりやってきました。

「ハアーイ」

「で、出たあ〜っ」

腰を抜かしそうに驚いたのはグスターとルネのカップル・キヤンディー王女たちを目覚めさせるとき手伝わせてさんざん恐い思いをさせた4人の悪ガキのうちの2人です。

「あ、あ、あ、あんた、本当にあの時のお化けなのか？」

「お化けじゃあないけど、そうよ、わたしがあの時のお茶目な魔女よ」

ヒィ〜と二人とも恐れおののきました。クラリスは実に心外です。
「崇りに出てきたんじゃないから。あのね、ちょっと訊きたいんだけど」

クラリスはその後彼らが王女たちのことを誰かに話したのか訊きました。

「別に怒らないから正直に話してちょうだい」

二人は顔を見合わせ、おずおずと話しました。

「黙ってたんだけど・・・、墓が空っぽになっているのが見つかって大騒ぎになって、俺たちがあそこに肝試しに行くのを知っていた奴がいて、俺たちが疑われたんだ。それで・・・、船もなくしてしまってたし・・・、しょうがなく正直に話したんだ・・・」

「やっぱり話しちゃったんだ。でも、信じた？」

「最初は全然。でも俺たちが嘘をついているんじゃないっていうのは信じてくれて、じゃあ本当にそういうことがあったんだらうってことになったんだ」

「へえー、信じたの？ で、どうなったの？」

クラリスは得意な気持ちでワクワクして訊きました。

「不思議なこともあるもんだあ・・・ってなつたよ」

「それから？」

「だから不思議だなあ・・・って」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

クラリスはため息をつきました。もつと感動しなさいよ！と。

「でもその後がたいへんなのよ」とルネが言ったのでクラリスは期待しました。

「街の方に噂が伝わって、政府の調査団が来たの。それで霊廟を調べて、あたしたちも話を訊かれて。それが失礼なのよ、ミイラが甦るなんて馬鹿なことがあるわけない、君たちは悪い魔女に催眠術をかけられて操られて、まんまと窃盗団の手伝いをさせられたのだ、ってことになっちゃったの」

「なんですつてええ〜〜」

もうクラリスは完全に頭に来てしまいました。

「誰が悪い魔女ですつてええ〜〜。決めた。ポリスに呪いを掛けてやる！」

ヒィ〜とまた二人は恐れおののきました。クラリスはプンプンして言いました。

「ほんとに呪つてやる。ま、それでポリスが助かるんらいいでしよう。ねえあなたたち、今自分たちがどういう状況にあるか分かってる？」

「何でも言うこと聞きますから命ばかりはお助けを」

「違ーう！ 海峡の状況よ。戦争が起ころうとしているのよ？」

二人は今度は深刻な顔で見つめ合いました。

「うん、知ってるよ。でも俺たちにはどうにもできない。命令されたことをやるだけだ。ヴァルは18歳だから軍隊に志願して、今、軍艦に乗ってるんじゃないかなあ・・・。俺も親父に行つてこいつて言われてるんだけど、まだ17歳だから志願しなければ猶予があるんだ。でも俺もそのうち・・・」

「だいじょうぶよ」

クラリスは言いました。

「戦争なんか起こらない。わたしたちが止めてあげる」

二人は顔を見合わせて訊きました。

「本当か？」

「任せなさい！」

クラリスはエツヘンと胸を張りました。

「わたしは史上最高の魔女の娘なんだから！」

胸を張ったので胸のポケットに隠れていたヴァイオレットが押し出されました。

「わっ、小人！？」

「妖精だ、バーカ！」

「わあっ、ごめんなさい！」

ヴァイオレットはクラリスに「臆病な奴らだなあ」と自分のことは棚に上げて言いました。二人が臆病なのは前回クラリスがさんざん脅かしたせいです。

「あ、そーだ。あなたたちこの沖で軍艦が沈められたの知ってる？」

「ああ、知ってる！」

グスターは興奮して言いました。

「クラーケンが出たって大騒ぎだ！丘からも軍艦が沈められるのは見えたからな」

「船員たちはだいじょうぶだった？」

「ああ、生き残った船に救助されたようだよ」

クラリスはほっとして、ニンマリしました。

「そう、大騒ぎなんだ。好都合。」

あ、じゃああなたたちはもういいわよ。このお礼はまた今度きつとするから」

「いいえ、けっこうですっ！！」

二人は逃げるように早足で立ち去りました。

空が赤く染まってきました。

クラリスはヴァイオレットに島の向こうに飛んでもらいました。テレパシーで彼女の見える景色を見ます。

山の向こうに海が見えてきて、その海には点々とたくさんの帆船が無数のボートを率いて展開しています。その向こうにはぼんやり陸の影が見え、その前にもこちらに倍する数の白い帆船の影が展開しています。

クラリスは実際目の当たりにして戦争の時が刻一刻近づいている現実に緊張しました。

ヴァイオレットが戻ってきて、

「お、クラリス」

と海を指さしました。真っ赤な空を背に大きな夕日が水平線に沈んでいくところです。クラリスは手をかざしてまぶしそくに目を細め、嬉しそうに言いました。

「さあて、魔女の時間が始まるわ」

ローゼさんはポリス島の中央にある首都アクロポリスに軟禁状態にありました。宮殿の一室に留め置かれ、待遇は悪くないようですが、もちろんそこから出ることはできません。

クラリスは山を越えてアクアポリスに行くのはたいへんだし、あまり意味もないのでやめて、代わりにヴァイオレットに会いに行かせることにしました。

「え〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

と、人見知りして臆病なヴァイオレットは不満を言いましたが、「何のためにあなたを連れてきたと思ってるのよ！」

と、クラリスに叱られて泣く泣く行く羽目になりました。まったく勝手なものです。

クラリスは独り静かに目をつむり、アンテナを張り巡らせ、人々の会話や思考から情報収集を始めました。

全体的にポリスの人々は戦争を支持しているようです。かつての
大海洋帝国の復活、とまではさすがに思っていないませんが、海峡の支
配は当然自分たちがするべきだと思っっています。根拠は、シヴィリ
とテュークメンは大陸に土地を持っているが、自分たちには海しか
ないという思いです。その思いはポリス国民の胸に並々ならぬもの
があります。

一方で戦闘への不安も当然あります。自分が死ぬかも知れないと
いう恐怖はもちろん、夫や恋人、息子が死ぬかもしれないという女
たちの恐怖もありました。戦争に敗れば島が占領され、虐殺され
たり、奴隷にされたりといった恐怖もあります。

恐怖を押しつけて海峡支配の夢を実現せんと強力にリーダーシップを
発揮しているのが国王です。アレクサンドラ37世。50歳で王と
してもっとも力強い年頃です。国王の後ろに何人か知恵を授けてい
る者たちが伺えますが、皆、王を恐れています。この戦争は国王が
決断したものです。

ということとは国王が決断すれば戦争はやめるということです。

しかしそうすれば国王の権威は失墜するでしょう。それだけ国民
の戦意は高まってしまっています。

『フムフムやかいかいね』と思いつながらクラリスは別方面に意識を
向けます。

軍艦が3隻沈められたことは大きな衝撃になっています。謎の巨
大海中生物の仕業ということと監視は厳しくするようにと、残念な
がら戦争に向かう状況に特に決定的な影響は与えていないようです。

『今のところはねー』とクラリスは魔女の笑いを浮かべます。

目指す相手を探します。ロヴィークのお城でいう司祭や式典長の
ような存在です。ポリスはどちらかという宗教色の薄い国家のよ
うです。それというのもポリスの人々にとって神話は文化であり、
アルマのアーヤサークレのサインのような唯一無二の絶対神がいま
せん。しかし文化の中に神々が溶け込んでるので、きつと戦争を
始めるときにも神を味方に付けるような儀式を行うはずで、それ

を執り行う宗教家を捜しているのです。

いました。アクアポリスの丘の神殿で夕餉ゆづげの祈りを捧げています。
これまた好都合です。

「これ、そなた」

クラリスの声に60代の司祭はハツと天を仰ぎました。

「そうそう、おまえだ。戦を始めるというのにわたしへの挨拶がないというのはどういうことだ？」

あなた様は、いったいどなた様です？

「戦の神といたらミネーヴァに決まっておるうが！」

おお我が女神さま！、と司祭は恐れおののきました。ミネーヴァは数多いポリスの神々の中でも最高位の女神であり、特にポリス国家を守護する女神とされ、さらに戦の神でもあります。

しかし司祭は不審に思って尋ねてきました。

ミネーヴァ様には真つ先に王族列席の上この神殿で祈りを捧げましたが？

クラリスは『うっ』と思いながらしゃーしゃーと言いました。

「えーい、まだ足らん！ だいたい上っ面ばかりで貴様らまるで信心が足りない！」

司祭は困りながら、それはまことにもって申し訳ございません、と謝りました。

クラリスは言いました。

「この戦、ポリスは負けるぞ」

司祭はギョツとして、女神さまはお力沿いくださいませんか！？と問いました。

「わたしの助力が欲しければもっとわたしを立てよ！ 敵はポルセデューンを味方に付けてしまったぞ！」

海神を！！？？

「そうだ。密かにポリスの儀式に通じた者を雇い、海神に生け贄を捧げたのだ。ほれ、きゃつの遣いがそなたらの船を沈めたであろうか？」

あれは、まさか、クラーケンの仕業!?

「他になにが巨大な軍艦を沈められる? 明日にはもっと深刻な事態が起こるぞ」

「いったい何が?」

クラリスはニンマリ笑って言いました。

「海が凍って船が固まるぞ」

海が凍り、船が固まる……。司祭は女神のその恐るべき予言を反芻^{すう}し心に刻みました。

夏の暑さがまだまだ残るこの時期に海が凍るなど、実際起こったそれは奇跡以外の何ものでもありません。

しかし海が凍れば敵も動きが取れないのでは?

司祭の疑問にクラリスは答えました。

「ポリスの船は海上に孤立し、いずれ、海に食われるであろう」

これまた恐ろしい予言です。司祭の心は恐怖が轟き、不安に胸が潰れる思いがしました。

クラリスはこれ以上この老司祭をいじめるのは気の毒に思っ
て切り上げることにしました。

「よいな? 戦に勝ちたくば我を前面に立てるのだ。我が分身となる美しい乙女に金銀の鎧かぶとを身につけさせ、皆に我への信仰を徹底させるのだ。さすればポルセデューンとの話は我が付けてやるよいな? 美しい乙女だぞ、忘れるでないぞ!」

司祭は「ははあー」とかしこまり、クラリスはテレパシー通信を切りました。

クラリスは波打ち際に行くと海の水に手を付けて海の精と会話をしました。

「海の精さん。すみませんがまたお手伝いしてください」

「やれやれ、何ですか?」

「えへへ。ポリスの軍艦に……」

クラリスは海の精に自分の作戦を話しました。

『分かりました。やってあげましょう』
海の精は引き受けてくれました。

お腹が空いたなーと思っているとヴァイオレットの声がありました。テレパシーです。どうやらローゼさんのところに着いたようです。ヴァイオレットの視界に同調すると床に絨毯が敷かれ、白い壁にも綺麗な模様の織物が掛けられ、ポリスの名産である赤茶と黒の絵の壺が飾られた、なかなか居心地の良さそうな部屋が見えました。灯りは壺のタンクのランプです。細い樹皮で編んだついたての向こうに椅子に座って投げ出された足が見えます。

「こら」とクラリスは言いました。

「さっさとローゼさんに挨拶しなさいよ」

『え、だってええ』

「子どもみたいに恥ずかしがってんじゃないの！ ほら、さっさと行きなさい！」

『わあ』

クラリスはヴァイオレットをリモコン操作してついたての向こうへ飛ばしました。

「あら」と黒髪、褐色の肌の女性が言いました。

「こんばんは。かわいいお客さんね？」

「ええーと、こんばんは。あんた、ローゼさん？」

「そうよ。あなたは？」

「あたい、ヴァイオレット。クラリスの友だち」

「ああー、あの高名な魔女さん」

ローゼはニッコリ笑いました。

「彼女もこっちに来てるの？」

『はあーい。そっちまで行くのはたいへんなので浜辺から失礼します』

「あらびっくり。ふうーん、これがテレパシーってもの？ 便利ね

え」

『はい、便利です。ローゼさんは、お元気そうですね。ほっとしました』

「ええ。待遇は悪くないわよ。大事な人質ですからね。傷を付けたら、後々たいへんだものねえ」

『見張りは？』

「部屋の外にいるわ。中にとわたしがあれこれうるさいからみんな外に逃げちゃった」

『うるさいんですか？』

「ええ。うるさいなんて心外だけど。今のポリスのやり方がいかに馬鹿か、どうやったら経済が安定して平和でいられるか、具体的に提案してあげているのに、まったく、まるで魔女の誘惑みたいに嫌がられるのよ？ あら、ごめんなさい」

『いえいえ』

クラリスは笑いました。なかなかチャージングで、噂通り頭のよい人のようです。

「わたしをここから連れ出すつもりじゃないんでしょう？」

『すみません。今奪還作戦の準備中ですからもうしばらく我慢してください』

「我慢なんてしなくてもバカンス気分でのんびりしているけど、ちよつとたいくつね」

『休暇ももう明日までです。その後で一働きしてもらいますから楽しんでいてください』

「ええ。魔女のお手並みを拝見させてもらっわ」

『ルピネーさんもカザリンで工作中です。あっちも忙しくしているはずです』

「あの人は忙しいのが趣味なのよ」

二人はいつしよに笑いました。

『それじゃあ、もうちょっと頑張ってください』

「ええ。わたしはだいじょうぶってあの人に伝えて」

『はい。必ず』

クラリスが魚を釣ってたき火であぶっているとヴァイオレットがごきげんで帰ってきました。

「えへへー、ローゼにトロピカルジュースご馳走してもらっちゃった」

「あらあらうらやましい。いる？」

「いらなーい」

クラリスは一人で焼き魚にかじり付きました。

「ローゼさん、なかなか美人だったわね？」

「そうだねー」

ローゼ・ガドウはルピネーより5歳年上の姉さん女房で、35歳です。背がカザリンの女性としては高く、スラリとして、腰の位置が高いです。元々漁師の娘で精悍な顔つきをしていますが、目は優しそうで、気が強いだけではない知性の高さを感じられました。彼女がカザリンに流れてきたルピネーと結ばれて今こういう場所にいるというのも彼女にとっての幸運な巡り合わせだったでしょう。

「直接会ってお話するのが楽しみだわ」

「なあ、あたいがわざわざ会いに行く必要があったのか？」

「あら、あなたルピネーおじさまの奥さんに会いたくなかった？」

「いやあ、そりゃあ、いい人だったけどさ」

「じゃいいじゃない。頭の中のイメージだけじゃ像がはつきりしないのよ」

クラリスのテレパシーは人の考えを見るのが主です。物も、それ特有の「感じ」で見ることできますが、やはり実際目で見るのは微妙に違います。人を見ようとする場合、不必要に内面に入り込んでしまう嫌いがあります。

たき火の煙を見つけてまた恐る恐るグスターとルネの二人が様子を見に来ました。クラリスはちょうどいいので宿を頼みました。ま

たカザリンに戻るのも疲れるなど、王女の霊廟にでも泊まるうかと
思ったのですが、柔らかい寢床の方がありがたいです。二人は相談
してクラリスにルネの家に泊まってもらうことにしました。

ルネは両親と妹と弟の5人家族で暮らしています。ルネは家族に
なんと言っでごまかそうかと心配しましたが、クラリスが自分で「
キャンディー王女の友人の魔女」と名乗ってしまいました。両親は
自分たちの娘の体験を信じていましたし、今回の戦争にも反対でし
たのでクラリスを歓迎してくれました。そういえばクラリスはルネ
にひどいことをしたのでしたが、それはないしよです。

クラリスはルネの一家に海神ポルセデューンがポリスの敵になっ
ているという噂をまき散らすよう頼みました。今夜の夢でクラリス
はポリス中の人間にそのことを報せるつもりでしたが、実際誰かが
口にしなければみんななかなか夢の中のお告げなど言い出しづら
いものです。父親たちは、昼間の軍艦沈没騒ぎを目撃しているだけ
ほんとうにポルセデューンがポリスを滅ぼすのではないかと心配し
ましたが、クラリスは軽く言いました。

「ああ、わたし、クラークンともポルセデューンの息子ともお友だ
ちだから全然平気よ」

灯りが消され、お姉ちゃんのベッドにいつしよに眠る妹のベッド
を借りて寝転んだクラリスは、途端に「くかあ」と眠りに入りま
した。

夢の世界のトンネルを抜けてまずサファイアに会いに行きます。

サファイアも忙しいルピネーは放つといて、暗くなるとすぐに眠
っていました。

サファイアの夢にお邪魔します。

「こんばんは。そっちの方はどうですか？」

「うん。ルピネーが一生懸命悪巧みの仕掛けを作っているわよ」

ルピネーはさっそく商売仲間のつてを頼ってクレオの考古学者に
ロンババの鎧かぶとを発見したという情報を大至急流してもらいま

した。

「ロンババの鎧かぶとって、ポリスの？」

「違う違う。リオナが受け取った方の鎧かぶとよ」

「見つかったの？」

「見つかるわけじゃない」

「サファイアは悪戯っぽく笑いました。

「だから、仕掛けよ。キャンディー王女たちに訊いて、似た鎧かぶとを捜し出して、いろいろと細工をしているのよ、これぞ本物に間違いない！っていう」

「ははあくん、偽物を作ってるんだ？ おじさまはそういう商売してるの？」

「してないわよ。でもそういう物売りつけようとする輩が多いから自然とやり口を覚えちゃったのよ。でね、かぶとの裏側に王女様に一筆書いてもらって。偽物だけど、本物よねえ？ 学者に見せたら大喜びするわよ？」

「それでロンババ様の真実の姿を教えてやるわけね？ うん、さすがおじさま！ そうそう、わたしはローゼさんに会いましたよ。本当に会ったのはヴァイオレットだけど」

「無事だった？」

「ええ。元気そうでした。ルピネーおじさまに伝えてください、ローゼさんが自分はいじょうぶだって言っていたと。確かにだいじょうぶでしたから安心するようにわたしからも」

「了解。ほんとはね、あいつも内心じゃ心配でたまらないのよ。もう、ベタ惚れしてるから。ウフフフ」

「クラリスもウフフと笑いました。

「それじゃあそっちの仕掛けも急いでください。わたしも海の精と明日からさっそく作戦を開始しますから」

「オツケー。頑張ってるね」

「はい」

サファイアの夢から帰ってくるとクラリスはポリスの人々の夢に強力なテレパシーを送信しました。内容は「ポリスの守護女神ミネーヴァが怒っている。海神ポルセドューンは生け贄を捧げられて敵側に付いてしまっている。明日には海で海神の恐ろしい奇跡が起こるぞ！」という予言（脅し）です。

ポリスの人々をさんざん脅しつけたクラリスはやれやれとようやくぐっすり眠り込みました。

第9章 海神の脅威

夜が明けました。昨夜の夢で女神ミネーヴァのお告げを聞いたポリスの人々は不安を胸に海の様子を伺いました。すると、預言通り、海では恐ろしい現象が起こっていました。

国王アレクサンドラ37世には司祭よりミネーヴァの詳細な「お告げ」が報されていました。まさかと思っていた国王でしたが、報告を聞き、自らも海岸の丘へ視察に出向き、その目でその光景を確認して腰を抜きそうになって慌てて臣下に支えられました。

伝えられた予言によると海が凍って船が固まるのだそうです。そして今見ている北の海は海面が真っ白になっています。

まさかこの夏の盛りに海が凍るなどあり得ません。しかしではあの白い物はなんなのでしょう？

その正体はすぐに知れました。

海を覆い尽くしている白い物、それは巨大なクラゲの群でした。

しかし内海のこんな近海にそんな巨大なクラゲが大発生するなど過去一度もありませんでした。

クラゲはマーマラ海峡の船団の展開している周囲を埋め尽くし、ポリス島の沖まで覆っています。一匹の大きさは幅が2メートルから3メートルもあり、足は10メートル以上ありました。

「船は、我が軍艦はどうしておるか!？」

王のうろたえた問いに、しばらくして答えが来ました。船からの緊急の報せにはやはり伝書鳩が使われていましたが、その司令船よりの伝書鳩が状況を知らせてきました。

やはり船は周囲をクラゲに埋め尽くされ、まったく航行ができなくなっていました。試しにクラゲを剣で切り裂いたところ、毒を吐きだし、兵士が目をやられ、十数人が喉を腫らし咳が止まらなくなりました。

さらに、オールを繰り出し脱出を計ると、いつの間にもやらの船と船とが引き寄せられ、衝突し、もうまったく動かなくなってしまう。何かと船体を調べると、船底から側面にびっしり貝がくつき、それらが船と船をくっつけて接着剤のように固めてしまっているのです。

もう、どうすることもできません。

「なんたることか・・・」

街では国民たちが夢に見た女神ミネーヴァの予言を確認し合い、海神ポルセデューンに見捨てられた不安をささやき合いました。

こうなつては昨夜の司祭の報告を信じないわけにはいきません。

「しかし海神への儀式は行ったであろうが？」

海洋国ポリスにとって、まして海の戦において海神ポルセデューンは最も重要な神です。海戦準備に当たって、まずは出陣の挨拶を海神に捧げました。呼ばれた司祭は

「敵は海神に乙女の生け贄を捧げたといえます。敵の方が海神様へのもてなしが上だったのかと・・・」

と苦しく言いました。

「海神も海神だ！ 異国の異教徒などに味方しおつて！ 我がポリスは毎年祭りを行って供物を捧げているではないか！！！」

国王は海神の裏切り行為に真つ赤になつて怒りました。

「ええい、裏切った神など知らん！ ミネーヴァ様を奉れ！ 仰せたてまつ

の通り乙女を金銀の鎧に飾り、ミネーヴァ様の化身として我が軍の先頭に立て、ミネーヴァ様のご助力を得て我が軍をもり立てるのだ！！！」

昨夜のうちから鎧かぶりと身にまとう女神役の乙女の選考は行われていました。

鎧とかぶとは王室の宝物庫からいくつか候補のあつた中で司祭が「まさにこれである！」と天啓に似た閃きで一揃えを選びました。当然クラリスが司祭の頭脳に刷り込んでいたイメージです。まあそれがなくとも実に女性らしく美しいプロポーシヨンと装飾の一級の

美術品でしたから選ばれて当然でしたでしょう。

女神の乙女の方はある貴族から強力な推薦があり、彼の孫娘に決まりました。その貴族というのが軍部の重鎮で、その孫娘はこの戦争で隊を一つ指揮する有能な将校の男性と戦争終結後結婚する約束ができていました。これでこの将校が武勲の一つも立てれば重鎮としては大満足で鼻高々なのです。・・ここにも当然クラリスの計算が働いています。

彼女、ミケーネが美しい鎧かぶとを身につけて、白いマントをなびかせて王の船に乗って港を出発しました。島にはもうこの船しか残っていないかったです。あとは漁船だけで、その漁船に乗った漁師たちが先に立って棒で必死でクラゲどもをかき分け女神の船の針路を開きました。

ドーンドーン、と太鼓を打ち鳴らしながら女神の船は進んでいきます。

しかし先に行けば行くほどクラゲたちは多くなり、かき分ける隙間もどんどん無くなっていきました。漁船がかき分けたクラゲがまた後ろに回り込んで、漁船そのものが立ち往生してしまいました。さて困りました。女神の船はこのまま進めば自分たちもクラゲに周りを取り囲まれ脱出できなくなってしまいます。考えている間にどんどん後方の海が白くなってきて、慌てて方向転換すると、またドーンドーンと太鼓を打ち鳴らしながらみっともなく港に舞い戻ってきました。

これに王はまた激怒しました。

「なんじゃ、女神を奉ったのに、なんにもならんではないか!？」と司祭を叱りました。

そこへ丘の神殿の女神像が王を呼んでいると報告が入りました。

「そんな馬鹿な?!」と思いつながら王は司祭を伴って忙しく丘の神殿に登りました。

「アレクサンドラ、アレクサンドラ! アレクサンドラはまだま

いらぬのか!!」「

国王が神殿の入り口に立つと中から女の大声がわんわんと響いてきました。国王アレクサンドラ37世は顔を青くして駆け込みました。

神殿の奥に高さ5メートルの守護女神ミネーヴァの代理石像が立っています。戦神でもある彼女は鎧かぶとに剣と盾を持ち、戦車に乗った美しい娘の姿をしています。

「我が守護者、大女神ミネーヴァ様!」

国王は代理石像の前にひざまずきました。いつしよに来た家臣たち、遅れて息を切らせてやってきた司祭も同様にひざまずきました。「アレクサンドラ。ようやく来おったか」

やはり喋っていたのはこの女神像です。もちろん喋らせているのはずつつと遠くにいるクラリスです。実際に喋っているのは頭の上にいるヴァイオレットで、クラリスが彼女に喋らせ、空気の振動を増幅させて大声にしているのです。

国王が問いました。

「おそれながら我が守護女神。我らは仰せの通り女神さまの身代わりの乙女を立て、女神さまを奉って海に進軍いたしました。しかしながら忌まわしき海の悪魔どもに邪魔をされて引き返さざるを得なくなってしまうました。これはいったいどういうことでありましょうか?」

クラリスの女神が言いました。

「お前たちは二つの間違いを犯した」

「は?」

「一つ、我が身代わりの乙女を立てるのに許婚しいなすけのおる娘を立てるとは何事か! 我が身代わりは生涯処女でなければならぬ! 貴様ら、わたしを舐めておるのか!!」

「ははあー、申し訳ございません。ただちに生涯処女の誓いを立てる娘に代わらせませすー」

「もうよいわ。わたしはへそを曲げた」

「そ、そのような子どものようなことをおっしやらず・・・」
「なんだと？」

「へへええー、どうぞお許しをー」
「よい。それよりよく聞け。どちらにせよ此度の戦、ポリスに勝ちはない」

「そ、そんな、わが女神よ。それはいかに女神のお言葉とて聞けません！」

「馬鹿者、女神の言葉に軽々しく口答えするな！ わたしを舐めるなど言っただらう？ 貴様ら人間ごときの考えなどお見通しだ。おいおまえ、アレクサンドラ。貴様、南の異教徒と秘密の同盟を結んでおろうが？」

国王は内心ギクリとしながら、

「そ、そのようなことは・・・」

と言ったとき女神像を見上げて黙ってしまいました。クラリスはあらかじめ王や政府の人間の心を読んでその事実を確認しています。彼らはやはりクローンと密約を交わしていました。クラリスは脂汗を流して黙り込んでしまった王に言ってやりました。

「まあよいわ。お前たちの犯したもう一つの過ちを教えてやる。

お前たちが女神の乙女に着せた鎧かぶと、あれは、アルマの戦士の遺物だ。かの国では今それに関してお前たちの犯した罪が大問題になっておるわ」

「我々の犯した罪とは？・・・」

「あの鎧かぶとはアルマの大騎士ロンババが最期の戦で着ていたものだ。そしてお前たちの祖先はそれを自分たちの都合のいいように汚したのだ！」

「ロンババ・・・」

司祭が呟き、ハツとしました。

「アルマ教の南方騎士ロンババ！ しかしあれは女で、アルマ教徒の間でもアルマ教徒の名誉を汚した愚か者と切り捨てられているのでは？・・・」

「ぶわ〜か！ それがお前たちの罪だと言っているのだ！ ロンバははれつきとした男で、勇者で、あの鎧かぶとは恋人の女戦士を守るためにまとった物だ。今かの国ではその証拠が出てきて、戦士の名誉を汚したおまえらの嘘がばれてしまったぞ。」

あ〜あ〜、海神ポルセデューンだけならまだしも、アルマのアーまで敵にしてしまつたら、いくらわたしの神力が強くてたつてねえ〜、こりゃ駄目だわ」

「そんな女神さま、異教の邪神などになにを弱気な・・・」

「おまえら、アーという神を知っているか？」

「我らを支配しようとする邪神・・・」

「ふむ。アーなどと言う神はこの世におらん」

「なんと！やはり・・・」

「考え違いするな。ついでにサークレのサインなんぞという神もとつくにこの世にはおらぬわ。」

よいか？

わたしは、今、ここにいて、ありがたくもお前たちにこうして言葉をかけてやっている。いざとなればこの力を貸してやらぬでもない。

わたしはミネーヴァという本物の女神である。

が、一方、

アーやサインなど、大昔に一度現れたきりで、今この世にはいない。神の力なども残してはおらぬ。

だが、アーはいる。この世にはおらぬが、信じる者どもの心の中に確実に居るのだ。

わたしはお前たちがどんなに信心しようが、気に入らなければあつさり裏切るぞ。

だが、信じる者の心の中にいるアーやサインは、絶対に信じる者を裏切りはしない。その力は等しく信じる者の心の強さになる。

お前たちの小細工がばれたせいで、かの国のアーを心に抱く戦士たちはそれはもういきり立ってポリスへの戦意を煮えたぎらせてお

るぞ。あくあ、こうなってしまうては、わたしがいかに助力してやるうとポリスに勝ち目はないのおー……。ハア〜ア〜。」「

司祭は女神の一連の言動に不審を持ち、『もしや』と思つて王の様子を伺いました。王もここまで指導力を発揮して国をまとめてきた人物です、女神の意図に勘づいて問いました。

「もしや女神さまは、この度の戦争に反対なので？……」

クラリスは答えました。

「そうです。もしこの戦争に勝つても、ポリスに良い未来はありません。北の大国の属国に成り下がるだけです。ポリス国家の自主性は大きく制限されます」

「シヴィリがそうであるようにですか？」

「そこまで分かっているのに、何故彼らの甘言に乗りました？」

「それは……国を、民の幸福を思えばこそ……」

「アレクサンドラ37世」

クラリスは威厳と敬意をもってその名を呼びました。

「あなたは良い王になれます。わたしは、真に賢い者の味方です。

あなたがこの愚かな戦争をやめ、平和を望むなら、わたしは必ずポリスを守り、ポリスを良い方向へ導くと約束します」

国王は立ち上がり、改めて片膝を付き、胸に手を当てると、深々と礼をして言いました。

「我が女神の仰せのままに。船を引き、シヴィリ、テュークメンと和睦いたします」

クラリスは安堵し、ほつとしながら言いました。

「よろしい。」

では改めてわたしの身代わりとなる乙女を命じます。今捕らえているカザリンのローゼにかの鎧を着せ、わたしの名代となさい」

「ローゼ社長を、女神の名代に？」

「そうです。そしてポリスとアルマの国々を結ぶ使者を招きましょう。くれぐれも丁寧におもてなしするように。よいですね？」

「ははああー」

国王一同はかしくまりました。

『もういいわよ』というクラリスの言葉でヴァイオレットは女神像の頭から飛び立ちました。恐る恐る顔を上げた国王たちを、ミネーヴァの像はただ静かに見下ろしています。

第10章 二人の使者

夜が明けるとポリスの海からクラゲの姿はすっかり消えていました。その代わり、一夜のうちに軍艦が5、6隻ずつ束になって貝の接着剤で固められ、まるつきり航行不能になってしまっていました。ローゼさんは昨夜からすっかり待遇が変わって、それまでもけっして悪くない扱いは受けていたのですが、もう下にも置かぬ有様で、最重要の国賓として王自らの接待を受けました。ローゼさんはポリスが発展するための持論をととうと述べ、王様も内心辟易しつつうなずきながら聞き入り、聞いてみればなるほどと肯けるところが多々あつて次第に感化されていきました。王も戦争による海上利権の獲得が無くなった以上新しい国のビジョンを持たなければなりません。

『ひよつとするとカザリンは良いパートナーになるのではないか？』
これまでもたびたび示されてきた提案でしたが、今度こそ王は前向きに検討してみる気になりました。

朝になるとローゼさんは例の金銀の鎧かぶとを着て純白のマントを羽織り、古代の華麗な女戦士に変身しました。

その姿になると、

「女神のお告げがありました。使者は南の方角から来るそうです」と言いました。クラリスのテレパシーを受けてのことです。

王は司祭と検討の結果、あの霊廟の丘を下った砂浜に迎えの天幕を張ることにしました。

正午。

南の海から何か大きな、巨大な物が、大波に乗ってやってきました。望遠鏡でその姿を確認した兵士は驚愕して叫びました。

「クラークンだ！ 海神の遣いクラークンがやってきた!!」

人々も丘に立ち、砂浜から望み、その巨体が迫ってくるのを驚愕

の表情で見守りました。

クラーケンは海岸を軽く一さらいしそうな大波に乗っていましたが、その波には手前に大小2艘のボートを頂いていました。

先頭の小さなボートにはユーレシアの男とカリーファの東の民族の男が乗っています。エレジンとネプタです。二人とも模様の入った白い着物を着ています。

小さなボートに守られるように続く大きなボートには世にも稀なる美貌のお姫様と10人の乙女たちが乗っていました。

めいっばい着飾ったキャンディー王女と9人の女官たちと、その仲間に化けているクラリスです。

そして、クラーケンが海岸に近づいて来るに連れポリスの人々をこれ以上なく驚愕させたのは、なんと、クラーケンの頭の上には青い水の女官を従えた海神ポルセデューンの息子が乗っていたのです！
もちろん人魚の子どもとそれを守る海の精です。

クラーケンたちを乗せた大波は沖で静かに収まり、それでも大きな波が海岸に打ち寄せ、浜にいた王様たちを慌てさせましたが、その波に乗ってボートが砂浜に滑り込んできました。ボートは魔法のように（実は魔法なのですが）スルスル浜を上ってきて、従者の男たちがかけた階段を下りて王女たちが砂浜に降り立ちました。

誰も皆その美しさに目を見張って呆然としました。

王女は聞いたことのない異国の言葉で喋りました。従者の男が通訳します。

「わたしはあの丘の霊廟で1000年眠っていた今は無きブルータリス王国の王女キャンディー・ブルータリスである」

それを聞いて王様はびっくりしました。

「おとぎ話のキャンディー王女と10人の乙女たち！？」

ミイラが盗まれたのももちろん知っていますし、王様だって子ども頃におとぎ話を聞かされています。まさか本気になんてしていませんでしたが、それにしても、現に目の前にいる異国のこの世の物とも思われない美しいお姫様を見せられては、理屈よりもなによ

りも、1000年の時を越えた奇跡を信じないわけにはいきません。
「それは・・・お会いできて光栄です・・・」

王様は年甲斐もなく少年のような夢見心地で言いました。それなのに王女様は怒った早口で言いました。男が通訳します。

「わたしの国はとつくに滅んで無くなっています。それでも近くの土地に行きたいと頼った友人を、捕まえて閉じ込めるとは何事か。それとも、このわたし自身が未だこの国の捕虜であると言うのですか？」

王女の剣幕に王様は慌てて手を振りました。

「とんでもない！・・・えー・・・とんでもない・・・こと・・・だよなあ？ うん、そうだ、とんでもない！ 我々はあなた様を友人として歓迎いたします」

従者の通訳を受けてキャンディー王女はニッコリ天使の笑顔を浮かべました。王様は赤くなってデレツとしました。しかし王女様はそんな王様は放っておいて、女戦士の扮装のローゼさんに駆け寄って抱きつきました。ローゼさんは覚えたてのブルータリスの言葉で挨拶して、キャンディー王女は大喜びしてローゼさんを抱きしめました。

「おっほん！」と、キャンディー王女の14歳の地が出そうなのでクラリスは咳払いしてキャンディー王女に先を促しました。王女も「オッホン！」と咳払いして早口で喋りました。

「彼女は恩義あるわたしの大切な友人です。もらい受けていきます。この鎧かぶとも大陸のアルマ教の国々との友好のために使わせてもらいます。よろしいですか？」

「もちろんです」

王様はもう言われるがままです。王女が続けます。

「沖にクラーケンと海神の息子が使者として来ています。女神ミネーヴァと海神ポルセデューンの手打ちも済んでいますので安心なさいます」

「それはありがとうございます」

これには王様も心底ほつとして言いました。

「海を巡る争いはこれで終わります。わたしも無き王国の生き残りとして国同士が争い滅んでいくのを見るのは忍びなく思います。これを機会に国同士が仲良く共に発展していくことを望みます」

「ありがたいお言葉、肝に銘じます」

「ではこれで失礼します。あなた方の船はじきクラーケンによって自由になるでしょう」

王女は役目を終えてほつとして、ニツコリ笑うと、ポリスの言葉で言いました。

「さようなら」

王様は、もちろん奥さんがいて子どもも孫も何人もいましたが、すっかり恋する少年の瞳で請いました。

「キャンディー王女、また我が国を訪れていただけますでしょうか？ 心より歓迎申し上げますが」

王女は通訳されて、肩をすくめました。通訳のネプタは困って、「えー・・・、気が向いたら、と仰せです」

と言いました。王様は「是非！どうぞ！」と懇願しました。王女のこつそり言った早口にクラリスは苦笑しました。

「名前も顔もあのヒヒ爺イにそっくりじゃない！」

王女は戦士ローゼを伴ってボートに乗り、10人の乙女たちが乗り込むとボートはスルスルとまた海に戻りました。従者たちは自分たちで押して海に戻り、両者は沖に向きを変え、帰っていきました。「どうぞまたのお越しをー！」

王様とポリスの人たちは大きく手を振って見送りました。

2艘のボートは（クラリスの魔法で）勝手にカザリンに向けて進み、クラーケンは砂浜を横切りマーマラ海峡に針路を取りました。

現れた巨大ダコクラーケンに船に取り残されて不安に思っていた兵士たちは驚き恐怖しましたが、事前に「絶対海の遣いに手を出してはならぬ」ときつくお達しが出ていたのでただ見守ることしかで

きません。大ダコは船の底にびっしり付いた貝を手の吸盤でこつこつ掻き取って巨大な鋭いくちばしでバリバリ食べました。これが協力してくれた彼へのクラリスと海の精からのご褒美です。

大ダコの頭の上の人魚の坊やは、自分を見つめる大勢の人間の男たちに怯えましたが、海の精が守ってくれているのでだいじょうぶです。「みんなあなたを海の神様の子ともだと思ってるので敬っているのよ」と教えられて、分からないながらも少し安心したようです。

彼をこのように使うことはクラリスも海の精も不安がありました。が、こうして「謎の生物」ではなく「海神の息子」という身分をはつきりさせておけば、以後、もし人間の網にかかるようなことがあっても1000年前の父親のように珍味妙薬として人間に食べられしてしまうこともないでしょう。

大ダコは巨体の旺盛な食欲で貝を食べ尽くし、夕日が海を赤く染める中満足して悠々カザリンの海に帰っていきました。

カザリンの浜に帰ってきた王女とローゼさんを、ユリアナ・ローゼ社の社員も、社員じゃないカザリンの人々も、歓声を上げて大喜びで出迎えました。華麗な女戦士のかっこうなのでなおさら大喜びです。

そこへテュークメン、クレオ、クーロンのアルマ教の学者たちを伴ってルピネーが帰ってきました。感動の再会を果たした二人ですが、見つめ合ってニッコリ笑い合っただけでお互いの気持ちは十分伝わりました。

ルピネーは昨日のうちに準備していた、キャンディー王女たちを手伝ってもらって作った1000年前の遺物を学者たちに見せました。学者たちは女官たちの書いた偽の古文書などを食い入るように調べ、興奮した面持ちで「本物に間違いない！」と太鼓判を押しました。もちろん新品の偽物なのですが紛れもない本物の本人たちが作った物なのですから文句は言わせません。

これは本物の南方騎士ロンババが最期に身に付けていた金銀の鎧

かぶとと、（ルピネーたちがテクニクを駆使して作った）女戦士
リオナが大切に持っていたロンババのオリジナルの鎧かぶとが10
00年の時を経て揃ってアルマ教の学者たちの手に渡されました。
「いいか？ これは俺たちカザリンと、ポリスから、互いの過去の
争いを水に流して、共に平和に発展していこうっていう友情の証と
して贈るんだ。くれぐれも、今さらポリスに仕返ししようなんて思
うんじゃないぞ？ まして、これを取り合ってアルマ教の国同士で
争うようなこともするんじゃないぞ？」

ルピネーに念を押されて学者たちはすっかりうなずきました。抜
かりのないルピネーはそれぞれの王室にも手を回しています。この
約束が反故にされることはないでしょう。そもそもポリスとの戦争
も、海神が再びポリスの味方になり、その強力な遣いクラーケンの
姿を見せられては自分から戦争を仕掛けていこうという気にはなり
ません。それはシヴィリの方もそうでしょう。

学者たちはアルマ教の宝物を携えて国に帰っていきました。これ
からそれぞれの国で名誉を回復された勇者ロンババを称えてお祭り
がなされるでしょう。

こうして、マーマラ海峡を巡る戦争の危機は解消されました。

第11章 こんどはどこへ？

戦争の危機が回避された翌日、ひよっこり大伯爵がやってきました。まあびつくり！です。

「まあ、お父様！」

とさすがのローゼさんも驚きました。

「おお、ローゼよ！ 無事でなによりじゃ。怖い思いをしたのう
いいえ。わたしには頼もしい仲間がこんなにありますものね！」

ユリアナ・ローゼ社のあまり広くもない社屋を訪れた大伯爵を社員たちと、クラリスと、王女たちと、妖精たちが迎え入れ、にぎやかなことこの上ありません。

「伯爵様、どうしていらしたんです？」

クラリスが訊きました。あんなに「ここから動かん！」と言い張ってたのに。「フム」と伯爵様は息子の嫁に訊きました。

「ローゼはこれからロヴィークまで来るつもりがあるか？」

ローゼさんは苦笑いして言いました。

「今はちよつと無理ですわね。後始末、よりも、これからやらなくてはならないことが山ほどありますからね」

そうです、ユリアナ・ローゼ社はマーマラ海峡の国々と新しい契約を結ぼうとしているのです。彼らがきちんと平和的な協定を結び、同盟を組んだら話ですが。ルピネーの読みでは近々そうなるだろうと思われます。伯爵は言います。

「だからわしが来たんじゃ。おまえさんを喜ばそうと思ってな」

伯爵様は従者が大事に持っていたカバンから小さなつつみを受け取ってローゼさんに渡しました。

「モデストからじゃ」

ラピスの文化都市モスクリンに留学しているルピネー・ローゼ夫妻の一人息子です。

包みを解くと小箱が出てきました。パカッとふたを開けると、ポ

ロンポロンと可愛らしい音色できれいな音楽が流れてきました。オルゴールです。雄大な海を渡る風のように気持ちのいい曲です。小物入れになっていて、金のコインが一枚入っています。いっしょにローゼさん宛の手紙も。

「お母さん。お元気ですか？ お母さんのことだから毎日元気すぎるほど元気にいるのでしょうか。僕も負けずに勉強に励んでいます。先日面白い人物とお近づきになりました。僕よりずっと年上のこちらでは有名な大作曲家です。このコインは彼の曲を演奏する劇場で売られていた記念コインです。今僕は将来彼と組んで何かできないかと夢見ています。これは彼に教えてもらって見よう見まねで僕が作った曲です。では、再会する日までお体に気を付けてお元気で。息子モデストより」

小さく折り畳んだ紙に小さな字でびっしり書かれています。なかなか几帳面な性格がうかがわれますが、オルゴールの曲は素人にしてはなかなかのもので、芸術的なセンスもかいま見えます。現在15歳。将来どんなことをしてかしてくれるのでしょうか？

ローゼさんは嬉しそうにオルゴールとコインを夫に見せびらかしました。コインには有名な歌手なのでしょうか？綺麗な女の人の横顔が彫られています。

「面白えな」

とルピネーはオルゴールを覗き込みました。オルゴールは一曲演奏し終わり、また頭から始めています。

「見せてみる」

ルピネーは奥さんから取り上げるとひっくり返したり耳に当てて中の歯車の音を聞いたり子細に調べだしました。

「俺も今度作ってみるかな？」

息子の作曲はそっこのけで機械の方に興味を持っています。案の定伯爵様に「このバカタレが」と叱られました。

「おのれはそうやってすぐになんにも興味を持ちおる。ちったあ地に足を着けんか！」

「そりゃ無理だ。俺は生まれてすぐからの船乗りだからな。海の上じゃあ地に足の着けようがねえや」

とルピネーは減らず口を叩きました。

「このクマめが。まったく親のし甲斐がない奴じゃ」

「不肖の息子で申し訳ございませんな、大伯爵様」

「おう、おまえのような息子が出来上がるとは思いもよらなんだわ」

ああ言えばこう言うで仲の良い親子です。ローゼさんもニコニコ笑って見ています。

ところで、

「伯爵様、本当にこんなところに来ちゃって、ラピスの方は気にならないんですか？」

とクラリスは訊きました。ルピネーも「そうだ。モデストからの預かり物なら俺に渡せばいいだろう？」と言いました。伯爵様は、「わしがこつちに向かって奴らも面食らったことだろうな。なにせ意味のない行動じゃ。意味と言えば、わしも一度船旅というものを楽しんでみたかったのじゃ。なかなか気持ち良かったぞ。こつちの大陸に来るのも初めてだしのう。フッフッフ、わしがなにを企んでおるか、中央の奴らは戦々恐々としておったじやろう。ま、これだけ混乱させればユリアナたちに手は出せまい。もう片は付いたのだろう？ ではじきにここに報せが来るだろう。そうだな？」

ルピネーはうなずきました。事實はそれからだいぶたって12日後にユークリナで中継ぎされてラピス中央からの報せが伝書鳩によってもたらされることになりました。そこにはユリアナ、アナトリーの母子の軟禁が解かれ、今度は逆にご機嫌取りの接待漬けにされている旨が記されています。しかしそれ以前にラルベル姫の情報網によってロヴィークにずっと早く情報が行き、夢の世界で姫から聞いたクラリスがみんなに教えてやりました。

「さてせっかく来たのだ、わしもしばらくのんびり遊んでから帰るぞ。その後で、クラリスちゃん、ラズベリーアールにご招待しような」

そういう約束でした。果たしてその前にロヴィークに帰れるんでしょうか？

クラリスは海のものに挨拶に行きました。もう一人乗りヨットが大のお気に入りになっています。

海の精にお礼を言って、大ダコと、人魚の坊やに言いました。

「しばらくクレオパトラの海にいてくれる？ あそこの海は安全ですよね？」

海の精に訊くと彼女はうなずきました。クラリスもうなずいて、

「あなたが大きくなったら」

と人魚の坊やに言います。

「あなたの仲間を捜しに行きましょう。あなたもつき合ってください？」

大ダコに訊くと彼はうなずいてくれました。クラリスはニッコリ笑いました。

「ありがとう。でもきつとたいへんな旅になるでしょうからまだまだ何年も先のことになるでしょうね。なんといってもパンサルーザを旅しなくちゃならないんですから！」

パンサルーザ。マーマラ海峡を抜けたテスラ海、その向こうに広がる大海。地球の反対側の、海しかないと言われる世界です。その中心に大きな大陸があるとされていますが、それは伝説で、生きた人間は誰一人行って、帰ってきた者はいないのです。

大きな船に水や食料を詰め込んで、2年か3年平気で海の上で生活できる、そんな設備が必要です。この時代の技術ではとんでもない大冒険です。

「ほんと、どうなっているのかしらねー？」

前回の事件でクラリスは光になって世界中を飛び回り、きっと地球の裏側も何度も飛び回ったと思うのですが、その間のパンサルーザに関する記憶はまったくありません。

クラリスは人魚の坊やにニッコリ笑って言いました。

「いつか、必ず行きましようね。そこがきつとあなたの世界だわ」
この坊やがクラリスの話を理解するようになるのもまだ3、4年はかかりそうです。でもだいじょうぶです、幸い彼には大きな力強いお友だちと、愉快的イルカの仲間たちと、この海を司る偉大な妖精がついてくれるのですから。

大ダコも、この大きさならきつと長生きするでしょう。

クラリスはふと「王女様たちはどうなのかしら？」と思いました。ほんとにどうなのでしょう？

クラリスはヴァイオレット、ルピネー、エレジンといっしょにまたヨットでソロカに戻りました。ネプタは王女様たちに通訳として重宝がられ、すっかり家臣の一人に加えられています。ネプタも自分のルーツである古の王国の王女様に仕えられるのを誇りに思っています。まあ、あの美女軍団といっしょにいられるのですから、これが嬉しくない男なんてこの世にいないでしょうけれど。

ソロカに着くとみんな大喜びで迎えてくれました。まあ、最初の陰險な感じとはガラリと変わっています。男も女も子どもも老人も、喜びに満面の笑顔です。

ルピネーはここを大型船の建造工場および修理工場にできないかと考えています。土地に利用価値はほとんどありませんが、港の設備だけは沿岸諸国随一です。ルピネーの計画にソロカの海賊頭たちも興味津々です。貧乏な国ですから船なんて当然自分たちで自作しています。船大工仕事なんて得意なものです。ルピネーの求めるような大型船建造の知識なんてありません。

「任せとけ。俺あそういうのは得意だ！」

とルピネーは言いますが、自分だって大型船なんて造ったことないくせに自信満々です。でもこの人なら口先だけではないでしょう。

さて、すっかりめでたしめでたしとなるのはまだ少し先なのです

が、取りあえずこのお話はここまで。

クラリスは愛馬ナージャと再会して、ちょっとだけロヴィークに里帰りすることにしました。大伯爵の奥様にもご報告して、またこっちに帰ってきたら、今度はラズベリーアールでしょうか？ また何か事件が起きそうですが、それはまた次のお話で。

取りあえず、めでたしめでたし。

終わり。

第11章 こんどはどこへ？（後書き）

*このお話は苦勞しました。何しろ第1話の「妖精大進撃！」がまったく不人気で。面白く書けたと自分では思っているのですが、その不人気ぶりはかなりショックでした。第1話がこれでは第2話なんて、政治的でめんどくさい、絶対に第1話よりつまらない話でも後の展開に関わるお話なのではしよるわけにもいかず、悩みながら、何度もまったく筆が進まない状態に陥りながら、なんとか完結しました。最初と最後まで読む人もいるでしょうから、お願い！もうこの話は読まなくていいから、次に連載予定の「白鳥姫」はどうかどうか読んでください。そちらは「私版眠れる森の美女」の続編として書いたものです。こちらの「クラリス物語」が間に挟まっています、いいです。「白鳥姫」をどうかどうかよろしくお願いします！

読んでくださった方、本当に本当にありがとうございました。（

2008 / 2 / 11）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6390d/>

密使海を渡る

2010年10月8日15時55分発行